歯学部ニュース

平成26年度第１号（通算125号）

特集　歯学部学生の今

歯学部のクラブ活動紹介

海外大学訪問

目　　次

特集１　歯学部学生の今 ･･ 1
歯学科　２年　内田　　俊／歯学科　３年　山本　　悠／歯学科　４年　川邊万記翁
歯学科　５年　鈴木兼一郎／歯学科　６年　國分　冴子／歯学科　６年　関根彩央里
口腔生命福祉学科　２年　村山　未帆／口腔生命福祉学科　３年　森山　　奏
口腔生命福祉学科　４年　縄田　理佳
特集２　歯学部のクラブ活動紹介 ･･ 16
バドミントン部紹介　歯学科４年　三谷　咲貴
卓球部紹介　歯学科４年　堀　　頌子
特集３　海外大学訪問　SSSV特集 ･･ 20
氏田　倫章・笠原　由伎・五月女哲也
入学者のことば ･･ 27
歯学科　大野　晴日・酒井　佑樹
口腔生命福祉学科　小松　彩夏・吉田　萌乃
う蝕学分野　枝並　直樹
歯周診断再建学分野　佐藤　圭祐
口腔生命福祉学専攻博士前期課程　高橋　明恵
口腔生命福祉学専攻博士後期課程　坂本まゆみ
入学を祝して ･･ 32
学部長・副病院長
総務委員会だより ･･ 34
前田　健康
教授職への年俸制の導入について　ほか
新入生合宿研修を終えて ･･ 41
連載：「大学院に行こう」 ･･ 43
大倉　直人・塩見　　晶・高橋功次朗
学会受賞報告 ･･ 49
眞舘　幸平・岡田　　萌・村上　智哉・三富　智恵・吉羽　永子・井上　　誠・真柄　　仁
留学報告 ･･ 56
佐藤美寿々・川﨑　勝盛
教授に就任して ･･ 61
歯科薬理学分野　教授　佐伯万騎男
診療室・講座紹介 ･･ 63
生体組織再生工学分野　教授　泉　　健次
微生物感染症学分野　助教　土門　久哲・教授　寺尾　　豊
診療技術支援部歯科衛生部門だより ･･ 70
小島千奈美・白井　友恵
素顔拝見 ･･ 73
青柳　裕仁・土門　久哲・長谷部大地・丹原　　惇
学会レポート ･･ 77
井田　貴子・高橋　直紀
学会報告 ･･ 81
同窓会だより ･･ 82
総合診療部を経験して ･･ 87
中田　樹里・中村　　太
歯学部運動会を終えて ･･ 89
歯学科５年　箱山　友祐
歯学部各種委員会 ･･ 91
教職員異動 ･･ 94
入学おめでとう ･･ 102
平成26年度歯学部歯学科入学者名簿・平成26年度歯学部口腔生命福祉学科入学者名簿
平成26年度歯学部歯学科第３年次編入学者名簿・平成26年度歯学部口腔生命福祉学科第３年次編入学者名簿
平成26年度大学院医歯学総合研究科（口腔生命科学専攻、口腔生命福祉学専攻）入学者名簿
国家試験合格おめでとう ･･ 104
第107回歯科医師国家試験合格者名簿・第23回歯科衛生士国家試験合格者名簿・第26回社会福祉士合格者名簿
ミニコラム ･･ 105
編集後記 ･･ 106

歯学部生の今

歯学科２年　内　田　　　俊

「くそぅ。」何食わぬ顔でボソッとつぶやき診療室を出て、私の隣をすり抜けていった男性には、右足がなかった。その背中は何かに焦って、何かに追われているようだった。同情とは少し違う、なんとも言えない心苦しさで胸がいっぱいになった。ああ、この人も精一杯生きているんだな、と。「くそぅ。」その一言に込められた思いはなんだったのであろう。思うように歩けないからそうつぶやいたのか、ただの口癖なのか、真相は不明だが、常日頃からさまざまな患者さんがいる病院を通学路として使っている私にとってこれほど印象的だった患者さんはいない。それ以降、自分は目の前に患者さんがいたら、本当にその心に添えるのかと自問自答を繰り返している。心の底からその人の身の上になって、些細な一言まで気を配り、その感情をともにすることができるのかと。「歯が痛い」「歯がしみる」などの謎の解明と一生付き合う歯科医師を生業として長い人生を送っていけるのかと。

歯科医師という職業は命には直結しないようにも思える。歯を削っても血は出ないし、歯を抜いたところで入れ歯や冠ブリッジなどの治療でカバーできる。ではなぜ私たちは今全身の骨や筋、血管や内臓、また神経や細胞についてなどの勉強をしているのだろうか。正直今の段階ではいまいち分からないが、はっきりとわかることは「医師たるもの、知識不足は許されない。」ということだ。知らない病名の診断、知らない治療、知らない材料の説明なんて出来るはずもない。「知らない」ということは許されない。これから先実際の臨床の場において様々な知識を使うようになるだろう。そのひとつひとつの知識に対しての理由、つまり知識の理由を今学んでいる段階であると私たちは日々の授業の中で少なからず感じている。

私の周りの仲間は将来何を志しているのだろう。過疎地域に行きまともな医療を受けられない方のためにその崇高な知識と緻密な技術を提供するのか、実家に帰り親のあとを継いで開業医となるのか、はたまた大学に残り研究を行いこれから生まれてくる何万人もの命を救えるような大発見をするのであろうか。私たち歯学科２年生40名はこれから先それぞれの道を歩んでいく。あと約５年間で各々がそれぞれのビジョンを構築していくのだろうが、そのために私たちは今座学に身を挺している。座学以外だと早期臨床実習Ⅱといって主に歯科治療の見学実習や人工歯を試しに削ってみるなどといった初歩中の初歩の学習である。クラスは男女問わずいい人間関係を築けていてとても居心地がいい環境である。勉強に部活、アルバイトととても充実した日々を送っているが、今しかできないことを大切にし、様々な社会経験を詰んで、自他のためになるような大学生活をこれからも送っていきたい。

まっせ

歯学科３年　山　本　　　悠

突然ではあるが、以下の文章を上から順に読んで頂きたい。飛ばし読みはせず、順々に、意味を出来るだけ推測しながら読んで頂きたい。

「お隣さんが近すぎると、ギスギスして、時には押しのけ合いもする」
「上と下でよくぶつかり合う」
「昔はとんがってても、年々丸くなっていく」
「子供はいなくなったりするし、屋根に上ったりする」
「動物もいるし、道具もある」
「いるところは、ジメジメ」

これらの文章は特に意味のないものだと、思うかもしれないが、次の言葉で何かが起こるかもしれない。「歯」

「歯」をいう前に分かってしまった人もいるかもしれないが、「歯」という言葉で、意味のなかった様に感じたものすべてが、繋がったと思う。初めは、点と点で一見関係のないようなモノ同士が、ひとたび繋がると、意味をなし、新たなモノも見えてくる。

さて、長い前ふりは終わりにさせて頂き、歯学生の今について書かせて頂きます。拙い文章ではありますが、最後まで読んで頂くと幸いです。

今、一番感じることは「つながり」である。勉学も人でも。

先日、顎顔面再建学で同郷の先生方のご厚意で、オペを見学させて頂いた。舌癌の手術であった。術式は、今の私には理解できなかったが、切除する舌、そこを栄養する動静脈、支配する神経、周囲の筋、神経、動静脈、その他組織は理解できた。なぜ理解できたのかというと、解剖学を学んでいたからである。３年生では、御献体、御遺族のご理解、善意により解剖実習という形で、体の全組織（神経、脈管、骨、臓器など）を実際に解剖して、観察をし、勉強をさせて頂いている。

多くの学生に共通することかもしれないが、今学んでいることが、将来とどのように関係があるのかと、もやもやを感じている人もいると思う。以前の私もそうであった。しかしどうだろう。オペを見学させて頂くにつれ、「つながった」と感じはじめた。今学んでいることが、臨床とリンクしていると、自分自身で感じることが出来た。そのときの気持ちは、うまく表現ができないが、うれしい、という言葉が一番近いと思う。今学んでいることの「点」と臨床という「点」とがつながることで、それぞれの意味も理解でき、新たな何かも見えてきた。３年生になり、そう感じることあった。例えば摂食嚥下リハビリテーション学の勉強会に参加させて頂いたときは、主に生理学、解剖学と、微生物感染症学の研究室で課外活動として実験をさせて頂いたときには、授業内容や感染症関連のニュースと。繋がりを感じたことは、あげればきりがないほどある。点と点の距離は、近いものもあれば遠いものもあるかもしれない、しかし、いったん繋がると、必ず何か見えてくる。

ヒトとヒトもそうである。個という点がつながる、つまり出会うことで、新たな何かが見えてくる。４月に近くの神社で御神輿に参加させて頂いた。参加に至った経緯は、飲み屋さんのカウンターで隣に座っていた方に誘われた、というものである。その神輿会には、色々な職業の方がいて、歯科関連の方もいた。御神輿を担ぐという貴重な体験ができただけでなく、様々なお話も聞くことが出来き、とても楽しく、普段とは異なる視点のお話は、特に有意義だった。普段の生活では、歯科を含む医療系以外の方と話す機会はほとんどない上に、「こういう考え、モノの見方があるんだ」と思うことは、それ以上にない。先述の

先生方も同郷という繋がりであるし、研究室、勉強会に行かせて頂くのも繋がりである。このような、人と人の繋がりからも、新しいモノが見えてきた。

「勉学も人も、繋がると何かが見えてくる」これを、自分の身をもって知ることが出来たのは、私にとって非常にプラスになった。

最後に、私の歯学部ニュースは名言で閉めるというのが、毎年の流れである。今年はこの言葉で閉めたいと思う。読んで頂きありがとうございました。

「MUST SAY（まっせ）～言わなければならない～」

歯学生の今

歯学科４年　川　邊　万記翁

私は今締め切り直前の作家の気分を味わっています。１ヶ月程前に原稿の依頼を頂いた時は早めに仕上げようと思っていたのですが、まだ時間があると延ばしに延ばしているうちに、ついには提出日前日、正確に言えばつい先程提出日当日に日付が変わってしまいました。タイトルは『歯学生の今』、文章を書くのが苦手な私に1,500字埋めるのは並大抵のことではなく、以前友人に相談した際の「個人トレーの制作手順をレポートすれば（笑）」という冗談がとても魅力的な案に思えてきてすらいます。とはいえさすがに実行するわけにもいかないので、私なりに『歯学生の今』を伝えていきたいと思います。

まずは講義についてですが、３年生までのように今日は午後がない、あるいは２限からだ、なんて日は１日もありません。基本的には実習と講義で１週間が埋まっている状態です。１週間の授業の大まかな流れを説明しますと、月曜日から歯冠修復学の講義及び実習、火曜日は歯周病学・口腔病理学、水曜日は欠損補綴学の実習、木曜日は有床義歯学・予防歯科学、金曜日は成長発育学（小児歯科学・矯正歯科学）となっています。歯冠修復学ではインレー・クラウンの製作実習を行い、欠損補綴学では全部床義歯の製作実習を行いました。皆が、というと語弊があるかもしれませんが、やはり多くの人が「実習がキツイ」と言います。実習前には予習用動画を見てあらかじめその日に行う作業を把握しておく必要があり、これを怠るとその日の作業の流れがうまく理解できず、スムーズに実習を行うことができません。また、予習し作業内容を理解したとしても、思うように手が動かなかったり段取りが悪かったりでなかなか自分が思うようにいかないこともあります。しかし、歯科の仕事に直結している実習だけに、避けて通るわけにはいきません。どんなに不器用であっても正しい手順に従い作業を繰り返せば必ずその成果は現れるはずなので、できるようになるまで回数を重ねて実習を頑張らなくてはと思います。とはいえ、やはり実習には多少のストレスを感じることもあってか、水曜を過ぎるとホッとし、皆とても晴れやかな顔をしているように思います。

また、内科学、外科学のような隣接医学の講義もあります。歯科を受診する患者さんは必ずしも口腔内にのみ問題を有しているわけではありません。特に高齢化の進む現代では糖尿病などの生活習慣病を患っている方もいますし、自分でも気づかないうちに何らかの感染症に罹っているといったことも起こりえます。そうした現状を鑑みると、歯科だから口腔内のことだけ知っていれば良いということはありえず、一医療者として最低限の知識は持っておかなくてはなりません。実習や歯科関連の講義を重視しがちではありますがこうした講義も将来歯科医師になる私達には必要なものであることを理解し、講義に臨むことが重要であると感じています。

せっかくなのでクラスの雰囲気についても触れておこうと思います。といっても特筆すべきことはありません、普通に仲が良いです。歯学部では他の学部と異なり、２年次以降は全員が同じ講義を受けることになるため、共有する時間が多くなります。また、３年次の人体解剖学実習をはじめとして様々な困難（主に実習）をともに乗り越えてきたという想いがあり、仲間意識が強いです。と、私から見たらとても良い感じにまとまっているように思うのですが、そう見えないこともあるようです。私達の学年では、教室の右半分に男性陣、左半分に女性陣といったように教室中央に境界線を引いたようにはっきり別れて座っているために、最初の授業の時に驚く先生が複数おられま

した。でも冷戦とかそういうことはありません、仲良いので心配しないでくださいね（笑）。専門的な講義や実習に追われ、大変なことも多々ありますがこれからも皆で頑張って行きたいと思います。

現在締め切りの約１時間前、なんとか文章を書き終えることができ、ホッとしています。私の拙い文章をここまで読んでいただきほんとうにありがとうございました。

歯学生の今

歯学科５年　鈴　木　兼一郎

　お久しぶりです。今年も歯学部での生活について自分が感じたことを書いていきたいと思います。今年は５年になり、臨床予備実習（ポリクリ）が始まった。その実習では５年後期から始まる臨床実習の前に行う臨床を意識した実習となっている。そのため治療の見学など、外来の場に出ることが多くなり、今までの実習とは違い緊張感をもって実習に臨んでいる。さまざまな科を回って、臨床と講義で習ったことが必ずしも一致でないということを感じ、臨床ではより患者様に快適に治療を受けてもらえるように対応しなければならないということを実感した。それには医学という学問の前に、相手への心遣いや分かりやすい説明など、基本的なコミュニケーション能力が重要だと思った。どんなに治療が上手くても、相手としっかりとしたコミュニケーションが成り立っていなければ、意味がない。しかし、医学的な知識なしには治療をすることができない。ポリクリを通して、どのようなことが臨床の場では求められるのか、どのような知識が必要かを理解できたのではないかと思っている。そのため、後期から患者様の治療をするために十分な知識も必要となる。ポリクリの期間中に必要な知識を勉強し、十分に準備してから望めるようにしたい。コミュニケーション能力については、勉強して身に付くものではないと思っている。まだ入学して間もない１、２年生には特に言いたいことであるが、５年に上がる前に日々の生活の中で会話する力、話を聞く力などコミュニケーション能力を身に付けてほしいと思う。それから、５年の８月の下旬にはCBTというテストがあり、この試験に合格しなければ、臨床実習に出ることができない。臨床に出るための最低限の知識を問われる試験である。そして、この試験の合格点数は国家試験の合否にも関係性があるようなので、合格することを目的にするのではなくより高い点数を取れるように、残りの期間も勉強に励んでいきたい。

　ここで、これまでの４年間を振り返ってみたい。歯学部ニュースを書き始め５回目となり、クラスでは歯学部ニュース係となっている。原稿の依頼については、クラスの幹事から直接来るシステムになっている。これまでの５回の内で１回でも歯学部ニュースに自分が書いた原稿を載せてみたいと思った人がいるならば、この場を借りて謝罪したいと思う。そして、来年書いてみたいと思っている人、残念ながらそれは無理である。なぜならこの件の話は自分にしか伝わってこないので、あなたの耳に原稿依頼の話が届くことは、おそらく来年もない。しかし、この歯学部ニュースのおかげで自分は自分の成長を毎年見返すことができると共に、僅かしかなかった文章構成力も少しは上がったのではないかと感じている。話は変わるが、新潟大学全学部の中で１番夏休みの期間が短い歯学部であるが、ついに今年その夏休みがなくなった。そして春休みもなくなる。医学部も含め他の学部は２ヶ月ある夏休みだが、歯学部は２年から１ヶ月。今年も夏休みはあるが、CBTがあるため事実上はなし。春休み期間は臨床実習があるので、今後の長期休みは冬休みのみとなる。臨床実習などで、他の大学に比べ、臨床の場で経験が積めるので不満はない。しかし、学生中に海外旅行などを計画している４年生以下の皆にはこう言いたい。旅行は４年までの長期休みで済ませておくこと。５年でも不可能ではないが、そのためには相当前からCBTの勉強を始めておく必要があると思う。４年生の皆、特に１年生には残り何回かある長期休みを有意義に過ごして欲しいと思う。

歯学生の今

歯学科６年　國　分　冴　子

昨年からたびたびTED Talksを見るようになった。学術・エンターテイメント・デザインなど様々な分野の人物によるプレゼンテーションを動画で見ることができる。

“Where good ideas come from?”

—Steven Johnson

私の最もお気に入りのプレゼンのひとつである。Stevenはイノベーションとなるような革新的なアイディアはどのようにして生まれるかについて提案する。定説を覆すような発明は偉人たちの突然のひらめきによると考えられがちである。しかし偉人たちが実際には元になるアイディアを少しずつ成熟させ、やっとひらめきの瞬間を迎えるまでの途方もない年月について語ろうとしなかったという事実はあまり知られていない。ダーウィンが自然選択説に至るまで数十年間アイディアを少しずつ記したノートが発見されたことはこれの良い一例である。

ある科学者が革新的なアイディアが生まれる環境について調査し記録したところ、それらは圧倒的にミーティングやデータを互いに共有している会話の最中であることが分かった。異なるバックグラウンドを持つ者同士がざっくばらんに話す空間はアイディアが流動的に行き来しあうネットワークの構築を可能にし、数多くのイノベーションが起こった。実例として20世紀を代表する発明であるGPS誕生の秘話をあげている。GPSはあらゆる業界のトップクラスの技術者が結集してできたと語られる。つまりイノベーションは多くの人々がお互いに議論を重ねるうちにアイディアが化学反応のようにカップリングすることで必然的に生まれるのである。

臨床実習がはじまって早10ヶ月、もう終わりに近付いている。１年前の自分と比較して自分自身、成長できたなどと大きい口を叩く気にはなれない。しかしただひとつだけ、決定的な変化があったとすれば『自分ひとりでできることなんてほとんど何もない』と気づいたことだった。

臨床実習はまず何よりも、協力してくださる患者さんの存在がなければ成立しえない。３時間もかかる治療に付き合って頂き、こちらが本気で申し訳ない気持ちを伝えると「仕方ないよ、次もよろしくね」といってユニットを去り、また次の診療には時間通りにきて下さる。感謝の気持ちを伝えるのにどんな言葉を使ったらよいのか分からず、かえっていつもよりも無口になってしまった。

ライターの先生方の厳しさに始めは少し戸惑うこともあった。しかし先生方の指導はどんなときもこちらが申し訳なくなるほど丁寧だった。自分が書いたものに対し赤ペンで一語一句訂正し、またなぜダメなのかまで説明してくださった。先生方との会話では教科書を何度読んでも分からなかったことが嘘のように分かるときもあった。また人と話をするときは、何が分からないのか論点を明確にし、資料をそろえ、かつ自分はこう思うという意見をもったうえで臨むスキルも学んだ。

仲間の存在も大きかった。以前にやったことのある友達にどうやるのか、何が必要かなどをきく

と自分のことのように親切に教えてくれた。時には実習での悩みを共有し、何でもない会話で大笑いして元気になれた。

家に帰ってひとりでいると世の中のほとんどの同年代が働いている中、応援してくれる家族が支えてくれるから今こうやって自分は学生生活を送れていることにはたと気づくこともあった。

臨床実習は大変だった。もう嫌だ、と何度思ったか分からない。それでも患者さん、先生方、クラスの人と話すのは面白かったし、楽しかった。たった12ヶ月では臨床的なスキルはほとんど変わらないかもしれないが、周囲の人々と気持ちよく過ごすために大切ないろはを多少なりとも学んだと思う。何度となく自分ひとりの無力さに落胆した一方で、手をさしのべてくれる人々の優しさが身にしみ、また誰かと何かをしたとき一人では決して得られないパワーを感じた。

イノベーションは大げさだが、どうせやるなら複数の人々が集まったほうがすごいことができるような気がする。必要な人にちゃんと届くように人と人を繋げていくだけでも何か新しいことができるかもしれない。自分に能力はないけれど、有能な人々がお互いの実力を発揮して協力し合える環境を整えていくようなことをしてみたいと密かに思うようになった。

プレゼンの最後をStevenはこの一言でしめくくっている。

“Chance favors the connected mind.”

訳そうとして、『和を以て尊しと為す』という言葉を思い出した。周囲のすべて人々に感謝し、残りの実習をすごしたいと思う。

臨床実習を経験して

歯学科６年　関　根　彩央里

新潟大学に入学して、友人や先輩達の話から、５年生になると大変そうと教えられてきました。何が大変なのかも分からず実感のない漠然とした不安をいだいて、楽しい新潟大学生活の４年６ヶ月が瞬く間に過ぎ去りました。

５年生10月になり、引継ぎ期間が始まりました。私は、基本ともいうべき早期臨床実習システムからして良くわかりませんでした。６年生の先輩の患者さんに対する対応や治療、先生への報告などをてきぱきとこなしている姿は素晴らしく大きく見え、私も出来るのだろうかと不安に押しつぶされてしまいました。そのような私に、先輩方は優しく、一から十まで丁寧に教えてくださりました。診療に当たる先生方は、自分の患者さんを診療、研究を進められたうえで、学生に指導をされています。先生が常に忙しい中でも厳しい研究を貫いていらっしゃる姿を間近で感じることができました。そのような日々の体験が頑張らなければと励みになりました。改めて新潟大学で勉強できて良かったと感謝しています。

臨床実習に出て「臨床に絶対はない。」と講義で教えていただいた言葉の意味が理解できました。実際様々な症状を持つ患者さんがいました。多角的な観点から患者さんの病状を観察すると複数の治療方法の選択肢が生じ、どのような治療方法をとるべきかと悩みました。的確な治療を行うには、勉強することが重要であることを臨床実習を通して分かりました。

私が今まで１番印象に残っている診療は、引継ぎ期間中に１人で行う最初の診療だった抜歯です。抜歯実習の前日は緊張を和らげるため、レポートを読み直し、縫合の練習、頭の中で当日のシュミレーションの３点を幾度となく行いました。それだけ準備したにもかかわらず当日患者さんを待っている間、緊張のあまり診療ユニットの椅子に座りこんでしまいました。しかし、患者さんの顔を見た瞬間、自分の不安な姿を見せてはいけないと思い、平常通り明るく接し、前日まで準備したことをやるだけだと気持ちをどっしりかまえ落ち着くことができました。今後もこの時の緊張を忘れることなく、診療にいかしていきたいと考えています。

６年生になり、クラスメートは１人ひとり異なる症状を持つ患者さんを担当しています。診療するためのレポートを作り、プレチェック、技工物などの締切りに追われる毎日です。私はその日の診療を終え、技工室に戻るとホッとします。技工室にクラスメートがいるので、上手くいかない時はお互いの苦労や悩みを話し解決策を考え、わからないことは教えあっています。失敗し落ち込んでいるときもクラスメートの励ましでモチベーションが上がり、次に向かうことができます。私はクラスメートに恵まれたお蔭でこれまで頑張ってこれたと思います。クラスメートのみんなに感謝しています。

そして６年生は進路を考える時期でもあります。マッチング、国家試験、それに対する対策を講じたりとやることが数多くあります。人生の岐路に立ち、改めて自分は将来何をしたいのか、考

えがまとまらず思い悩みました。友人や先輩や両親に相談したり、先生にアドバイスを頂いたり、やっと自分の将来の進む方向性が定まってきました。

　また、学生として最後の年。学生にしかできないことをしたいと思っています。医局説明会を通して先生方とお話したり、クラスメートと食事をしたりお酒を飲んだり、旅行、学生最後の夏休みも満喫したいと、やりたいことが数多くあります。残り少ない貴重な「今」を充実させたいと考えています。

歯学生の今

口腔生命福祉学科２年　村　山　未　帆

五十嵐キャンパスでの１年間の教養課程が終了し、旭町キャンパスでの専門科目の授業が始まって早くも４カ月が経とうとしています。初めは新しい環境への変化とこれから始まる専門の勉強に期待と不安でいっぱいでした。最近では生活にも慣れ、充実した毎日を送っています。

現在、授業は歯科についての内容がメインで、PBLという問題発見解決型学習法という形態が中心に学習が進んでいます。今まで私達が小中高と受けてきた授業形態は先生から知識を教えていただくというものでしたが、PBLは少人数グループに分かれて行われ、毎回異なった臨床シナリオを基に自分達で疑問を見つけ出し、仮説や学習課題を立て、図書館の文献や教科書を使って調べ学習を行い、それぞれが調べてきたことを発表しあって解決方法を見つけ出すという学生が主体の勉強法です。最初は初めて行う方法に右も左も分からず戸惑っていましたが、回数を重ねていくうちに徐々に慣れてきて、少しずつではありますが初めの頃よりスムーズに議論を進められるようになってきたと思います。自分の専門的な知識がほとんど無く、疑問で頭が一杯になったところから調べ学習がスタートするためとても大変なのですが、その一方で多くの発見があり、分からない所や疑問を持った所を自分の納得がいくまでとことん調べ、理解していく楽しさがあります。そして歯科衛生士、社会福祉士いずれも人を相手にする職業であるため、自分の意見を相手に的確に分かりやすく伝える言語能力だけでなく、相手の話に耳を傾け理解する能力やグループの中で互いに議論を交わし解決方法を見出していくスキルなど現場に出た時に必要となる様々な能力を養うために日々悪戦苦戦しながらも、向上心を持って学習に取り組んでいます。

また、多くの実習や講演を通して机上では知り得ない現場の雰囲気、職員の方々の様子や生の声を聞くことができ、大変貴重な経験になったと同時にぼんやりとしていた将来について考えるきっかけにもなりました。以前は歯科衛生士のイメージとして、歯科診療の補助が中心でその治療の前後に歯磨き指導や歯石取りを行うのが主な仕事だと思っていました。しかし実習を通して、訪問歯科や栄養サポートチームとしての多職種連携、周術期口腔管理の取り組みなど歯科の診療科での仕事に留まることなく、病棟や福祉施設、企業、在宅介護の方の家など様々な場所で活躍することができ、活動の幅が大きく広がっている非常に可能性を持った職業なのだということを感じました。また現在口腔ケアを行うことで全身の様々な疾患の予防につながるということが大変期待されています。予防や口腔保健管理には多くの時間を要し定期的でかつ継続的なメンテナンスが必要不可欠となりますが、人々が健康で豊かな生活を送るというQOLの向上に口腔ケアは大きな役割を果たし、それらを担っていくのは歯科衛生士であるということを感じ、歯科衛生士という職業に魅力と誇りを感じました。

最後になりますが、私たち口腔生命福祉学科２年生は女子19名仲が良く、笑顔の絶えないクラスで、毎日楽しく生活しています。学生の本業は言うまでもなく勉学ですが、学生である今しかできない部活動やサークル活動、アルバイト、ボランティアなどにも精一杯取組み、そこから得られた経験や人とのつながりを大切にして充実した学校生活にしたいと思います。これからは19名という少ない人数ではありますが、だからこそ互いに切磋琢磨し高めあいながら、それぞれの夢や目標に向かって日々精進していきたいと思います。

歯学部生の今（3年）

口腔生命福祉学科3年　森　山　　　奏

グラサン、黒パーカーの出で立ち、手には段ボールの銃（私が作った）。

「ハーハッハッ！俺様はバイキン！甘いものが、だ〜いすき!!!」

そして夏休みの遊園地のステージを彷彿とさせる歯ブラシマンとバイキン親分の戦闘シーン。ヒーローが一度敵に負けそうになるお決まりの演出。「「負けるな、歯ブラシマ〜〜ン‼」」…そんな愉快な劇を24人で作り上げ臨んだ6月のあさひ幼稚園の歯磨き指導実習。園児の反応はすべてが思い通りだったわけではなかったが（バイキン親分の武器に対しての反応がとても良かったことに関して私としては非常に満足。）、それでも園児たちが楽しんでくれ、努力が報われたと感じた。また、自分たちも貴重な経験をさせていただくことが出来た。先生方もリハーサルに対してたくさん意見を出してくださり、それらを元にして次のリハーサルに向けてひたすら練習を繰り返す放課後、昼休み。入学してから2年と少し、24人で過ごしてきたが、思い起こせば皆で一つのものを作り上げたのは初めてだったかもしれない。それも含めて、それぞれにとって実りあるものとなったに違いない。

3年になってからの変化といえば、教室が広くなったこと、朝が早くなったこと、編入生が6人来たこと（足して30人という学科で過去最高人数）、髪が黒くなったこと、そして何よりも病院見学実習が始まったこと、社会福祉の授業が本格的に始まったことである。病院見学では、主に病院のDHさんにつかせていただき、その治療や保健指導の内容などを学ぶというものである。今、相互実習では超音波スケーラーを用いたPMTC、浸潤麻酔下で手用スケーラーを用いたSRPなどと様々な実習を行っている。そのような基礎・相互実習で学んだことを、実際の臨床の場で見学させていただき、自分の技術をさらに高めていくことが出来る。社会福祉の授業に関しては、講義で学び、PBLでさらに理解を深めている。再来年に迫りくる社会福祉士の国家試験は、昨年度の全国の合格率が27.5%という狭き門ではあるが、日々の学習を積み重ねて、全員合格を目指していきたい。

個人的な変化といえば、手話サークルの部長にならせていただいたこと、クラス幹事になったこと、音ゲーのしすぎで視力が落ちたこと、この年にもなってポ○モンシールを集め始めたこと…とまだまだここでは言えないような様々なことがあったが、そんな私の今年度の抱負は「何事にも積極的に！」である。3年になり、先生方からの情報や先輩からのお誘いなどでボランティア活動に参加する機会が増えたように感じる。先日もALS患者さんのイベントのお手伝いをさせてい

ただいた。また、福祉に関する勉強会、シンポジウム、福祉事務所の見学、訪問歯科のお手伝いなどと自分が積極的に外へと目を向けるだけでこんなにもバリュアブルなもので溢れかえっているのだと気付くことが出来た。このように残された2年もない大学生活を有意義なものにできるように、勉学によりいっそう励みつつ3年のうちに色々な経験を積んで自分の人間性を高めていきたい。

4年生になると金曜を除く毎日が病院での臨床実習または福祉現場実習、加えて特論など、先輩方は非常にお忙しくされている。私たちは今の状況でも毎日四苦八苦なのに（休み時間はうつぶせで寝ている人が半数以上を占める）、これから9月のテストをパスして（特に福祉の授業は覚えることが非常に多いのでパスできるかはいささか疑問ではあるが…。）、後期からまたさらに忙しくなると聞いている。ダブルライセンスゆえの多忙さではあるだろうが、そのようなつらいときでも学科全員で支えあって乗り越えていきたい。「こんな学年初めて」と主に良くない意味で多方面から言われる私たち9期生ではあるが、良い意味でその言葉をかけていただけるようになる日もそう遠くないと信じて頑張ろう9期生。歯ブラシマンのように勇敢に、かっこよく、強い心で目の前の手強い敵（当面は夏休み明けのテスト）にぶつかっていきたいと思う今日この頃である。

歯学生の今　―編入生として学ぶ―

口腔生命福祉学科４年　縄　田　理　佳

♪僕らの生まれてくる　ずっとずっと前にはもう　アポロ11号は月に行ったというのに♪とポルノグラフティは歌っていますが、そのアポロ11号と同い年ながら編入学しました縄田です。

もちろん、一緒に学ぶ同級生とは親子ほどの年齢差はありますが、同じ釜の飯を食う（古語ですね）仲間として、違和感なく（？）溶けこみ、毎日ワイワイ騒ぎながら学生生活を満喫しています。他に、新潟県ならではの能楽研究会に所属し、謡や仕舞のお稽古に勤しみ、摂食嚥下機能回復部の特別養護老人ホーム「恵風園」での口腔ケアボランティアに、クラスの有志と交代で帯同させていただいています。

まず、私が編入学する前のことについてお話します。私は歯科衛生士として10年間岐阜県歯科医師会で無歯科医地区での歯科保健活動や障がい者施設での歯科治療を行う巡回歯科診療と障がい者歯科診療所の業務に携わってきました。その後、嘱託職員として障がい者歯科診療所に引き続き５年間勤務し、更に病院・小児歯科・一般歯科・市町村保健センター等で、トータル20数年間歯科衛生士を続けてきました。どの職場でも、先輩歯科衛生士の皆様は、不勉強で無知な私に、根気よく何度も丁寧にご指導くださり、その時に得た知識・技術のすべてが私の宝物です。

ところで、編入生はどんなことを勉強してるの？と聞かれることがよくありますが、歯科衛生士免許を取得しているため３年次の授業は、福祉系科目がほとんどで歯科系科目は１科目のみとなります。じゃあ、他の学生が基礎実習等を行っている時は、何してるの？とこれまたよく聞かれますが、必修科目（教養科目）４科目を受講していました。それでも空き時間があるため、希望する歯学科の講義を３科目受講していました。さらに、後期には毎週水曜日に小児歯科・障がい者歯科と摂食嚥下機能回復部で医歯学総合病院ならではの研修をさせていただきました。これらはコーディネートしてくださった学科の先生方と研修をご快諾くださった諸先生方のご厚意の賜物です。この場を借りて深謝申し上げます。また、試験の時は、年々巨大化する頭の中の「消しゴム」が大活躍し、慣れない法制度や用語に悪戦苦闘しましたが、優しくご指導くださる教員の先生や同級生の全力のフォローがあったお蔭で無事に進級できました。

４年次は、編入生も同じカリキュラムとなり、医歯学総合病院での臨床実習と、福祉施設での社会福祉現場実習があり、並行してPBL、講義、卒論に相当する特論に取り組む傍ら、歯科衛生士・社会福祉士国試対策、就職活動を行います。

昨年、大学でソーシャルワークについて学び、クライエントのニーズの範囲は生活や生き方そのものであり、どう生きていくのかを自己決定するための全人的支援が最重要であることがわかりました。

特に、15年間携わっていた障がい者歯科には様々な障がいのある方とご家族の方の悩みが、むし歯や歯周病などの歯科疾患や障がいによる疾患や病態だけではなく、年を重ねる毎に、家族介護ができなくなった時の生活全般についてと変化していく過程を見てきました。実際に、定期健診を受けていた方もご家族の入院等により、中断しその後の生活がどうなっているのかが把握できなくなることが多くなっていきました。今後は社会福祉士のライセンスを得ることで、このような事例を減らすための医療と福祉の架け橋になれればと考えています。

どんな職種であっても、「その患者様（クライエント）がその人らしい人生を送るために最大限のサポートをしたい」という想いは同じであり、それがどのように行われているのかを今後の病院・福祉施設双方での実習を通じて学んでいきたいと思います。

新潟大学歯学部バドミントン部へようこそ！

歯学科４年　三　谷　咲　貴

◆バドミントン部はこんなところ

　この場をお借りして、歯学部バドミントン部の紹介をさせていただきたいと思います。

　現在、４年生８名、３年生７名、２年生１名、１年生９名の計25名で活動しています。活動場所としては、旭町キャンパスで週２回、五十嵐キャンパスで週１回となっています。主将である私をはじめ、大半が大学からの初心者ですが、先輩や経験者の部員にルール、打ち方、試合の組み立て方など一から教えてもらいます。１年生からの入部でなくてもバドミントンに興味がある方は、初心者経験者関係なく、いつでも入部できます！みなさん、まずは見学からでもいかがでしょうか？

　さて、勧誘はこれくらいにして…歯学部バドミントン部の活動内容についてお話したいと思います。バドミントン部のメインとなる試合は、毎年夏に開催されるオールデンタルです。全国の歯学部生が集結し、良い成績を残せるよう、これまでの練習成果をぶつけ合います。デンタルでは個人戦だけでなく、団体戦も行われます。団体戦では、普段味わうことの出来ない緊張感があり、プレッシャーと戦いながら試合をすることで、精神面も鍛えられます。また、試合をしているときは部員全員で応援をするため、みなが一体となっており、勝てた時の感動や喜びは倍増します。

　自分の実力を試せる場はデンタルだけでなく、５月・11月には東北大学、岩手医科大学、奥羽大学、日本歯科大学新潟生命歯学部、新潟大学の５校が集まり、東北リーグという交流試合を行います。毎年各大学が持ち回りで主幹になるため、それぞれの県に行くことができます。また、６月・10月には市民戦、７月・11月には日本歯科大学新潟生命歯学部との交流試合、12月には部内戦、といったようにほぼ毎月何かしらの場が設けられています。レギュラーにならないと試合に出られない、ということもないので１年生の頃から様々な場で試合ができます。ここまでたくさんの試合に出られるチャンスがある部活は少ないのではないでしょうか。

　もちろん試合ばかりしているわけではありません。部員同士や先輩、先生方との交流の場もあります。お花見に始まり、歯食コンパ、新入生歓迎会、浜コン、デンタル報告会、クリスマス会、忘年会、新年会など様々なイベントがあります。その都度後輩、先輩との仲が深まっているように思います。

新入生歓迎会

東北リーグ

◆最後に

私は大学からバドミントンを始めましたが、現在主将を務めさせてもらっています。初心者である私が部員を引っ張っていくことができるか不安もありましたが、同期の支えもあり、ここまでやってこられました。来月には一大イベントである、オールデンタルが開催されます。あと少しの期間ですが、最後の主将の務めとして、部員が存分に練習できるような部活にしたいと思います。

卓球部と歩む４年目の夏

歯学科４年　堀　　　頌　子

　この度は歯学部ニュースで２度目の部活動紹介をさせて頂ける機会に恵まれ大変嬉しく感じます。

　この場を借りまして卓球部の「今」を少しでも多くお伝え出来ればと思いますのでよろしくお願いします。

　まず、普段卓球部がどのように活動を行っているかを紹介します。

　私達歯学部卓球部は現在合計17人の部員で活動を行っており、火・金の週２回を正規練習、日曜を自主練習としています。

　そのうち金曜と日曜は医学部卓球部と合同で練習に励み、曜日によって違う雰囲気、メニューで練習を行っているのが私たちの部活の特徴であり、大勢の仲間たちとともに卓球という一つの熱いスポーツを通じて交流を深めています。

　現在は旭町第一体育館の建て直しの関係で市の体育館や旭町第二体育館で練習を行っています。新しい環境での活動は慣れないことや不安も多くありましたが、今はそんな環境にもやっと慣れたところです。

　また、今年は有難いことに男子６人、女子２人の合計８人という多くの新入部員に恵まれ、新たに活気づいた新鮮な雰囲気とともに練習に取り組んでいます。

　新入部員のやる気に満ちた姿勢と向上心は私達上の学年にも良い影響となり、４月からさらに部活全体の結束が強くなり、士気も上がったように感じられます。

　様々なタイプ・レベルの部員が集まることで、練習の質や密度が全く異なってくるのを感じているところです。

　さて、この季節になると毎年どの運動部でも恒例であるデンタルが近くなってきました。

　今年のデンタルは８月４日から愛知県名古屋市で行われますが、この大会は歯学部の全国大会ということで、私たちにとって年に一度の一大イベントと言えます。

　この大会で私たちは昨年は女子団体戦で準優勝という結果を残すことが出来ました。

　そして今年は、気持ちを新たに男女共に好成績を狙って頑張ろうと思います。

　男子に関しましては、去年までは人数不足により団体戦に出場するのがやっとという状況でした。しかし今年は新しい多くの新入部員を迎え、部活自体のレベルや練習の雰囲気も大分変化しました。

　また２年生以上の部員も練習を重ねレベルが向上しています。従って今年は男子女子共に去年とは違う形の、さらに高い目標を掲げることが出来るのではないかと思います。

　そしてそれぞれが各自の目標を達成出来、悔いない試合を行えるよう、残り後１ヶ月を切りましたが、今後も一生懸命練習に励んでいきたいと思います。

　ところで、歯学部卓球部は今年で創立から42周年を迎えました。

　OB・OGの先生方は熱心で優しく、練習においても忙しい中ご指導に来てくださったり、常日頃温かい声援、援助を頂いています。

そんな先生方と関わる機会は飲み会が主ではありますが、今年ももう少しで行われる「OB戦」でも交流する機会に恵まれます。

この試合では、OB・OGの先生方にご参加頂き、先生と生徒とで合同チームを作って戦ったり、先生対生徒で試合を行い交流を図る毎年恒例の行事となっています。

この試合には毎年忙しい中県外からも先生がいらしてくださるなどし、先生生徒共に大変盛り上がります。

しかしこの試合では、先生方が大変強いので、現役部員はいつも負けてしまいます。

何年経っても変わらず強力な先生方のプレーを見て、私達現役部員は感動するとともに、自分たちも頑張らねばならない、という気持ちになり、デンタルの前にそれぞれのメンタルややる気を養うのに大変良い機会ともなるのです。

さて、今回は主に今年のデンタルに向けての意気込みと卓球部の様子を紹介させていただきました。

最後に卓球部を支えてくださっているOB・OGの先生方に常日頃の感謝をお伝えするとともに、残り１ヶ月デンタルに向けて暑さに負けず熱い気持ちで練習に望んでいこうという意気込みを込めてこの場を締めさせて頂きたいと思います。

最後まで読んでくださりどうもありがとうございました。

SSSV報告

歯学科３年　氏　田　倫　章

　私は今年の３月に日本学生支援機構（JASSO）による海外留学支援制度（SSSV）プログラムで、インドネシアのジョグジャカルタにあるガジャマダ大学に２週間留学させて頂きました。この場をお借りして留学の報告をさせていただきます。

　今回のSSSVの滞在１週間目、２週間目の内容は全く違うものでした。１週間目はガジャマダ大学が企画した３大学合同プログラムに沿って行われました。今回は徳島大学（男性４人）、九州大学（女性３人）の歯学部生（５年生）と現地で合流して共にガジャマダ大学の歯学部、ジョグジャカルタの文化を学んでいくというものでした。他大学の学生が先に帰国した２週間目は、新潟大学の２人でジョグジャカルタの地域歯科医療を中心に学びました。

　１週間目のプログラムの内容は大学での歯科診療（矯正、歯周、口腔外科、義歯、保存）の見学、歯学部生の授業への参加、学術プレゼンテーション、また自分たちの大学紹介のプレゼンテーション等が含まれていました。他にインドネシアの文化体験も含まれ、世界遺産観光（ボロブドゥール、プランバナン）、ジャワ文化伝統のバティック製作、ラーマヤナ舞踏鑑賞、冠婚葬祭での民族衣装を着る体験などを行いました。また歓迎パーティーも催され、我々はインドネシアの伝統的なダンス、歌などで手厚いおもてなしをうけ、そのお返しに前日深夜まで稽古した日本の伝統的な踊り（阿波踊り、マルマルモリモリ、空手の型）を披露し会場を沸かせました。他大学の学生とは、初日の顔合わせではお互い緊張していたものの、ジョグジャカルタの素晴らしい自然と文化に囲まれた豊かな環境の中での体験や感動を通すことで、自然と打ち解け、素晴らしい仲間と共に本当に充実した日々を過ごすことができました。しかし親密になった分、最後の別れは悲しいもので、涙で前が見えませんでした。

　２週間目は地域医療を中心にした活動が多く、ヘルスセンターへの訪問、小学校訪問、プライベートクリニック（矯正、歯周）訪問、ガジャマダ大学において地元小学生へのブラッシング指導、検診、フッ素塗布、勉強会の見学等を行いました。また生活スタイルも変わりホテル暮らしからホームステイへと変わりました。私がお世話に

小学校訪問にて

伝統楽器の演奏

なったDr. Nunukの家庭は、高校生の男の子（Zufa）、中学生の男の子（Ariq）、幼稚園児の女の子（Fica）の３人の子供がいて、家の中はいつも賑やかで、仲間を失った悲しみを子供達が嘘のように忘れさせてくれました。大学内においても我々のことをガジャマダ大学の学生がしっかりと対応してくれ何不自由なく２週間生活することができました。

今回のSSSVを通して他大学の学生との交流が貴重な経験となりました。ガジャマダ大学の学生を通して勉強に対する姿勢の違いを認識できました。歯学に関する授業では英語を用いて行われているため英語は堪能であり、また授業に対しても積極的で日本の学生よりも勉強意欲に満ち溢れていました。事前に講義に対して予習し臨んでいる生徒が多く、講義は生徒が質問して先生が答える双方的な形式であり、日本との講義のスタイルの違いに驚きを通り越し危機感さえも感じました。徳島大学、九州大学の学生とはプログラムを通して共に行動し、課題に取り組んだり、勉強、大学生活、将来について様々なことを語り合いま

診療を見学したあとの集合写真

ボロブドゥールにて集合写真

歓迎パーティでの写真

ホームステイ先での写真

した。３大学合同の機会がない限り、地域も違うため学生のうちに交流することはめったにありません。お互いに刺激し合える仲間をつくることができて本当に幸せに思います。仲間に負けぬように自分の理想としている歯科医師像を見据え、今後の学生生活を目標に向かって着実に努力していきたいと思います。

最後になりましたが素晴らしい経験をさせていただき心から感謝しています。また私にこのような機会を紹介してくださった石田陽子先生、ありがとうございます。

SSSV報告
ーインドネシア大学を訪問してー

歯学科6年　笠　原　由　伎

私は2014年３月、インドネシアの首都ジャカルタにあるインドネシア大学にて、日本学生支援機構（JASSO）による海外留学支援制度（ショートステイ・ショートビジット）の２週間にわたるショートビジットプログラムに参加させていただいた。滞在期間中は大学の歯周病学教授のお宅でホームステイをし、有意義な環境で過ごすことができた。

人口1000万人を有するジャカルタは、想像をはるかに超える大都会だ。メインストリートには高層ビルが立ち並び日本企業のビルも多く見られる。いたるところで新しいビルやマンションが建築されておりこの都市の急成長ぶりは目を見張るものがあった。しかし、そのビル群とその背に広がる瓦屋根の家々とではあまりにも対照的だった。また道路には車・バイクが溢れ、排気ガスが立ち込める渋滞が永遠と続いていた。渋滞を横切り道路を渡る人や、車の間をぬって歩き、新聞やフルーツを売り歩く人もいた。いろいろな点で落差に驚かされたが、世界有数の経済と政治の中心地であることは間違いなかった。インドネシア大学はこのような熱気と勢いに溢れる街に位置していた。

インドネシア大学は新潟大学のように２つのキャンパスを有しており、五十嵐キャンパスの様な多くの学部が在る“デポキャンパス”と、旭町キャンパスの様に医療系の学部からなる“サリンバキャンパス”に別れている。サリンバキャンパスは歴史ある築100年を超えた伝統的な建物で、一方デポキャンパスは改築したため新しくて近代的なキャンパスである。歯学部生は、１～３年まで近代的なデポキャンパスにてファントムを使った実習やPBLを通して基礎を学び、４年生でサリンバキャンパスに移り半年間研究室にて論文を完成させ、４年後期から１年間患者さんを受けもち臨床実習を行う。

私は現地の学生のそのようなカリキュラム１つ１つを見学し、説明を受け、時に授業に参加させてもらった。学生と話す中で常々感じていたのが彼らの英語力の高さだ。それを如実に表していると感じたのは参加したPBLの授業である。学生達がパワーポイントを英語で発表し、積極的に討論している姿は実に印象的であった。難しい専門用語をわかりやすく噛み砕いて説明をし、工夫して英語で発表を行う。互いに知識を深め合い切磋琢磨する姿は素晴らしかった。挙手が次々と起こり英語が飛び交う授業の中に、彼らの勉学への意欲、熱意も目の当たりにし、日本学生である私たちに足りないものについて深く考えさせられた。

また、見学している中で最も衝撃を受けたのはインドネシア大学生の臨床実習のミニマムリクワイメントの多さだった。１年間の臨床実習を通して最低限行う課題があり、それらを決められた症例数こなさないと卒業することができない。彼らは私たちのリクワイアメントの何倍もの量をこなす必要があるため、自ら患者様探しをするそうで、時にはお金を払って自分の患者様になってもらうと聞いた。現地の学生ならではの悩みを知り驚いたが、学生の間に私たちよりも豊富な経験を積むことができる点を羨ましく感じた。

しかしながら、清潔・不潔域についての概念はまだ乏しいようで、抜歯や小手術をする際に滅菌手袋を使用していない場面を見た。衛生面の意識が低いのではと感じる時があった。

最後に、インドネシア大学を訪れることにより、自分の英語力の低さを痛感し、また限られた時間・経験の中で日々の診療をより濃くて深いものにすべきであると思えた、いろいろな刺激ある２週間となった。この経験を活かして残り短い学生生活を充実したものにするよう励みたい。

SSSV報告

歯学科６年　五月女　哲　也

３月２日から16日までの２週間、タイ南部の都市ハジャイにあるプリンス・オブ・ソンクラー大学（以下PSU）へ日本学生支援機構（JASSO）による海外留学支援制度により、同期の加瀬とともに短期留学させていただいた。日本とタイにおける歯科医療の違い等真面目な内容については笠原さんがしっかり書いてくれていると思うので、ぼくはタイでの生活について記してみたい。

留学前に僕が持っていたタイのイメージは、暑くて雑然としていて物が安くて食べ物が辛くて果物がおいしくてゾウがいて海がきれいな微笑みの国といったもので、そもそも汗っかきで潔癖症気味で辛いものが苦手なぼくにとって短期とはいえ留学することはとても勇気がいるものだった。加瀬の強い勧めもあり決断したのは出発まで１カ月を切った頃で、現実味のあまりないままに羽田空港からバンコクのスワンナプーム国際空港へと降り立ち恐ろしいほどの熱気を感じた時、やっとぼくはタイに来たのだな、と実感したものである。

バンコクで飛行機を乗り継ぎ１時間ほど、日本から約７時間で到着したハジャイは南部最大の都市とされ、中心地は栄えており高層ビルが立ち並ぶ一方、ひとたび路地に入れば野良牛が草を食むという非常に雰囲気のよい街であった。やはりとても暑く、外に出た瞬間に汗をかいた。湿気がない分予想していたより過ごしやすく、雲ひとつない青空で晴れ晴れした。余談だが、タイ滞在14日間中でゾウを２回見た。１頭は車のような表情で道路を歩いており、１頭はレストランに餌をねだりに来た。やはりタイといえばゾウだ、と心躍った。

ぼくたちは寮のようなところに宿泊させていただいたが、シャワーは温度調節出来ず水しか出なかった。トイレの紙は下水道の関係か流れにくいため備え付けておらず、隣にあるシャワーで洗うのがタイ流らしかった。果たしてここで２週間過ごすことができるのか、と愕然としたが次の日には慣れたのでなんの問題もなかった。羽虫は外にはたくさんいたが室内には入ってこず、こぼしたジュースを狙い集まってきた大量の真っ赤なアリは殺虫剤で一撃だった。生きる力というのは苦境に立たされてこそ磨かれる、と感慨深い思い出である。

PSUの同級生たちはぼくらをゲームセンター、ボウリング、ラフティングなどに連れ出してくれた。太鼓の達人では新記録を更新し、ボウリングはぼくらが１位・２位を獲得しカッコいいところを見せられたが、ラフティングでは流れのないところですら転覆し、岩場に乗り上げ、爪が割れ痣を作りダントツで遅く苦笑いされた。海へも行った。クリアで信じられないほどきれいだったが、もっときれいな海はたくさんあるらしい。素晴らしい国である。

そして食事である。普段は甘口しか食べられないぼくにとって食べ物はこの旅で最大の心配事であり、辛いものばかりで何も食べられず、ガリガリに痩せてしまうことを心配しすぎるあまり古町のタイ料理屋さんへ修行に繰り出したほどである。実際のところ食べ物は期待に違わず全て辛

く、「これなら全然辛くないよ、甘いくらいだよ」と勧められたものすら辛かった。だがなぜだか不思議とおいしく食べることができた。日本人の口に合うようでほぼ全ておいしく、ネギをなにかの皮で包んだまんじゅうのようなやつだけが唯一口に合わなかった程度である。しかも屋台の食べ物はとても安く、１食300円程度でお腹いっぱい食べることができた。極めつけはマンゴーで、日本ではあじわったことのないほどの甘さに感動した。これを食べるためだけにタイに行ってもいいくらいだ。ドリアンも食べたがいい経験になった。もう食べなくて大丈夫である。

タイの人々はみなやさしく親切であった。同級生は大きなテストが近いにもかかわらず時間を割いてくれた。タイ語がわからないぼくたちのためタイ語英語辞典を作ってくれ、ぼくたちが困らないように気を配ってくれた。街の人も目が合うと必ず笑顔で挨拶をしてくれた。コインランドリーの使い方がわからず汗だくになっていたぼくたちを助けてくれた警備員のおじさんにはこの場を借りてお礼を言いたい。

このようにタイは暑くて物が安くて食べ物が辛くて果物がおいしくてゾウがいて海がきれいな微笑みの国であった。最高の２週間であった。

海外に興味はあるけど…と少しでも思う人はためらわず是非１度挑戦してみてほしい。きっと素晴らしい時間を過ごせるはずだ。

入 学 者 の こ と ば

入学者のことば

歯学科1年　大　野　晴　日

あれだけ地元の大学には進学したくない‼県外へ進学したい‼と、思っていた1年前の今頃は、まさか新潟大学歯学部に進学するとは思ってもみませんでした。しかし、思い起こしてみれば、高校在学時に受験先を最終決定するきっかけが私にはありました。高校のカリキュラムの一環で新潟大学歯学部のオープンキャンパスに参加しました。実際にプラスチックの模型の臼歯を削る体験や口腔リハビリテーションに関する講義を受けて、超高齢化社会において益々重要となる、QOLの向上に対する歯科保健医療の役割についてお話をお聞きすることができました。この経験が受験先決定の一番の理由となるとともに、将来歯科医師として地元である新潟の人々の健康長寿の実現のために貢献していきたいという目標となりました。

部活動では大学生を機にずっと挑戦してみたかった弓道部に所属しました。なかなか上手くいかないこともありますが、先輩方にも恵まれ丁寧に指導していただいています。今年新潟で開催されるデンタルに向けて、とても楽しく練習に励んでいます。

大学生活が始まって数ヶ月がたち、五十嵐キャンパスでの授業にもすっかり慣れてきたと思っていたら、あっと言う間にテストに追われる時期になり一学期が終わりそうなので驚きです。1年生の授業はGコード科目ばかりため、歯学部生になったという実感は湧かないのではないかと思っていました。しかし、いざ早期臨床実習で白衣を着て外来での実際に患者さんに付き添わせていただくことや、様々な専門の科の見学を通してこれからの6年間を通して、歯科医師を目指すという意思が固まりました。

歯学部は他学部とは異なり、同じ学部生との繋がりが卒業しても強い学部です。1年生は赤塚での合宿や運動会を通してずいぶん仲が深まりました。これからの5年間、ないしは3年間は今以上に困難な問題に立ち向かうことになるとは思います。支えてくださる家族や先生方への感謝の気持ちを忘れずに、共に切磋琢磨して行きたいと思います。

入学者のことば

歯学科1年　酒　井　佑　樹

私が新潟大学歯学部に入学して、早いものでもう3カ月が経ちました。新潟に来てからの3カ月間はとても中身の濃いもので、新潟という慣れない土地での一人暮らしなど、様々なことにあたふたしたことや、4月の入学式後すぐに海で友人たちと大はしゃぎしたことなどが今ではもう、ずっと昔のことのように思えます。

歯学部に入学したとはいえ、まだ何も知らない私にとって、早期臨床実習は大きな刺激になりました。実際に白衣を着て院内の様々な科を回り、見学をさせていただきました。想像以上に数多くの科があり、どの科でも先生方が全力で患者さんに向かっていました。中でも、私は口腔再建外科・顎顔面口腔外科を見学し、口唇口蓋裂のお子さんの症例を見させていただいた際、「お子さんがショックを受けるよりも母親が自分を責めてしまうことがある。」と先生からお聞きした時に私は、歯科治療は患者さんを治療して治すだけでは

なくて、治療を通して患者さんの周りの方まで救うことのできるものなのだと、はっとさせられました。すべてのことが新鮮で、自分の入学した学部にはこんなにも多くの学ぶことがあるのかとわくわくすると同時に、さらに身の引き締まる思いがしました。

私は医歯学合同のソフトテニス部に入部しました。先輩方はみんな優しく、強い向上心を持って練習が行われているので、部活が本当に楽しいです。医歯学合同なので医学科の人や、看護学科の人など歯学部とは違う様々な人と触れ合うきっかけとなったことも私にとっては大きな財産です。

最後に、歯学部１学年は総勢約60人という他学部に比べて小さい学部です。しかしその分、皆との距離も近く、協力し合えるいい学部だと感じています。今後５年間、または３年間共に大学生活を過ごしていく中で様々なことがあると思いますが、１学年のこのメンバーならどんなことでも乗り越えられると確信しています。自分たちの将来に向けて、互いに切磋琢磨し、励まし合いながら、これからの大学生活を充実した素晴らしいものにしていきたいと思います。

大学に入学して

口腔生命福祉学科１年　小　松　彩　夏

口腔生命福祉学科に入学してあっという間に３か月が経ちました。入学してから現在までに様々なことがありました。まず合格発表を終え、すぐに新入生のオリエンテーションに参加しました。学科内に同じ高校出身の人がいない状況で、なかなか人に話しかけることができず、これから友達を作ることができるのか不安でいっぱいでした。しかし、歯学部の合宿などで交流した人たちと、その後の講義や休み時間などでよく顔を合わせるうちに自然に集うようになりました。今ではかなり友達が増えています。また、高校までと授業形式の違う大学の講義にも少しずつですが慣れてきて、気持ちに余裕ができつつあります。ただ、初めての試験も近くなり、単位が取れるか不安な気持ちでいっぱいですが、頑張っていこうと思います。

また、私は医学部合唱団に入団しました。入団のきっかけは高校の先輩からの誘いでした。しかし、合唱団の中には歯学部の人が一人もいなかったので、少し不安でした。入団したあとも、練習場所が医学部の建物内であるなど慣れないことも多く、緊張の連続でした。しかし、医学部の優しい先輩方が話しかけてくださったり、学部を越えた同期のみんなとの雑談もできたりして、徐々に部活にも馴染めてきました。今ではこの部活に入団して本当によかったと思います。来年度からは歯学部からの入団者が増えるように勧誘活動を頑張りたいです。

さて、私は大学入学前から研究の道に進みたいと思っていました。今でも研究に対する興味は尽きず、大学院に進学したいと思っています。今は入学前から興味を持っていた嚥下の分野や、この間の新聞に掲載されていた歯周病と糖尿病の関係についての分野に特に興味を持っています。口腔生命福祉学科の学生でも大学院へ進学できるとお聞きしたので、ぜひとも進学したいと思います。そのためには、教養科目も含めこれから学ぶすべての講義で一生懸命に勉強して、学んだ知識を頭に刻み込んでいきたいと思っています。

入学者のことば

口腔生命福祉学科１年　吉　田　萌　乃

他県出身である私は、新潟大学に入学してすぐの頃、人数の少ない学科の中で友達ができるかどうかや、大学での勉強法、履修登録はしっかりできるのかなど、たくさんの不安を感じていました。しかし、自分と同じように寮に住んでいる学科の子が数人おり、その子たちと仲良くなれたので履修登録などの不安もなくなりました。

また、４月にあった歯学部の合宿では同じ学科の子でまだ話していなかった子たちとも仲良くなれたし、歯学科の子たちとも話す機会があり、そ

こで改めてこの歯学部のなかで頑張っていこうと思いました。

毎週金曜の早期臨床実習では患者役実習、見学実習、患者付き添い実習を経験しました。まだ1年生の私は使う器具の名前やしている処置の方法などわからないことだらけでしたが、見学実習では治療室での歯科医と歯科衛生士の動きや、患者さんとの接し方など雰囲気をつかむことができました。患者役実習では自分が患者側になることで普段患者さんがどのように感じているのか、どのように治療されているのかなどがわかりました。患者付き添い実習では、病院のなかを案内することで自分も病院内の設備を理解することができました。知識がまだないことで、より患者さんに近い立場でいろんなことを感じることができたのはとてもいい経験になりました。

それから私は大学生活を送るうえで部活動やサークル活動も楽しみにしていました。中学、高校とソフトボール部に所属していた私は歯学部野球部に入り、マネージャーをしています。マネージャーは初めて経験することですが、先輩方はみんなとても優しいし、大好きな野球に関わることができるので毎週の部活はとても楽しいです。

新しい環境での大学生活は大変な時もありますが、とても充実した毎日を送っています。大学生活の4年間を無駄にせず、専門知識を学ぶことはもちろん、さまざまなことを経験して、自分の目指す歯科衛生士になれるようにしたいです。

入学者のことば

う蝕学分野
大学院1年　枝　並　直　樹

今年度より、新潟大学大学院医歯学総合研究科、う蝕学分野に入学しました枝並直樹です。私は43期生として2013年に新潟大学歯学部を卒業しました。研修は東京医科歯科大学で行っておりましたので、2013年3月：新潟大学歯学部卒業、4月から9月：東京医科歯科大学、10月から3月：井荻歯科医院（研修協力型施設）、2014年4月から現在：新潟大学う蝕学分野と短期間にころころと場所を変えて勉強させていただいています。

う蝕学分野への入学は学生の時から興味を持っていました。東京での研修医生活を経験し、やはり出身大学で、腰を据えて勉強、研修を積むことが自分にとって一番合っていると思い、学生時代よりお世話になっておりました重谷佳見先生に連絡をし、入学させていただくこととなりました。

いざ大学院生活をスタートすると、すぐに様々な問題点に悩まされました。新潟大学にお世話になっていなかった1年間の間に、病院外来は一新され、学部棟に関しても改築により教室、研究室の場所が大きく変わってしまっていました。不安の中でスタートした大学院生活でしたが、優しく気遣ってくれる先生方、大学院の先輩方に助けていただきなんとか4ヶ月を過ぎようとしています。

大学院ではこれまでに経験してこなかった「研究」が加わり、ゼロからのスタートでわからないことばかりですが、全く新しいことを始めるということは非常に刺激になっています。

臨床においても数年多く経験を積んでいる大学院の先生方、あるいは、逆に1年少ない研修医と一緒に臨床を行うことにより、「来年は今のこの先生と同じようにできなければいけない」あるいは「自分よりキャリアの短い研修医には抜かれないようにしなければいけない」といった緊張感がとてもモチベーションにつながっています。

まだまだ始まったばかりの大学院生活ですが、進路として良い選択ができたと思っています。大学院卒業時、あるいは、何十年後に思い返した時、重要な4年間だったと思えるように、これから有意義な時間を過ごせるよう努力していきたいと思っています。

入学者のことば

歯周診断再建学分野
大学院１年　佐　藤　圭　祐

「大学院はブラック企業？サービス残業は当たり前？」今クール火曜日に放送されていた某テレビドラマを見ながら考える。ブラック企業の社長の実態をえがいたこのドラマ。世間からはブラック企業と揶揄されているが、社員はやりがいをもって働いている、そのギャップが面白い。そもそもブラック企業とは主観的な考えであり、外部の人間があれこれ言うことは良くないと私は思う。例えば、同じ仕事をしていてもやりがいがあると感じる人もいれば、ブラックだと感じる人もいる。大切なのは今の仕事が好きかどうか、やりがいを感じるかどうかだ。

私の場合はどうだろう。今年度より新潟大学医歯学総合研究科、歯周診断再建学分野の大学院に進学した。最初の１ヶ月は慣れない研究、思い通りにいかない自分の診療、やりたいけど何もできない自分に腹が立ち、お酒に逃げる毎日を送っていた。しかし、できることが少しずつ増えていく中で、今の仕事、勉強にサビ残ではないやりがいを感じ始めている。

「お前たちはこのボールペンだ。書くために使われて、インクがなくなれば使い捨てられる。お前たちに付加価値はあるか？お前たちにはいくらの価値がある？」ドラマの中でブラック社長が学生たちに問いかける。人間の価値を評価するのは他人であり、それはあくまでも客観的な意見だ。数多いる歯科医師の中でどのように他との差別化を図っていくか。歯科医師というベースに付加価値をつけることの重要性、必要性を感じる。

大学院で得ることできる学位、歯周病認定医などの資格は、患者さんにも理解されやすい魅力的な付加価値だと思う。しかし、付ける価値ではなく身につける価値というものも存在すると私は感じる。それは、広い視野で物事を考えることであったり、患者さんへの対応の１つ１つであったり、広い交友関係であったり…。

歯科医師として今の自分にどれほどの価値があるか。そして、そこにどんな付加価値をつけていく（身につける）ことができるのか。大学院での生活を通して確かめていきたい。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻
博士前期課程１年　高　橋　明　恵

４月より、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に入学致しました。４月７日に朱鷺メッセで行われた入学式にも出席し、これからこの大学で学んでいくのだなあと身の引き締まる思いでした。

そしてそれから、早３か月が経ちました。学生生活は20数年ぶりです。あまりに久しぶりの学生生活で大学のシステムなど戸惑いもありましたが、同期の人達やご指導くださる先生方のもと充実した学生生活を送っております。

大学からもメールを通じ、様々な情報が配信されてきます。学びたい気持ちがあれば、環境は整っているのだなあと日々感じます。この様な素晴らしい環境で学べることを感謝しながら勉強に励みたいと思います。

私たちの学年はすべて社会人学生です。顔を合わせる機会は少ないのですが、それぞれの勤務の都合を合わせての集中講義などで、たまに会うことができます。講義ではそれぞれが今後に活かそうという姿勢が感じられ、質問内容もより現場に即した内容の質問などが出され刺激にもなります。

私自身も授業に取り組む姿勢や気持ちは明らかに、20数年前の学生時代とは違っています。今の気持ちや姿勢が若いときにもあったなら…後悔先に立たずです。

研究は以前の勤務に関係のある、小学校での歯科健康教育について取り組んでいます。現場で感じていた日々の疑問や課題も多くあります。それ

らについて、ひとつひとつ検証しながら進めて行きたいと思います。行き詰まることも多いのですが、新たな視点で先生からご指導やご助言をいただくことも多々あり、また頑張ろうという気持ちになります。

歯科衛生士は今、多職種と連携を取りながら専門性を活かすことが求められています。

時代が求める役割を踏まえ、さらに前進して行けるよう頑張っていきます。

今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくおねがい致します。

大学院に入学して

口腔生命福祉学専攻
博士後期課程１年　坂　本　まゆみ

人との出会いは、楽しくまた自分が成長できる機会でもあると思っています。

私は４月に社会人大学院生として入学しました。歯科衛生士として歯科医院やリハビリテーション病院などの臨床経験を経て、３年前より高知県で唯一の歯科衛生士養成の短期大学に勤務しています。大学院に入学したとはいえ、900キロ離れた遠隔地から受講参加しています。本当は、自分が学生として再びキャンパス生活を楽しみたい！学生に戻りたい！という思いは妄想にとどめて…しかし、その妄想をする暇もなく日々の業務に追われているのが現状です。

社会人大学院生のほとんどは、仕事時間外にレポート課題をこなしている面では、遠隔地も同じ条件ですが、気持ちに余裕がなく不安ばかりが先行します。入学前も不安でしたが、それでも入学したいと考えたのは、口腔生命福祉学専攻の特色である“摂食や口腔機能や食介護に関すること、口腔を中心とした生命医療科学を基盤としながら、保健・医療と社会福祉学領域と学際的研究を推進できる指導的教育研究者及び地域・国際社会において指導的役割を果たせる高度専門職業人を養成する”というところに魅かれました。

私が今まで歩んできた内容を形あるものとして、また私自身に不足している「根拠をもって」というところも研究を進めることで、教育の現場にも還元できるという思いがありました。もう１つ、本大学院を卒業された他県の歯科衛生士養成学校の教員からも、心強い後押しがあり手厚くご指導していただけるとも伺い決めました。確かに、レポート課題や多くの論文などに圧倒されて四苦八苦してうまくいきませんが、周囲の理解や今まで出会った方々の温かい励ましの言葉・お顔などが浮かぶと、くじけずぶれないよう自分に言い聞かせています。

“自分には難しいと思えることにも挑戦する”をモットーに、苦しいことも楽しむ気持ちで、少しでも将来の形が見えてくるよう邁進していきたいと思います。

入学を祝して

歯学部長　前　田　健　康

平成26年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。また保護者ならびにご家族の皆様の喜びもひとしおと拝察いたします。本日、新潟大学歯学部に多くの新入生を迎え入れることができましたことは、私ども教職員にとっても、この上もなく喜ばしいことであります。これからの学生生活の中、私どもとともに、日々進歩する歯科医学・医療、口腔保健福祉学を学び、来年、創立50年を迎える新潟大学歯学部のさらなる歴史を築いていきましょう。

歯学部では、歯学・口腔保健福祉学の分野に貢献する専門職業人の育成を教育目標としています。諸君がこれから学ぶ新潟大学歯学部では「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。君たちの選んだ職業には生涯にわたって、自ら学んでいくという態度が不可欠です。私ども新潟大学歯学部の教育スタッフは、学部教育を生涯学習の最初の時期と位置づけ、課題探求・問題解決能力の育成を重視し、その後に続く学習を通して、専門性を主体的に向上させうる人材を養成することを基本認識としています。本学部では課題探求・問題解決能力の育成の観点から、Problem-based learning（PBL）という学習方法を導入しています。このPBLでは教員は学習者の補助者にすぎず、「学習の主体は学生である」という概念で、学習が進んでいきます。この教育手法の主眼が「学生自身が自ら学ぶ」ということにあるのはいうまでもありません。また、歯科医療・口腔保健医療教育の集大成である臨床実習は、新潟大学医歯学総合病院を学びの場として、学生諸君が担当医の指導の元、診療参加・実践型の臨床教育を展開しています。このように新潟大学歯学部の教育の主役は、教員ではなくて、学生諸君です。

平成16年度の国立大学法人化により、全国国立大学歯学部同様、私ども新潟大学歯学部も厳しい競争的環境の中に置かれています。新潟大学歯学部はこの厳しい競争的環境の中、各種競争的資金を獲得し、次世代を担う若手人材の育成に力を注いでいます。平成18年度の文部科学省事業「特色ある大学教育改革支援プログラム」、平成24年度の文部科学省事業「大学間連携共同教育推進事業」に採択され、全国歯科大学・歯学部のモデルケースとして高い評価を受けるとともに、歯学教育改善の先導的な役割を期待されています。また、大学院課程では平成17年度「魅力ある大学院教育イニシアチブ」、平成20年度には「大学院教育改革支援プログラム」に採択され、学士課程から大学院課程まで、高い教育の質を担保し続けています。また、平成21年度には「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に歯学部単独のプログラムとして、全国で唯一採択され、近年では学部学生の海外交流事業に平成23年度から４年間連続で採択され、グローバルに活躍できる人材の育成にも力を注いでいます。

厳しい国家財政の中、学生教育環境整備にも力を注ぎ、歯科治療をシミュレートする実習設備（ファントーム実習設備）、学生診療用の歯科ユニットが更新・整備され、各種教材、教育機器の整備・充実にも努めています。また平成25年２月からは歯学部校舎大型改修工事が開始され、この秋からの第３期工事の終了とともに明年夏には17,500m^{2}の校舎改修が完了します。これらの高度かつ快適な教育環境を積極的に活用し、自己の目標達成のために、切磋琢磨し、たゆまない努力をお願いします。

勉強の話ばかり致しましたが、20代前後のこの時期、勉強ばかりだけでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学部以外にも多くの友人を作り、教養のある社会人となるよう人間性を磨いてください。そして、社会の期待に応える医療人を目指し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時に、平成26年度入学生および保護者の皆様全員でまた朱鷺メッセで喜びを分かち合いましょう。

入学を祝して

医歯学総合病院総括副病院長
（歯科担当）　興　地　隆　史

全国各地から難関を突破して新潟大学歯学部の一員となられた歯学科・口腔生命福祉学科の新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。これからの学生生活が楽しく充実したものとなりますことを、心から祈念いたしております。

新潟大学医歯学総合病院歯科系診療部門は、新潟大学歯学部附属病院として開院以来、環日本海地域における歯科医療の拠点として高度・専門的な医療を提供するとともに、教育機関として多くの優れた医療者を世に送り出してまいりました。病院での実習は、机上の勉学だけでは決して習得できない「医療の実践」を学ぶ上で非常に重要なものですが、皆さんも早期臨床実習でその一端を肌で感じることができたのではないかと思います。さらに本院で行われる臨床実習は、言うまでもなく学生生活の締めくくりとして位置づけられますが、ここでも定評ある診療参加型の実習体系が整備されています。皆さんには、これらの充実した実習カリキュラムを通じて、医療のプロフェッショナルとして必要なさまざまな力を、意欲を持って培って頂けることを期待しています。

また、歯学部は言うまでもなく「国家試験受験資格が取得できる免許学部」であり、この意味では皆さんのゴールは極めて明確なものとなっています。ほとんどの皆さんは現在、五十嵐キャンパスでの教養科目の受講が学生生活の主体となっていると思いますが、今後は旭町キャンパスで専門科目が続々と開講され、医療従事者としての自らの将来像が日増しに具体的なものになることでしょう。また、医療系の学部である以上、医療を実践するための専門的知識や技能に加えて、医療従事者に求められるコミュニケーション能力なども習得することが皆さんの目標となります。本学歯学部のカリキュラムでは、これらを順次体系的かつ実践的に学ぶことが可能となるよう、レールが敷かれた形となっています。従って、皆さんの努力次第であることはもちろんですが、知識や技術を着実に吸収しながら前進していただければ、ゴール地点への到達は決して困難ではないでしょう。

その一方で、医療人としての皆さんの今後の長い道程の中では、学生時代は始発駅から次の停車駅までの僅かな時間であることも事実です。歯科医学・歯科医療はまさに日進月歩であり、我々にはこの職にある限り、膨大な情報を整理しながら、常に自分の知識をアップデートすることが求められます。現時点では教科書にも記載されていない事柄が、数年後には当たり前の知識となることも決して珍しくありません。また、高度の歯科医療を実現させるための技術の習得、さらには患者様や医療スタッフとのコミュニケーション力、チーム医療をマネージメントする能力など、皆さんが今後身につけるべき事柄は、実際には一朝一夕には習得しがたいものばかりと言っても過言でありません。医療のプロフェッショナルには、自ら学ぶ姿勢が常に必要とされます。授業内容を試験直前に詰め込み式に記憶することも時には避けられないでしょうが、皆さんには、疑問点を見いだし、その解決につながる情報を収集・整理するといった能力を、日々の学習の積み重ねの中で是非とも養って頂きたいと思います。

最後に、学生生活が勉学だけの時間でないことは言うまでもありません。良い意味で余力を残しながら、部活、サークルなど学生時代ならではの活動に力を注ぐことも、皆さんの毎日の充実させるとともに、幅広い人間的魅力を身につける上で有意義と思います。さらに、大学時代は一生の友人との邂逅の場でもあります。かけがえのない仲間と切磋琢磨しながら、社会の期待に応えることができる高度職業人として巣立って行かれることを期待しています。

歯学部長　前　田　健　康

教授職への年俸制の導入について

７月23日に開催された口腔生命科学系列教員会議で歯学部担当教授職全員に年俸制の導入を決定し、７月25日にプレスリリースされました。現在の年功序列による給与体系から成果実績による給与体系に改めることにより、国内外の優秀な人材の登用がより容易となることから、異分野交流やグローバル化の進展を通じ、超高齢社会において活躍できる口腔保健医療人材の育成、先駆的イノベーション研究の更なる推進を狙いとしています。また教員人事の硬直化が大きな問題となっており、政府は若手人材の積極的登用の方針を打ち出しており、今後、年俸制の拡大およびシニア教員の若手教員への振替に積極的に取り組むこととなります。

ミッションの再定義について

昨年度より、文部科学省と議論し、策定された「ミッションの再定義」が公表されました。歯学をとりまく現状と社会的要請として、①健康長寿社会実現への貢献、②医療イノベーションの創出、③国際的な医療課題の解決があげられ、振興の観点として、「医療人として必要な資質を備えた人材の育成に加え、国立大学の歯学分野においては、超高齢化やグローバル化に対応した人材の育成や、医療イノベーションの創出により、健康長寿社会の実現に寄与する観点から機能強化を図る」ことがかかげられています。

新潟大学歯学部のミッションとして、課題解決能力等を持った歯科医師養成と国内外の人材養成モデルの構築、口腔のQOL向上を目指した基礎・臨床研究、有病・高齢者への対応や歯科再生医療の実践が定義されました。第３期中期計画・中期目標期間ではこのミッションに再定義に基づいた、戦略的な学部運営、教育改善が必要となります。

ミッションの再定義を含めた国立大学改革についての詳細については文部科学省のホームページ（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1341970.htm）に掲載されているとともに、保健系［歯学］に関するポンチ絵は（http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/04/28/1341977_01.pdf）で参照できます。医学、工学等の他分野の状況も確認できます。

教授人事について

野村修一名誉教授の退職に伴い、空席となっていた包括歯科補綴学分野担当教授として、７月23日開催の口腔生命科学系列教員会議で大阪大学大学院歯学研究科小野高裕准教授が選出されました。平成26年10月１日付の発令を予定しています。

部局間交流協定の締結について

歯学部として学生・教員交流によるグローバル人材の育成、共同研究の推進、国際協力・医療貢献活動を念頭におき、外国歯科大学・歯学部と部局間交流協定の締結を推進してきましたが、この度、ミャンマー、ベトナム、米国歯科大学、歯学部と部局間交流協定を締結しました。

平成26年５月22日には、前田歯学部長、宮﨑副歯学部長がミャンマー・マンダレー歯科大学を訪問し、部局間交流協定を締結しました。また、両教授による記念講演が行われました。なお、ミャンマーには２つの歯科大学が設置されており、今回の締結により、今後、著しい経済発展が見込まれるミャンマー歯学界との交流が円滑かつ活発に進むと期待されます。

また、前田歯学部長、魚島副歯学部長がベトナムを訪問し、６月13日にはハノイ医科大学歯学部、６月16日にはホーチミン医科薬科大学歯学部と部局間交流協定を締結しました。いずれの大学も学生交流には熱心であり、ベトナムには羽田から直行便も就航しており、SSSV事業を活用した新たな学生交流が期待されます。

７月14日には米国ペンシルベニア大学S. Kim教授が本学歯学部を訪れ、同大学歯学部と部局間交流協定を締結しました。Kim教授によるペンシルバニア大学歯学部の紹介、大峡准教授による発生生物学研究成果の紹介が行われ、共同研究の可能性、学生交流事業について活発な意見交換が行われました。

マンダレー歯科大学との部局間交流協定締結式

マンダレーでの記念講演会

ハノイ医科大学歯学部との部局間交流協定締結式

同締結式での記念品交換

ホーチミン医科薬科大学歯学部との部局間交流協定締結式

同締結式での記念品交換

ペンシルベニア大学との部局間交流協定締結式

ペンシルベニア大学と意見交換

総合研究棟（歯学系：歯学部校舎）改修工事（第２期）の完了について

改修工事中、教職員、学生諸君には騒音等、ご迷惑をおかけしましたが、大型改修第２期工事（A、B棟）は平成26年５月29日に完成しました。第２期工事では、A棟に臨床系教員研究室、共通スペース、シミュレーション室が整備されるとともに、B棟には臨床実習用学生技工室を含む臨床系実習室が移転・整備されました。なお、夏季休暇期間中に各種移転作業が行われ、新たな臨床系実習室の供用は10月１日からの予定となっています。

今秋からは改修工事の第３期（基礎系研究室、講義室、PBL室、基礎系実習室、ロッカー室等）が行われることとなっており、今後ともご協力のほどをよろしくお願い致します。

小川祐司准教授がWHOオーラルヘルス部門主任に就任

本学歯学部には本邦唯一のWHO口腔保健協力センターが設置され、WHO（世界保健機構）とともに、口腔保健活動で高い評価を受けています。この度、平成26年４月より予防歯科学分野小川祐司准教授がWHOオーラルヘルス部門の主任として赴任しました。任期は３年の予定。また、７月には高橋姿学長、前田歯学部長、宮﨑副歯学部長がWHOを表敬訪問し、WHO中島事務局長補等と面談し、今後の協力関係について意見交換を行いました。

WHOで前田学部長（左）高橋学長（中央）小川准教授（右）と

文部科学省事業「課題解決型高度医療人材養成プログラム」の採択について

平成26年度から開始される「課題解決型高度医療人材養成プログラム」は、我が国が抱える医療現場の諸課題等に対して、科学的根拠に基づいた医療が提供でき、健康長寿社会の実現に寄与できる優れた医療人材を養成するため、大学自らが体系立てられた特色ある教育プログラム・コースを構築し、全国に普及させ得るべく、これからの時代に応じた医療人材の養成に取り組む事業として、全国公募されていましたが、この度、「健康長寿を育む歯学教育コンソーシアム」（申請担当大学：東京医科歯科大学、連携大学：新潟大学、東北大学、東京歯科大学、日本歯科大学）が採択されました。５年間の補助事業が予定されています（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/iryou/1350317.htm）。

トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム採択

本邦では留学生30万人計画をはじめとして、人事交流を中心としたあらゆる分野での国際化が国策として推し進められています。その一環として平成25年10月に文部科学省内に留学促進広報戦略本部が立ち上げられ、留学促進キャンペーンが始まりました。平成26年度には早速（独）日本学生支援機構が窓口となって、「官民協同海外留学支援制度～トビタテ！ JAPAN日本代表プログラム～」が開始されました。これは経済界や一般の賛同者から広く資金提供を受けて、文部科学省が上限を１年とする海外留学を支援するプログラムです。平成26年４月に行われた第１回の募集（専門を問わず300名定員）に対して本学歯学部からも応募したところ、江口香里先生（大学院博士課程３年）が見事に採択されました。採択されたコースは「自然科学系、複合・融合系人材コース」です。今後１年間、国の手厚い支援を受けてアメリカに研究留学する予定です。

本学歯学部では、歯学部学生や大学院生を含めて、積極的に海外との交流や交換留学を推進しています。毎年何校かの海外歯学部との交流協定を締結していますし、実際に日本学生支援機構の支援を受けて、多くの学生が海外に短期留学し、海外からも多くの学生を短期で受け入れています。今後は１年程度の留学機会も増やしていくようにするつもりです。今年度は第２回目の日本代表プログラムの募集もあるようです（https://tobitate.jasso.go.jp/）。歯学部としてもやる気のある諸君には最大限のサポートをしたいと考えていますので、是非積極的に海外に目を向け、行動を起こして下さい。今後の皆さんの活躍を期待しています。

歯学部長　前田　健康
国際交流担当副学部長　魚島　勝美

平成26年度科学研究費助成事業の採択結果について

日本学術振興会（JSPS）は４月１日付で平成26年度科学研究費助成事業の交付内定をしました。本年度歯学系の採択率（速報値）を以下の表に示します（かっこ内は昨年度実績）。

	新　　規		新 規 ＋ 継 続	
	採択件数／応募件数	採択件数／教員数	採択件数／応募件数	採択件数／教員数
院（歯）	51.6（46.9)％	35.6（26.4)％	72.5（75.2)％	87.8（90.8)％
病院（歯）	63.2（63.2)％	29.3（29.3)％	83.7（82.5)％	87.8（80.5)％
全　学	31.6（29.0)％	20.5（17.2)％	56.8（57.9)％	58.3（57.9)％

特任教員、技術職員にかかるもの、スタートアップは除く

総括すると、今年度も昨年同様の採択率を示し、新規と継続分をあわせた結果では、教員採択率（応募件数／教員数）は大学院（歯）所属教員では若干低下し、87.8%となりましたが、病院（歯科系）所属教員では87.8%と過去最高の採択率となりました。いずれも全学でトップの採択率でした。ただし、採択金額は微増であり、大型研究種目への移行を見据えた共同研究の推進が歯学部の大きな研究面での課題の１つといえます。

山田好秋前教授、野村修一前教授に対する名誉教授称号の授与について

山田好秋前口腔生理学分野教授および野村修一前包括歯科補綴学分野教授に対し、新潟大学教育研究評議会は先生方の長年にわたるご功績に対し、学校教育法に基づき名誉教授の称号を授与することを決定し、平成26年６月26日に名誉教授の称号授与式が執り行われました。発令は平成26年４月１日付け。

平成26年度オープンキャンパスの開催について

８月11日全学主催のオープンキャンパスが開催されました。当日、ときおり強い雨も降る、むし暑い中、県内外から240名の参加者がありました。学部長挨拶のあと、小野学務委員長による全体説明、山崎入試委員長による入試説明、井上教授による模擬講義、卒業生による学部紹介、施設等見学が行われました。なお、予想を上回る参加者数のため、当初２カ所であった会場を急遽３会場とすることとなりました。

オープンキャンパス全体説明会

オープンキャンパスでの模擬実習

新潟高校理数科特別講義の開催について

新潟県立新潟高校は「新潟県の医歯学の大学研究施設の訪問研修を通じ、最先端の医療施設、医療技術に関する知見を広げる。また、医師の講演を聴いたり実習体験したりして、高い動機付けを行うとともに、医療に従事する倫理観の涵養を図る」ことを目的として、８月６日、理数科51名、普通科７名計58名が学生新潟大学歯学部を訪問しました。歯学部長の挨拶の後、「口の健康と微生物学：観て考えて」（寺尾教授）、「摂食嚥下障害とその治療」（井上教授）の模擬講義等が行われた。

新潟高校理数科特別講義

新入生合宿研修を終えて

口腔解剖学分野　准教授　大　峡　　　淳

平成26年４月12日、13日、メイワサンピア新潟にて、毎年恒例の新入生合宿研修が行われました。３年次編入生を含む、新入生73名（歯学科45名、口腔生命福祉科28名）、教員23名、職員２名、学生アシスタント６名の計104名の参加となりました。この合宿は、歯学部での生活のスタートにあたり、教員、職員、クラスの仲間との交流・親睦をはかる事を目的としています。私も新潟大に赴任して間もないため、面識の無い教職員も多数おり、新入生と似た目線での参加となりました。

新入生はバスでメイワサンピアに到着。緊張しているかなと思いきや、意外とリラックスした様子でした。むしろ私の方が、緊張していたかもしれません。まずは、我々教員１人１人の自己紹介に続き、歯学部のカリキュラムや健康管理などに関するガイダンスが行われました。その後、教員を含め参加者全員が、自分のネームプレートを作成。名前よりもニックネームなどを書くようにとの指示があり、我々教員も学生時代のあだ名などを思い出しながら書きました。いつも“～先生”と呼ばれている人の顔とぴったりのあだ名に思わず笑ってしまいました。ここで昼食となります。教員は自分の担当するグループの学生と一緒に、出身地の事やニックネームの由来などを話しながらの昼食となりました。

昼食後は、毎回恒例のコンセンサスゲーム。「砂漠で遭難したときにどうするか」というタイトルで、渡されたリストに書いてある様々なアイテムの必要度を、先程知り合ったばかりの新入生同士がグループの意見としてまとめていくゲームです。誰も意見を言わず、我々教員の誘導が必要だろうと予想していたのですが、心配ご無用でした。みんなきちんと討論に参加し、仲良く意見をまとめていきました。

つづいて、「面接試験にもの申す！」と題した自己研鑽セミナーが行われました。新潟大学の面接試験の際に印象に残った面接官の質問を列挙し、グループとしてテーマ付けをしていくものです。学生たちが列挙していく印象に残ったとする質問や印象に残った理由に、教員達がざわつく場面も多少ありましたが、我々の質問に対する受験生の感じ方を知る事ができる貴重な経験でした。今後の面接試験にいかされていく事でしょう。

これで、無事初日のメインの行事も終わり、夕食となります。１日同じグループで過ごしましたから、新たな出会いのために、席はくじ引きで決めます。昼食の時と同様に、新入生の中に教職員が座る形で、今日１日の感想などを話しながら夕食スタート。ここで、教職員はアルコール注入です。年齢が20歳に達している学生でアルコールの欲しいものも、飲んでオーケー。ただし、お酒は前田学部長の前にしか無く、欲しい学生は前田学

部長の所に行って、「ビールをください」とお願いするルールです。怖いもの知らず（？）の学生達は、臆する事なく前に行き、前田学部長のお酌でビールを注入。ただ、ほとんどの学生は、我々のように“ビールをプハァー”よりも“コーラをグビッ”がいいようでした。これからの大学生活で酒の旨さを覚えちゃうんだよなどと思いながら、私はビールをもう一杯。夕食途中から、在校生によるクラブ紹介がスタートです。競技可能ギリギリの人数で運営しているクラブが多く、それぞれのユニフォームや必須アイテムを持って、動画などを駆使してのサービス精神たっぷりの勧誘で、我々教職員も楽しめる内容でした。夕食後は、新入生と教職員との懇親会です。前田学部長を中心に、大部屋に集まって、もう熱気ムンムンで、夜遅くまで続きました。

しかし次の日の朝、やはり年齢の差がはっきりと現れます。寝不足なはずの新入生が朝から元気なのに対し、教職員は、すっかりぐったり。それでも我々教職員は最後の力を振り絞って、ガイダンスを開始。ガイダンスの後は、麻酔科スタッフによるマネキンへの心臓マッサージやAEDの使用法などのBLS（Basic Life Support）の講習が行われました。「医療従事者になる者として、倒れている人の前を素通りするわけにはいかない」という言葉に、みんな真剣な面持ちで講習を受けていました。講習終了後、前田学部長の閉幕の辞により、全てのスケジュールが終わりです。各人の距離が近くなった事を伺わせる和やかな雰囲気で、新入生はバスに乗り帰路につきました。

私は、他大学の歯学部出身ですが、私が入学した際も新入生合宿研修はありました。でも、校歌を覚えたり、大学の歴史に触れたりと、大学という組織への帰属を促すような雰囲気のものでした。昭和という時代との違い、私立大と国立大の違い、執行部の考え方の違い、色々理由はあるのでしょうが、今回参加した新入生研修は、私が受けたものとは、まったく違っていました。新入生、教職員双方にメリットのあるものと感じました。また役職を持つような教授陣たちが、夜中まで新入生につきあっている姿にも、非常に驚きました。

私は、10数年海外で暮らしていたため、ひさしぶりの日本の若い世代との接触になりましたが、今の若者は、色々しっかり考えていると感じました（特に女子！）。決して、手堅すぎる訳で無く、夢も野心も持っていました。頼もしい限りです。みんなキラキラして、若さっていいなとしみじみ思いながら、重たい体を引きずり私も帰路につきました。

最後になりましたが、新入生の新潟大学での生活が、実り多いものとなりますよう期待しております。

大学院へ行こう

う蝕学分野　医員　大　倉　直　人

「歯科医師になれたけど、どんな歯科医師になりたいのか？」

国家試験合格後、あるいはその前から誰もが抱える問題だと思いますが、みなさんはいかがでしょうか（あるいはいかがでしたでしょうか）？僕は、大学院に入学する前にう蝕学分野に入局し、その後、レジデント、外部の長期出張を経てから入学しました。入学後は、楽しい思いも苦しい思いもしましたが、自分が目指す歯科医師像を長い時間をかけて探していました。そして、今年の３月に大学院を卒業し、それと同時に、ようやく理想とする歯科医師へのスタートラインに立てたのではないかと思っています。

さて、「大学院へ行こう」ということですので、少なからず、これを読んでくれている方は、進学に対して迷っている方もいると思いますので、少しそのことについて書きたいと思います。僕は、専門医を希望している方、あるいは基礎研究を選択している方にこそ大学院進学が適していると思います。それ以外の方は、開業医に就職する道を勧めます。治療技術の向上にはクオリティとクオンティティの両方が必須です。開業医では患者さんを診るチャンスは多く、早期の診断力・技術力向上が期待できます（院長によるファクタは無視しますが）。大学院での治療はクオリティにこだわることは出来ますが、クオンティティが少ないため、数少ないデメリットの１つであると思います。また、「臨床家を目指す前に、研究を経験したい」といったニュアンスの事をよく聞きますが、これはお勧めできません。研究はそんなに甘くないですし、研究に興味がない人には、臨床も研究も同時に進行していくことはかなり辛いことなのです。

次に、当分野、う蝕学分野の大学院について紹介します。根管治療を専門とし、興地隆史教授の指導の下、臨床・研究に励んでいます。臨床における当分野の目玉は顕微鏡やNi-Tiファイルを用いた根管治療です。根管治療専門の歯科医院でないと、なかなか両方が揃った環境で治療をすることはできません。研修医時代から両方使用することができるのは、恵まれた環境です。さらに、MTA（mineral trioxide aggregate）を用いた臨床応用は、時代をリードする歯科治療材料の１つであり、これを自由に使用でき、その結果をダイレクトでわかるのは、当分野だけだと思います。また、興地教授をはじめ、毎日、外来には多くの経験豊富な先生がいるので、わからないところをリアルタイムで聞けるのは、安心して治療ができる体制であり、魅力的です。研究の面では歯髄再生治療の構築、細菌研究や新規材料の探索まで幅広く行うことが出来ますし、自由に選択でき、それを可能にする土壌があります。僕自身、「新規歯髄炎鎮静薬探索を目的とした薬物輸送経路探索」といったテーマで、興地教授、吉羽邦彦先生・永子先生に師事し、博士号を習得すること

学位記授与式に興地教授を囲んで（筆者左端）

ができました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。さらに、当分野は、４年かかる大学院カリキュラムを短縮して卒業される先生や、成績優秀者として卒業される先生ばかりです。これには理由があり、無駄のない高速の研究スピード、そして、論文発表へスムーズに移行できる指導体制が確立しているおかげです。さらには海外を含めた多くの学会へ参加できるところも他の医局に引けをとらないところでしょう。

大学院進学は、良いところも悪いところもあります。進路に迷われている方々は、最後は自分に合った道を自分自身で決めなくてはなりません。その一助になれば大変うれしい限りです。末筆ながら、このような執筆機会を与えて下さった、担当の先生方にお礼申し上げます。

迷っているなら、大学院に行こう！

歯学教育研究開発学分野　特任助教　塩　見　　晶

学部卒後６年目の塩見　晶です。平成26年３月に包括歯科補綴学分野（義歯診療科）大学院を卒業し、４月から歯学教育研究開発学分野（歯科総合診療部）に所属しています。「大学院へ行こう」というテーマを頂き、この文章が後輩の皆さんにとって大学院進学というハードルを下げることができたら幸いです。

私は実家が歯医者でもなく開業する希望もなかったので、学生のときは将来どこかしらの個人医院に勤務するのだろうと漠然と想像していました。それは総診で研修をするようになっても変わらず、イメージははっきりしていませんでした。関東の開業医にいくつか見学（就活）に行ってみて、ここならマイペースな私でもやっていけるかもしれないと思う医院はありましたが、そこで働いている自分の姿を想像してみてもなんだかしっくりきませんでした。いっそのこと大学院へいってしまうのもアリかも。このあたりから大学院を意識し始め、経験者に聞くが早いと部活の先輩に話を伺うと、「開業医に就職した同期に比べれば診療数は少ないけれど、ひとつの症例についてじっくり取り組めるし、自分の専門分野を軸に診療方針を考えられるようになるよ」というアドバイスをもらいました。普段から他人の意見に流されまくり、軸がブレブレな私にとって、この言葉は魅力的に響きました。結局は他人の意見に流されたと言えなくもないですが、奨学金とアルバイトで両親から金銭的に自立できることもあり、大学院進学を決めました。

大学院博士課程は４年間です。前半の２年間は研修を修了したてで臨床志向だったため、外来診療と技工をメインに過ごしましたが、大学院卒業のためには学会発表と卒業論文がマストなので、後半２年間は自然と研究に費やす時間が増えました。

臨床については、“教授のアシストに付いて熟練した診療手技を盗み、それを自分の診療で生かすことができます”と、書きたいところですが、そこはやはり甘くありません。コンパウンドに翻弄され、咬合採得に悩み、人工歯排列に難渋します。しかし、そこをなんとなくで済ませるのではなく、周りの先生にその場で聞いて、納得がいくまで何度でも挑戦できるのは大学病院でなくてはできなかったと思います。人生初の上下総義歯製作で蝋義歯試適を３回も行ったのも良い経験です。

研究については、実は自分のやってみたいことができます。所属分野の研究しかできないという印象があると思いますが、臨床と基礎、そして分野の枠を超えての共同研究が行われています。この横のつながりも大学院の魅力のひとつだと思います。私の場合は、義歯を支持する粘膜組織の変化についてのメカニズムが解明されていないということに興味を抱いたことが研究テーマのきっかけとなりました。そして、院２年生から口腔解剖学分野で基礎研究を開始しました。ひとりの指導医と数人の大学院生で構成される研究チームの一員となって、細胞に毎日えさをやり、関連論文を検索し、実験結果に一喜一憂する、という辛くとも楽しい研究生活を送ることができました。研究結果としては、義歯床下粘膜の変化についてほんの少し

包括歯科補綴学分野の同期と（筆者は左端）

解明できたかなと思います。

海外留学したいとか、専門医になりたいとか、大学院に進むには目標を持っていなければいけないと思っていませんか？しかし、私のように受け身で優柔不断な人間でも、大学院に入ってみると、多くの先生からアドバイスを受けながら入れ歯を作ることができたり、海外の学会で研究発表することができたりするようになり、濃厚で有意義な時間を過ごすことができます。大学にいないとできないことを経験するために大学院に進む、というのはいかがでしょうか？

大学院に行こう

歯科矯正学分野　研究員　高　橋　功次朗

はじめまして。私はこの春、新潟大学大学院医歯学総合研究科を周りのたくさんの先生方に助けられ、無事卒業させていただき、晴れて学位を取得した歯科矯正学分野所属の高橋功次朗と申します。

まずはじめに、私が大学院を志望した動機を書きたいと思います。学生の頃から元々専門性の高い分野がいいなあと漠然と考えていました。実際の学部の授業科目では、口腔外科学と歯科矯正学に興味を持ち勉強していたのを覚えています。そして、国家試験の勉強に突入し、自分自身で深く掘り下げて勉強を進めるうちにさらに興味が増し、臨床研修期間は、進路選択の参考になればと考え、半年は病院歯科（口腔外科）、残り半年は新潟大学の歯科矯正学分野で臨床研修を行うことに決めました。どちらの研修施設でも大変かわいがっていただいたので、本当に悩みました。では、矯正科の大学院に進む決め手はなんだったのかな？と今思い返してみると、齋藤功教授はじめ、助教の先生方や同じ大学（奥羽大学）出身の先輩医局員の先生にたくさん相談に乗っていただいたり、たくさんご飯をごちそうになったり、１つ上、２つ上の先輩医局員の先生にも何度もご飯をごちそうになりました。私の書き方が悪いので、これを読んだ方はたくさんご飯を奢っていただいたから進路を決めたと勘違いされるかもしれません。もちろん否定はしません。しかし、真面目に書くと、学問として１番難しいと私が感じたからこそ、大学院に入学し、突き詰めて勉強しようと思ったのがきっかけだったと思います。

さてここからは大学院生となってからの生活を紹介いたします。まず４月初めに、新人歓迎会というイベントで当科では師匠とよばれるライターとの顔合わせがあります。どんな先生が師匠になるのか緊張していたら、私の師匠は年も近く、大

変気さくな先生でした。さっそく次の日からは、二人三脚での外来診療に突入しました。具体的には診療のアシストから始まりだんだんと自分でやれることが増えていったら様々なことをまかせていただき、二人三脚といっても師匠にたくさん迷惑をかけてしまったので表現が適切ではないかもしれません。しかし、そのとき失敗したことや、注意されたことは今でも私の財産となっています。矯正臨床においては、基本的知識、技術の習得のため、ワイヤーベンディング、バンド実習、ろう着試験、技工物製作、タイポドント実習等を行いました。またそれと同時期に新人教育として各ライターの先生方からの講義がありました。矯正臨床に必要な知識を細分化し行われ、少人数で行われるため質問もしやすく、アットホームな雰囲気の中講義していただいた記憶があります。

研究面では、入局してから約２か月は自分なりに悩んだり、先輩に相談したり、基礎講座の先生方にも相談にのっていただきました。そして考え抜いて口腔生理学講座で山村先生、北川先生のご指導のもと研究をすることに決めました。元々、大学という研究機関でしかできない基礎講座での動物実験に興味があったことも決定した要因の１つ

です。指導教官の北川先生と二人三脚でゼロからのスタートでした。まず始めは留学生の先輩の実験のお手伝いからはじめ、実験の見学を通して器機の使用法、手技を学び、徐々に進めていきました。自分なりに頑張ったご褒美に歯科基礎医学会という基礎系の学会で発表させていただく機会もいただき、岡山県ではおいしいお酒と食事をいただくこともできました。また、学会の懇親会では、普段あまり接点がない他大学の基礎講座の先生方と交流させていただき、大変刺激になりました。

最後に、これから大学院進学を考えている方は、自分が興味のある講座等に気軽に相談にいくことをお勧めします。医局説明会にはいけなくても全く気にする必要はないですよ。大学院で自分がやりたいことが明確ならなおさらですが、研究には興味があるけど具体的にどのようなスケジュールで進めていくのか分からないような方でもきっと各講座の先生方は大歓迎で相談にのってくれるはずです‼

日本口蓋裂学会総会　優秀ポスター賞

受賞報告

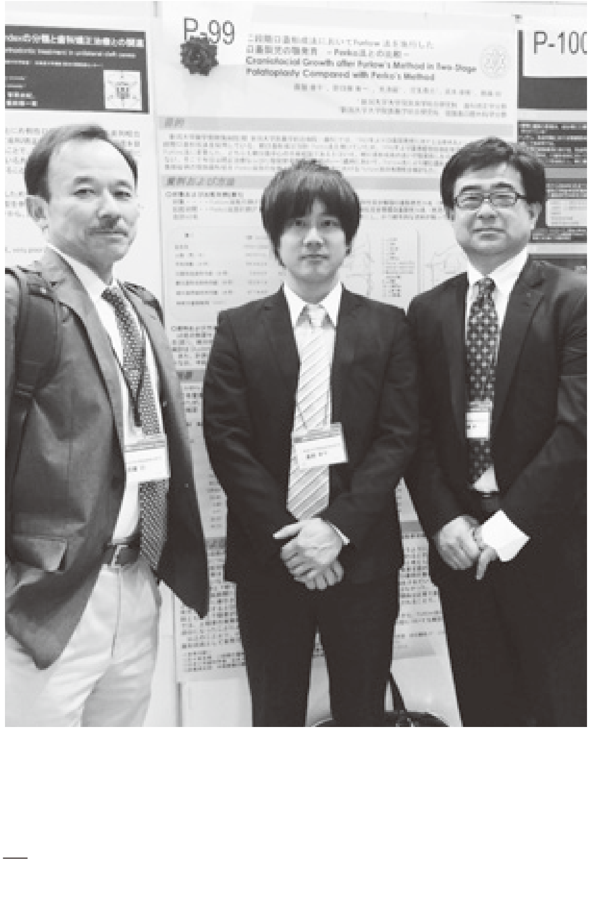
歯科矯正学分野　大学院３年　眞　舘　幸　平

このたび、2014年５月末に開催された第38回日本口蓋裂学会総会・学術集会において、優秀ポスター賞を受賞致しましたので報告させていただきます。

演題は「二段階口蓋形成法においてFurlow法を施行した片側性唇顎口蓋裂児における顎発育の検討－Perko法との比較－」という、口蓋裂患児の顎発育に関する研究です。口蓋裂患児に対する治療目標は正常な言語発達ならびに良好な顎発育の獲得ですが、世界的にみても全ての点で満足のいく治療体系は確立できていないのが現状であり、その両立に関しては今でもなお国内外問わず多くの議論がなされています。当院顎顔面口腔外科では1983年より両立を目指して二段階口蓋形成法を採用し、軟口蓋形成術としてPerko法を採用しました。その結果、顎発育についてはほぼ正常に近い形態が得られるものの、言語発達がわずかに遅れることが明らかになったため、言語発達に有利とされるFurlow法を1996年から採用し、より早期に良好な言語発達が得られています。今回の研究は、両手術法における顎発育を比較検討することで二段階口蓋形成法における最適な軟口蓋形成術を示し、口蓋裂患児の治療管理体制、治療成績向上の一助になればと思い、顎顔面口腔外科学分野と共同で進めてきました。

口蓋裂患児の治療成績は長期的に経過をみる必要があり、手術法などに変更を加えた場合にはそれを純粋に比較検討することが困難になることが少なくありません。しかし、当院顎顔面口腔外科学分野では二段階口蓋形成法を早期より採用し、その歴史の中で得られた研究結果から意図的に軟口蓋形成法を変更したため、十分に治療成績を比較検討することが可能でした。そのような施設は国内外問わずほとんどなく、大変貴重であり意義深い研究をさせていただいていると日々感じている次第です。

最後になりましたが、今回の受賞に当たり、ご指導を賜りました顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授、齋藤　功教授ならびに朝日藤寿一先生はじめご指導、ご協力いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。



日本歯周病学会奨励賞受賞報告

歯周診断・再建学分野　研究員　岡　田　　　萌

第57回春季日本歯周病学会学術大会におきまして、日本歯周病学会奨励賞を受賞しましたことをご報告させていただきます。受賞対象論文となるのは、2013年のJournal of Periodontology誌に掲載された「Periodontal Treatment Decreases Levels of Antibodies to *Porphyromonas gingivalis* and Citrulline in Patients with Rheumatoid Arthritis and Periodontitis」です。

近年、全身疾患と歯周病の関連を示唆する研究が数多くなされており、その中でも関節リウマチ（RA）との関連に注目が集まっています。歯周病原菌の一つである*Porphyromonas gingivalis*（*P. gingivalis*）が保有する蛋白シトルリン化変換酵素（PAD）が、関節滑膜のアルギニン残基のシトルリン化を惹起させ、その蛋白に対する自己抗体がRAの病状悪化に寄与すると考えられています。本研究ではRA患者を対象に、歯周治療により*P. gingivalis*抗原を排除することで、PADの滑膜組織への暴露を回避し、RAの状態改善が期待できると仮定し、歯周治療介入前後での歯周、RA臨床指標、IL-6、TNF-αなどの炎症性サイトカインレベル、抗環状シトルリン化ペプチド抗体（抗CCP抗体）、*P. gingivalis*の超音波破砕上清（SoE）と、ヘミン結合蛋白（HBP35）に対する血清免疫グロブリンG（IgG）抗体価、血清シトルリン濃度の変動を評価しました。

歯周治療群では、RA活動度を示すDAS28-CRP、抗*P. gingivalis* HBP35抗体価、血清シトルリン濃度の変化量が健常群と比較して、有意に減少しました。さらに、抗*P. gingivalis* SoEおよび、HBP35抗体価はリウマトイドファクター、抗CCP抗体価と、それぞれ有意な正の相関を認めました。本研究より、歯周治療によって*P. gingivalis*抗原の減少と関節内の蛋白シトルリン化が抑制され、さらにRA活動度が改善した可能性が示唆されました。

この度の受賞論文は学位論文でもあり、患者を対象とする検体採集から統計解析、論文執筆、投稿まで、初めての経験でありながら、その苦労と同時に研究の厳しさを体感しました。こんな未熟な私のサポートを最後までしてくださいました、歯周診断再建学分野の小林哲夫先生、吉江弘正教授と、新潟県立リウマチセンター伊藤聡副院長、村澤章名誉院長に、この場をお借りしまして、心より感謝申し上げます。

デンツプライ賞を受賞して

小児歯科学分野　大学院３年　村　上　智　哉

小児歯科学分野大学院３年の村上智哉と申します。今回Cell Medicine ６巻 75-81項（2013年）に掲載されました論文が、2014年５月に開催されました第52回日本小児歯科学会大会におきまして、デンツプライ賞を受賞いたしましたので報告させていただきます。

口腔内には700種を超える細菌が存在するといわれ、乳歯歯髄細胞の培養の障壁となっています。そこで、iPS細胞の未分化を維持するため足場として使用しているフィーダー細胞の貪食作用（ファゴサイトーシス）について着目し研究を行いました。

今回の研究では、無限増殖するマウスの線維芽細胞であるSTO細胞をマイトマイシン処理することで増殖を止め、フィーダー細胞として使用しました。まず、乳歯歯髄細胞を採取し、フィーダー細胞の有無で増殖能を比較しました。次に、STO細胞と*S. mutans*を供培養し、ファゴサイトーシスの有無を視覚化するため、細胞質が酸性に変化すると赤く蛍光色を発する特殊な染色を行い検討しました。

結果、フィーダー細胞なしに比べ、フィーダー細胞を使用した方が高い増殖能を示しました。また、STO細胞と*S. mutans*の供培養では、STO細胞に取り込まれたのち、細胞質内が赤く染色されている細胞を確認できました。つまり、*S. mutans*はSTO細胞に取り込まれたのち、ファゴサイトーシスにより分解されたことが示唆されました。

本研究より乳歯歯髄細胞の初代培養において、STO細胞は有用なフィーダーであり、この技術が口腔組織の効率的な初代培養の一助になればと期待しております。

最後に、今回のデンツプライ賞を受賞するにあたり、御指導を賜りました早﨑治明教授、齊藤一誠准教授、小児歯科学分野の先生方、微生物感染症学分野の寺尾豊教授をはじめ多くの先生方に深く感謝を申し上げます。

現日本小児歯科学会理事長である山﨑要一先生との記念撮影

第52回日本小児歯科学会大会　優秀発表賞　受賞報告

小児歯科学分野　助教　三　富　智　恵

この度は、歯学部ニュースの紙面にて、受賞報告させていただけることを大変うれしく思うとともに、日々研究にご協力いただいている先生方に感謝申し上げます。

平成26年５月16、17日に東京で行われた第52回日本小児歯科学会大会において優秀発表賞を受賞することが出来ました（演題名：アルキル化抗腫瘍薬によるラット歯根形成障害－根尖部における経日的変化－）。

学会当日の朝は早期臨床実習Ⅰの外来見学のため、入学したばかりのフレッシュな学生さんたちに説明している中、受賞候補に挙がっているとの連絡を頂きました。その後、いつもとは違った、少し引き締まるような気持ちで会場へ向かいました。受賞発表は、学会２日目最後の時間にも関わらず、大勢の医局員の皆様、教室OBの先生方が会場に残ってくださり、受賞を一緒に喜んでいただいたことに大変感謝しております。

ところで、今回の基礎的研究を始めたのは、外来診療を行っている小児がん既往患児の永久歯形成不全の臨床研究がきっかけでした。多くの患者さんに、永久歯欠如や矮小歯、歯根短縮が見られ、歯の形成障害は思春期の子供たちの生活にとって大きな問題だと感じました。文献にあたる中で、多数の患者さんに使用されていた抗癌剤の歯への影響に関する基礎的研究が未だ少ないことを知り、本研究を始めました。この研究の機会と場所を与えてくださった口腔解剖学の先生方にお礼申し上げます。

まず歯根形成障害に注目し、歯根形成時期と抗癌剤投与時期との関係を検討したところ、歯根形成初期での抗癌剤投与の影響が大きいことが明らかになりました。さらに歯根形成障害の経日的変化を観察したものが今回の発表です。今後は、歯根膜やセメント質形成にも注目して、歯の長期保存の可能性を探りたいと考えています。

さて、現在の歯学部学生の半分は女性です。これからますます女性歯科医師が増えていくと思いますが、そんな女子学生の今後の活躍にエールを送るとともに、私も負けないよう、これからも診療、教育、研究に励んで行きたいと思います。

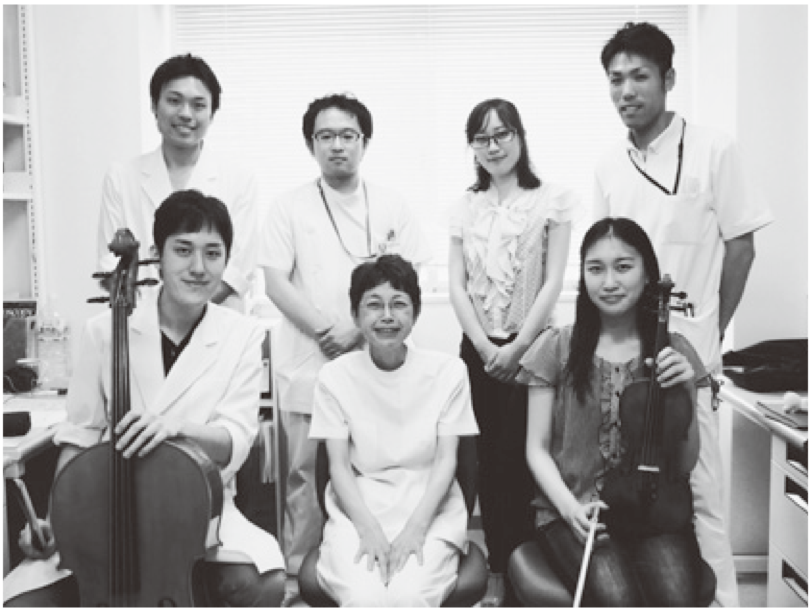
逃げずに向き合い学ぶこと

う蝕学分野　講師　吉　羽　永　子

このたび、「日本歯科保存学会　学術賞」を受賞いたしましたので報告いたします。この賞は、これまでの一連の研究に対していただいたものと思っておりましたが、どうやら勘違いのようです。その賞状には、「…一連の研究は…更なる発展が期待できると…。」と書いてありました。要するに、「これからは、さらにしっかり働けよ」と、激励の為に与えられた賞のようです。そういった意味でありがたい賞を頂いたと感じております。

さて、日々の臨床で歯髄組織を相手にしている私の興味は、「歯髄組織丸ごと」であり、研究では歯の発生期も含めて、細胞外基質の改変と細胞分化との関わりについての仕事をしてきました。どちらかというとマイナーな細胞外基質ですが、これはたんに細胞を埋めているだけのものではありません。細胞にスキャナーがあるとすれば、細胞外基質にはバーコードが埋め込まれている状況を想像していただければ楽しいかもしれません。歯の細胞外基質の仕事をされている多くの方は、「歯特異的」に着目するなかで、どうも「特異的」という言葉が苦手な私は、どこにでもある種類の細胞外基質は、歯、歯髄ではどうなのだろうかという事の方に興味がありました。混んでいる電車に乗るよりは、すいている電車に乗った方が楽です。あまり他人がやらないようなテーマに取り組むことは大事かもしれません。

何事も「逃げずに向き合い学ぶこと」が肝要と思うなかで、研究においては知的好奇心がこれを可能にしていると感じます。研究は日常の一つになっていることがありがたく、これも当教室の興地教授をはじめ、教室員皆さんのおかげと思っております。医局長として、「Who?」（実験室の掟破りは誰？）のタイトルでメールをするのも今のうちで、「me!」（ごめんなさい！）にならないように努めてまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



JEA新潟カルテットのメンバーと一緒に、明日の学会（懇親会）本公演の前に撮影。著者は前列中央。実は皆３研の住人です。

FOOMAアカデミックプラザAP賞を受賞して

摂食嚥下リハビリテーション学分野　教授　井　上　　　誠

このたび、６月10日から13日まで東京ビックサイトにて開催されたFOOMA JAPAN（2014 国際食品工業展）アカデミックプラザにてAP賞を受賞しましたので報告させていただきます。

FOOMA JAPANは、毎年６月に東京ビックサイトにて開催されており、食品機械の最先端テクノロジー、製品、サービスを通して、「食の技術が拓くゆたかな未来」を提案することを目的として、多くの食品産業が集う一大イベントです。食品機械・装置および関連機器に関する技術ならびに情報の交流と普及をはかり、併せて食品産業の一層の発展にも寄与しています。今年は、期間を通して９万人を超える関係者が来場しました。その一端として開催されているアカデミックプラザは、全国から「食」に関わる多くの研究機関が集まり、ポスターや口演にて自らの研究発表を行うとともに、産・学・官で共同研究開発を行う契機とする場となっています。今年で22回目となったアカデミックプラザでは国内外から60大学、研究機関が集まりました。

新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食嚥下リハビリテーション学分野の発表では、「食べるあなたと測るわたしー食べる機能はこうやって測る・治すー」と題して、咀嚼・嚥下機能を評価する様々なツールの紹介、さらに超高齢社会の中で注目されてきた嚥下障害を取り上げ、安全な食生活と摂食機能の維持・改善に関わる新たな治療戦略などを紹介しました。

各発表は、新たな産業への期待、産・官・学を通じた共同研究としての可能性、発表内容の分かりやすさなどを基準として審査を受け、その結果、４名に与えられる受賞者の１名となりました。４日間の開催期間中は、教室員たちの手も借りて来場者の対応を行い、我々の臨床を紹介した上で、今後、産業の発展や新たな研究推進の基点となり得る研究内容についても丁寧に説明をしました。本AP賞は、分野全員の力の結集に対していただいた賞であり、我々の研究・臨床がいかに注目されているかを再認識することができました。この場を借りて皆に感謝します。

授賞式にて、分野を代表して林宏和先生がスピーチしました

受賞報告　御礼

摂食嚥下リハビリテーション学分野　助教　真　柄　　仁

第52回日本顎口腔機能学会学術大会（平成25年４月19日、20日、岡山にて開催）において、優秀賞を受賞しました。この賞は、本大会から新たに設定され、口演者が自ら選考委員となり、優秀であった演題に投票するという大変ユニークな制度の下でスタートしたもので、初回の優秀賞に名を連ねることができたことを喜ばしく感じています。

今回の受賞演題名は、「咽頭電気刺激がもたらす嚥下関連機能の神経可塑性変化」でした。この研究プロジェクトは、当科の井上誠教授を中心とした研究グループが行っているものです。嚥下運動（飲み込みの運動）は、大脳皮質などの上位脳から指令によって起こすことも（飲みたいと思って飲むことも）、咽頭・喉頭からの末梢感覚の刺激入力によって起こすことも（食べ物が喉に流れて思わず飲んでしまうことも）可能です。咽頭粘膜への電気刺激を与えることで、大脳皮質における感覚運動野の興奮性を高める（有効な飲み込みの指令が出しやすくなる）という研究を、10年程前に、英国Manchester大学のProf. Hamdyらが世界で初めて報告してからは、この電気刺激を嚥下障害に悩む患者様の有効な治療手段にすべく、各国の研究者がその詳細な神経回路のメカニズムを解明する研究に取り組んでいます。我々が取り組んでいるのは、特にその電気刺激を経日的に連続して行うことで、嚥下機能がどのように変化するかを調べ、その刺激による神経可塑性変化（神経に与えた機能的な変化）を検証するというプロジェクトです。言うまでもありませんが、超高齢社会を迎えている日本において、嚥下障害に対する臨床は緊急を要する課題です。本研究の成果は、その臨床における有効なツールになり得るとともに、本受賞は大きな期待であると感じています。

現在私は、Prof. Hamdyの研究室に留学中です。こちらでは嚥下障害に対応すべく咽頭電気刺激だけでなく、他の手法でも様々な研究がされています。今回の受賞に際して、ご指導頂きました井上誠教授をはじめ、摂食嚥下リハビリテーション学分野の先生方にこの場を借りて深く感謝申し上げます。

留学報告

予防歯科学分野　大学院３年　佐　藤　美寿々

2013年５月から11月の半年間、スイスのジュネーヴにあるWHO（世界保健機関）本部Global Oral Health Programmeにインターンとして留学する機会をいただきました。ここに、半年間のジュネーヴでの経験について報告させていただきます。

私は、新潟大学の学部時代より海外旅行が好きで、アルバイトでお金を貯めては長期休みに海外へ行く、という学生生活を送っていました。卒業・臨床研修修了後は一般開業医に就職しましたが、いつか留学したいという気持ちがあり、母校の大学院予防歯科学分野へ入学しました。

とはいえ、大学院進学後は、研究（高齢者を対象にした口腔と全身の健康の関連に関する疫学研究）、臨床、国内の地域保健活動が主な仕事でした。予防歯科学分野は2007年より日本唯一のWHO口腔保健協力センターとして活動しており、CPIデータベースの構築や学術面での協力のみならず、私以前にのべ６名の若手研究者をWHO本部に派遣してきたという実績があります。しかし、私自身は国際口腔保健にはほとんど寄与しておりませんでした。

そんな海外とはほど遠い生活をしていた2013年４月のある日、宮崎教授から教授室に呼ばれ、「WHOに行きたい？」と質問されました。WHOでは一体何をするのだろう…？という疑問が一瞬頭をよぎりましたが、ヨーロッパに住んでみたかったこともあり、その場で「はい」と頷きました。そして、わずか４週間後には、スイスのジュネーヴで生活を始めることになりました。

ジュネーヴは、スイス南西の端、フランスに食い込むような位置にある人口10万人ほどの都市です。国連ヨーロッパ本部をはじめWHO、ILO（国際労働機関）など多くの国際機関の本部が置かれ

WHO本部メインビルディング前で

当時のsupervisorであるDr. Poul Erik Petersenと

ていることもあり、外国人がとても多い国際的な街です。スイスで真っ先に連想されるハイジの世界とは全く異なる環境でした。石畳の街並は緑であふれ、チーズや生ハム、ワインなどが非常に美味しく、憧れのヨーロッパ生活を満喫することができました。一方でスイスは物価が高く、また地元商店保護のため、日曜は基本的に全ての店が閉店していました。身の回りで盗難も多く、便利で安全という日本の良さを再認識することとなりました。

さて、WHOについて何も知らない…そもそも英語もろくに勉強していない…という状況で急遽行くことになったWHOでしたが、到着してすぐにWHO総会を傍聴する機会に恵まれました。WHO総会とは、年に一度開かれるWHOにおける国会のような会議で、世界各国から保健大臣や保健省の幹部クラスが集まり、保健医療に係わる重要な政策や事業計画、予算などの決定を行うものです。インターンにも職員と同等の権利が与えられ、自由に会議や講演会などに参加することができました。サンドイッチを食べながら「日本人？京都いいところだよね」と話しかけてくれた方が実はアジア某国の保健省幹部だったり、目の前の会議で決められた事項がニュースになっていたりと、これは大変なところに来てしまった…と衝撃を受けたことを覚えています。

WHOでは、Global Oral Health Programmeチーフ（当時）のDr. Poul Erik Petersenの指導のもとで、ICD（疾病及び関連保健問題の国際統計分類）の改訂業務に取り組みました。ICDとは、異なる国や地域から、異なる時点で集計された死亡や疾病のデータの体系的な記録、分析、解釈及び比較を行うため、世界保健機関憲章に基づき、WHOが作成した分類です。今回のICD-11に向けた改訂では、Orofacial complex（顎顔面領域）へ新たに追加する語句の検討会議への参画や、各語句における定義の検索、更新業務を行いました。さらに、WHOが定期的に出版している世界の齲蝕有病状況地図の更新業務にも携わり、WHOのデータベースや最新の文献から、各国の情報収集を行いました。実際のデータベース管理を行っている、WHO協力センターのあるスウェーデンのマルメ大学カリオロジー講座も訪問し、最新情報の収集や意見交換なども行いました。こちらのデータについては、今後論文の形にする予定です。

このように、WHO研修の半年間は臨床から離れ、主にデスクワークでデータ管理や収集などを行っていました。「WHOからの報告」というと聞こえがいいですが、実際はとても地道かつ正確さが要求される作業の積み重ねで１つ１つの成果ができていることを痛感しました。また、WHO本部ではどうしても俯瞰的な視点で仕事をしなければならず、臨床から離れている時間が長くなるにつれ、現場感覚を忘れてしまう瞬間が多くありました。国際口腔保健の中枢に携わる機会をいただき、現在は足りない知識や経験を補うべく研鑽を重ねているところですが、これからも国、地域ごとに異なる現場の状況を常に意識していきたいと強く感じたWHOでの半年間でした。

ここまで主に業務についてお話ししてきましたが、多くの友人にも恵まれました。インターンに

インターンの友人と、週末に近くのモンブランへ

ジュネーヴの象徴、レマン湖のJet d'Eau（世界最大の噴水）

歯科医師はほとんどいませんでしたが、公衆衛生修士（Master of Public Health）やMedical Schoolの学生を中心に世界各国から数百人の学生が集まってきており、友人たちとの交流を通して、文化的背景の違いを理解することができ、更により広い視野を持って国際保健、社会開発について考えることができるようになりました。帰国後も連絡を取り合い、日本やアジア、ヨーロッパなどで機会を見つけて再会しています。普段は歯学部の中に籠りがちですが、インターンシップで得た様々なフィールドで活躍する同世代の仲間たちは、何物にも代えられない貴重な財産となりました。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった宮崎秀夫教授、WHOで指導をして下さったDr. Petersen、ならびに急な留学にも関わらず不在中のフォローをして下さった予防歯科学分野の先生方、サポートをしてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

ロンドン留学記

小児歯科・障がい者歯科　川　﨑　勝　盛

【はじめに】

はじめまして。私、小児歯科・障がい者歯科の川﨑勝盛と申します。日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の助成を受け、英国ロンドンにあるキングスカレッジ・ロンドン（KCL）のcraniofacial development講座に留学させていただきました。大変恐縮ですが「歯学部ニュース」の頁をお借りして、ロンドンの様子や留学生活について紹介させて頂きたいと思います。これから留学を検討している諸先生方の参考になれば幸いです。

【留学まで】

私は、大学院では臨床研究をメインにしており、その後、医員として小児歯科にて臨床にいそしんでいましたが、「大学にいるのだから研究も積極的に取り組んでみたい」と考えていた折、「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の募集があるとのお話を伺い、「この機会に海外で基礎研究を一からやってみるのはどうだろうか」と考え、一も二もなく飛び込みました。幸運なことに英国ロンドンにあるKCLのcraniofacial development講座にいらっしゃる大峡淳先生を紹介していただき、さらに幸運なことに、諸先生方のご協力により、当時生体歯科補綴学分野の助教であった妻も一緒に留学できることになりました。私達の留学に際し、快く送り出して下さった私の所属分野や妻の所属分野の先生方にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

【キングスカレッジ・ロンドン　craniofacial development講座】

KCLはロンドン大学を構成するカレッジの一つであり、イングランドでは４番目に古い名門大学の一つです。ノーベル賞受賞者も輩出しており、世界大学ランキングでは2007年以降、世界25位以内を維持しているほどです。その中でcraniofacial development講座は童謡「ロンドン橋落ちた」で有名なLondon bridgeの地下鉄駅そばの「Guy's Hospital（ガイズ病院。Google mapなどではなぜか「ギーズ病院」と表記される）」と言う病院の、27階の１フロアの研究室でした。英国の研究室なので英国人がメインなのですが、国際色豊かな講座で、イタリア、フランス、中国、インド、タイ、日本、ブラジルetc…世界各国から研究者、大学院生が集まっており、その文化の違いはとても刺激になりました。

【研究内容】

craniofacial development講座は頭蓋顔面に異常を持つ遺伝子改変マウスを多く所有していましたが、私はその中でも過剰歯を持つマウスに注目しました。留学前の小児歯科臨床の現場で、多くの過剰歯症例を経験し、その発生機構に興味を持ったからです。しかし留学当初は、慣れない英語と慣れない基礎研究の壁がブ厚く、もどかしい日々が続きました。その時は、現口腔解剖准教授でいらっしゃる大峡先生や、日本大学松戸歯学部から先にいらっしゃっていた田中陽子先生、さらに日本に留学経験があり、医科歯科大学で興地先生の下で研究していた日本語ペラペラなイタリア人のアナさんに大変お世話になりました。また、私の拙い英語でも、一生懸命聞き取ろうとし、親身になってくれたラボのみんなの親切が、非常に英国らしく印象的で感動しました。さて、研究の内容ですが、歯の発生には様々な遺伝子がそれぞれ相互に密接に関わっています。その主なものにShhシグナル、Wntシグナル、Bmpシグナル経路がありますが、過剰歯を持つマウスの過剰歯発生前後の各経路の遺伝子発現をin situやqPCRと言った手法を用いて解析し、その発生の要因を

調べる、と言うのが主な研究内容でした。歯の発生は胎生期に生じているため、マウスの胎生期歯胚を手に入れるため、母マウスの妊娠のチェックに始まり、サンプルの入手、固定、切片作り。さらにin situのためのプラスミド増幅、リニアライズ、probe作り、qPCRのためのRNA生成からcDNA生成etc…、朝８時から夜８時まで実験漬けと言う生活が続きましたが、どれもとても新鮮で刺激的であり、大変ではありましたが非常に充実した日々を送ることができました。その際、ご指導下さった大峡先生には現在もこちらでお世話になっており、感謝してもしきれません。

【ロンドンでの生活】

ここからはロンドンでの生活について書かせていただこうと思います。ロンドンへ旅行、留学する際の参考になれば幸いです。さて、皆さんは「英国」「ロンドン」と言うとどのような印象をお持ちでしょうか？「物価が高い」「飯がマズい」「天気が悪い」と言ったところではないでしょうか？その全てがおおむね正解です。物価が高いのには閉口させられましたが、幸いかなり円高の時期に行くことができ、為替レートの関係でとても助かりました。それでも、レートの関係でマンションの賃料自体全く変更ないのに、退去頃に１万円も上がっていたのには困りましたが…。次に、英国はご飯がおいしくないのは有名ですが、幸いロンドンは人種が多様で、インド系や中東系、中華系、イタリア系と食べ物の選択肢が広く、「英国以外の食べ物を食べれば大丈夫」と言う印象でした。但し、値段は日本の1.5倍、量は２倍あります。英国が欧州で１、２を争う肥満大国であるのも納得です。最後に、英国は冬寒く、天気が悪いです。そこで英国人は留学生に「どうだ？ロンドンは曇りの日が多くて気が滅入るだろう？」と声をかけてくるのが常套句です。しかし、私はこのとおり新潟から行ったものですから、冬寒く、晴れ間がないのが普通の感覚で「いやー、ウチの田舎もこんな感じだから、そんなに気にならんよ」と返事をして、微妙な顔をされました。新潟と違うのは、ロンドンは大都市でめったに雪が降らないため、雪が降ると交通機関が止まり、都市機能が麻痺すること。夏はそれなりに涼しく、エアコンが付いてない家が多いことでしょうか。

【最後に】

このような貴重な機会を与えて下さり、アドバイスを下さった前田教授、早崎教授、魚島教授、不在中業務をお願いし、ご迷惑をおかけしてしまった小児歯科学分野の先生方、海外派遣プログラムを採択いただきました審査委員ならびに事務の方々にこの場をお借りして感謝を申し上げます。

ラボの仲間と夏の打ち上げパーティーにて

教 授 に 就 任 し て

歯科薬理学分野　教授　佐　伯　万騎男

平成26年２月１日付で、歯科薬理学講座の教授に就任することとなりました佐伯万騎男と申します。家族を大阪に残して新潟にやってまいりましたが、親切な新潟の方々のお蔭で単身赴任の２か月間とても楽しく暮らすことができました。４月からは家内と小３の双子（男女）の子供を呼び寄せました。

私は平成７年に大阪大学歯学部を卒業しました。学生時代に講義を受けた猪木令三大阪大学名誉教授の後任として歯科薬物学教室を主宰されていた、故斎藤喜八大阪大学名誉教授のお人柄に惹かれ、薬理学を学びたいと考えていた私を、クラス担任の和田健先生（大阪大学名誉教授）が斎藤先生に紹介して下さり、助手に採用して頂きました。卒業後は郷里の千葉に帰ろうかと考えていた私に、和田先生は研究者への道を開いて下さいました。和田先生ご夫妻には結婚式の媒酌人までお願いし、公私両面でお世話になり続けています。

入局と同時に、当時講師をされていた前田定秋先生（前　摂南大学薬学部長）のご指導を受けることができたことは、私の人生最大の幸運のひとつだったと思っております。前田グループは家族のような親密さがあり、極めて恵まれた環境で研究者としてのスタートを切らせて頂きました。私にとって、教育者としての理想の姿は前田先生にあり、大学教員としての19年間前田先生の後ろ姿を追ってきたように感じております。

研究者としての私の真のスタートは上崎善規先生（大阪大学名誉教授、介護老人施設　伊賀ゆめが丘　施設長）が赴任されてから始まったと思っております。NOの発見によりノーベル医学生理学賞を受賞されたMurad先生の片腕として活躍された上崎先生からご指導頂くことで、サイエンスとはどういうものかということがおぼろげながらわかり始め、少しずつ自分の研究テーマを確立していくことができました。Murad先生の師であるSutherland（cAMPの研究によりノーベル医学生理学賞受賞）は、与えたテーマから少しでも外れた実験は一切許さなかったそうで、Murad先生の「自分は束縛されるのがいやだった。だから人を束縛することはしない」という言葉を上崎先生からうかがったことがあります。学位を取得させて頂いた後、平成13年にはテキサス大学のMurad先生のもとで直接勉強する機会を与えて頂きました。５カ月間の留学中は９/11の同時多発テロの勃発直後に一時帰国するなど物情騒然たるアメリカを体験しました。留学中感銘を受けたものに、テキサスの富豪が1920年代のヨーロッパで生まれ育ったシュールレアリスム絵画を収集して作ったメニール美術館と、ヨーロッパから亡命してきた放浪の画家マーク・ロスコがヒューストン郊外に作ったチャペル（ロスコチャペル、ちなみに私の生まれは千葉県ですが、千葉の自慢をさせていただきますと、佐倉にある川村美術館のロスココレクションは一見の価値ありです）があります。

振り返りますと、数多くの素晴らしい先生に恵まれました。本稿を読まれている新潟大学の学生さんも、たくさんの先輩のお世話になって欲しいと思います。若輩ではありますが、新潟大学に赴

任した以上は、私も皆様に貢献できるよう務める所存です。

私は千葉県出身で、小学校のころからサッカーを始めました大のサッカー好きであります。中学校の時、1978年のワールドカップでアルゼンチンが初優勝したときは、サッカー部のユニフォームをアルゼンチン代表チームとおそろいにいたしました。赴任以来、本学の諸先輩方とサッカーのお話をさせていただくなかで、サッカー部後援会に誘っていただきました。そのご好意に甘えまして、本学の卒業生でないにもかかわらず、サッカー部後援会に入会させていただくことになりました。

さすがにプレーするのはしんどくなってまいりましたが、長年サッカー観戦を続けております。ペレやクライフ、ベッケンバウアーなどのプレーを生で見たことがあるのが自慢です。最近はワールドカップの試合もリアルタイムで観戦できるようになってまさに隔世の感がありますが、わたくしにとって人生最高のワールドカップは高校生の時の1982年のスペイン大会で、ジーコやプラティニの華麗な技に酔いしれるとともに、準決勝の西ドイツ対フランス戦の激闘を観戦してドイツのサッカー（華麗とはいいがたいですが）が大好きになりました。日本でも活躍したリトバルスキーがPKをはずした選手をなぐさめるシーンを30年前にもかかわらず鮮明に記憶しています。その頃の西ドイツの主力はバイエルン・ミュンヘンに在籍していたカール＝ハインツ・ルンメニゲですが、バイエルン・ミュンヘンのような、企業に依存しない地域に根付いたクラブチームを応援するのが長年の夢でした。

今回新潟に来て、その長年の夢がかないつつあると感じております。大阪で幼稚園に通っていた頃からサッカーをはじめた小３の息子がアルビレックスのサッカースクールに入りまして、子供と公園でボールを蹴る喜びをかみしめつつ、週末は家族でビックスワンスタジアムに足を運んでおります。

赴任にあたり、教室の研究テーマを歯科臨床に貢献できるものにしたいとの思いから、分野名を歯科薬理学に改称させていただきました。実際の歯科臨床の場には私たち基礎の人間がお手伝いできる研究テーマがまだまだたくさんあると思います。臨床の先生方とアイディアを出し合い、そのような研究テーマにじっくりと取り組むことで、これまで育てて頂いた歯科の世界の諸先輩方に少しでも御恩返しをしていければと考えております。

最後になりましたが、他学からの赴任で知己の少ない私に対しまして、挨拶を述べる機会を与えてくださった本誌編集関係者の皆様に深謝申し上げるとともに、新潟大学歯学部の更なる発展を祈念して、就任のご挨拶とさせて戴きます。どうぞ、これからよろしくお願いいたします。

生体組織再生工学分野（歯科理工学）

生体組織再生工学分野　教授　泉　　　健　次

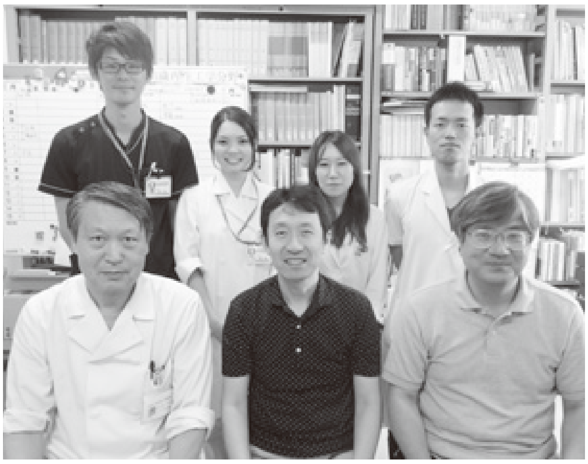


写真１　C418室にて。平成26年７月18日

はじめに

先日の平成26年度新潟歯学会第１回例会にて、教授就任講演をさせていただきました。私の後に講演されたのが小林正治教授で、昔口腔外科病棟の“青チーム”で、指導を仰ぎながら患者様の治療にあたっていたのを思い出しまして、ノスタルジックな感慨に浸っておりました。歯学部卒業後、口腔外科に在籍していた私が歯科理工学の世界に引っ越してきて１年余りが経過しました。執務上は、いまだに地に足がついていないという感覚ではありますが、反面、固定観念にとらわれずに自由な発想に立てるのも事実です。インビトロ環境であればさしずめ、超低接着プレート内で静止期にいる３次元sphereといった感覚でしょうか。今後、増殖・分化のどちらの方向にも臨機応変に反応していければと考えます。前置きが長くなってしまいましたが、平成25年度歯学部ニュース第１号に“教授に就任して”と題した記事に引き続きまして、本号にて講座紹介記事を担当することになりました。本原稿依頼を受けた後、たまたま、平成13年度歯学部ニュース第２号に載っている“特集”各教室・医局の近況 という記事を目にしました。組織再建口腔外科学分野（旧口腔外科学第一講座）の医局長として、私が短いながら教室紹介を執筆していました。そういう運命なのかもしれません。

教室の沿革と現構成員

今から遡ること48年（昭和41年度）、新潟大学歯学部歯科理工学講座はその翌年に開設が予定されていましたが、歯科補綴学や歯科保存学の授業計画上先行して発足させる必要があるとのことで、当時認められた歯学基礎４講座開設定員の枠内で操作して、歯科理工学講座を含め６講座が開設されました。初代教授は塩川延洋先生が昭和41年５月から平成６年３月まで勤められました。その後、宮川修先生が教授として着任されました（平成６年12月～平成19年３月）。その後６年余りの教授不在の間は、准教授であった渡辺孝一先生（講座名は歯科生体材料学分野に変更）を中心に教室運営がなされていました。平成25年６月に口腔解剖学教室から私（写真１　前列中央）が異動して参りまして、講座名を生体組織再生工学分野という長いものに改称いたしました。とはいえ、慣れ親しんだ“りこう”と呼んで頂いて構いません。教室の現在の構成員は３名です。私の他に、昭和56年４月から助教として教室を支えてこられた大川成剛先生（前列左）は、平成25年９月をもって准教授に昇任されました。また金谷貢先生（前列右）は昭和60年６月より歯学部の補綴学第一講座の助教をされていましたが、本講座へは平成７年８月に異動されて、現在に至っております。また、顎顔面口腔外科学分野から大学院２年の原夕子先生（後列右から２番目）が私どもの教室で研究を行っています。写真１に写っている他

３名は、まず、歯学教育研究開発学分野の特任助教の塩見晶先生（後列左から２番目）。彼女は週に１度当教室で研究を行っております。また、上野山敦士先生（後列右端）と齋藤直朗先生（後列左端）は２人とも口腔解剖学分野の大学院生４年と３年ですが、当教室の細胞培養室でも実験を行っています。

教育について

口腔顎顔面領域において疾患あるいは損傷などで組織欠損が生じた場合には、種々の歯科材料・生体材料を用いて形態と機能の回復を図ることで、患者様のQOLを維持することが歯科医師の使命といえます。こうした“再建”に使用される材料は、金属、高分子、セラミックスの単体やその複合材料、そして最近では細胞を含む生体材料までと多岐にわたります。さらに、再建をなしえるには、多くの器械や器具が用いられます。こうした広範囲にわたる材料に関する知識や、器械・器具の性質や取り扱いを学ぶことは歯科臨床にとっての基本といえます。さらに、将来における歯科材料・生体材料や医療機器の進歩、発達にも充分対応できる基礎的素養を養うことを教育目標とし、以上の要素を包括的に学生に理解してもらうために、物理学、化学ならびに生物学などの自然科学を基礎としつつ、臨床との緊密なかかわりを習熟できるような理念のもとで、材料科学を中心とした講義、実習指導を行っております。歯学科での講義科目は、２年生対象の歯科理工学Ⅰ（歯科無機材料学と歯科金属学）とⅡ（歯科有機材料・高分子材料と歯科材料の特性を中心にした材料学）および、生体理工学Ⅰ（材料特性に関する実習）を、主に大川先生と金谷先生が担当し、基礎科学演習（細胞培養基本手技と培養細胞を用いた生物学的分析）を私が担当します。３年生対象には、生体材料学（精密鋳造、力学、切削などの歯科臨床との橋渡し）の一部を大川先生と金谷先生が担当しています。歯科理工学Ⅱにおいては、特別講義として大阪で開業していらっしゃる高永和先生にお願いして、金属アレルギーについての知識を深めてもらっています。口腔内写真のスライドが100枚以上出てくるので、２年生にとってはインパクトのある講義になっています。大学院生対象には生体組織再生工学特論と演習を、聴講希望者に対して３人の教員で行っています。また、歯学科の学生講義用には、以前行っていた各回でのプリント配布をやめ、昨年度より資料を製本した教室独自の歯科理工学のテキストとして学生に配布して学生自身の勉強に使ってもらっています。当然ながら基礎講座の担当する科目は臨床系講座の講義よりも先にカリキュラムが組まれているので、早い学年の学生に教えることになります。私もそうでしたが、臨床実習を経験して初めて、基礎学問の重要さを痛感することが多いはずです。そんな学生のために、本講座監修の歯科理工学テキストが、臨床実習に触れた学生の自習勉強の手助けになれば幸いです。また、教員は一般歯科診療内容を知っているので、ともすると、これくらいの知識は歯学部学生なら知っていて当たり前、のような気持ちで学生に接することもあるかもしれません。ただし現実は、現在の歯学部学生の中には歯科の治療をうけたことのない学生が結構いますし、開業医で治療をうけたことのある学生でさえ、歯科治療の流れというものは全く理解していない状態です。歯科理工学は、歯科医師が日常的に使用する歯科材料を学んでもらうという意味で一般歯科治療との関連が濃い領域と考えます。学生の歯科理工学への興味を上げる意味においても、学生と教員の歯科材料に関する知識レベルのギャップをまず埋めてあげることも念頭に入れて講義・実習を行っております。

研究について

教員３名がインディペンデントに、かつ多岐に渡る内容の研究を行っております。

①歯科チタン鋳造の埋没材に関する研究：
　チタンと埋没材による表面反応層の構造とチタン鋳造体の諸性質に及ぼす影響の解析。

②チタンの表面処理と生体親和性に関する研究：
　チタンの表面に電気化学的処理を行うことに

よって、生体親和性を向上させる特性を付与する手法の開発。

③各種歯科合金の腐食挙動の研究

④普通石膏と硬質石膏の硬化膨張圧に関する研究

⑤歯科用材料の研削・研磨のダストが人体におよぼす影響：

微粉末が人体に及ぼす障害についての幅広く検討。

⑥口腔粘膜上皮前駆／幹細胞の単離と同定：

いまだに見つかっていない前駆／幹細胞マーカーや、上皮組織内における前駆／幹細胞集団の局在も検討を含め、包括的なアプローチを行い探索する。また、この性格を示す細胞を培養環境で維持する微小環境システムの構築。

⑦培養口腔粘膜の非侵襲的評価法の開発

培養口腔粘膜の品質をさらに担保するために、本学医歯学総合病院で臨床応用されている、患者移植用の培養口腔粘膜作成中の品質管理と出荷基準として非侵襲的に、かつ生物学的特異性をもった評価方法の開発。

⑧薬理学的操作によるロット差の少ない培養口腔粘膜作成

⑨口腔粘膜の組織学的変化検証モデルの開発（ビスフォスフォネート製剤、義歯装着）

本教室が所有するバイオテクノロジーの基盤技術を応用し、３次元培養を用いたインビトロモデル系による口腔粘膜における病態解明や、健康な口腔内で起きる生物学的現象に対する分子生物学的解析。

を、３名の教員と大学院生で実施しています。とくに①ー⑤についての研究には分析機器が不可欠ですのでこの場を借りて、当分野にある主な実験用機器をご紹介します。

粉末X線回折装置（XRD）

多数の単結晶の集合体（粉末）のX線の回折の結果から結晶の同定とその構造を解析でき、セラミックス、金属、有機材料および先端材料など広範囲な材料が解析可能です。

高周波誘導結合プラズマ質量分析装置（ICP-MS）（写真２）

誘導結合プラズマ（ICP）を励起源として用い、励起されたイオンの質量を質量分析計で計測します。高感度でしかも多元素同時分析が可能。水道水や河川水、大気粉じん、食品、医薬品、土壌、生物などに含まれる極微量元素のppbオーダーでの分析が可能で、近年メタロミクスという新研究領域に応用可能です。

高周波スパッタリング装置

真空中に試料を入れ、試料とターゲット（電極）間に電圧をかけることで電子やイオンが高速で移動しターゲットに衝突しターゲットの粒子をはじき飛ばすことで、粒子が試料に付着することで、試料表面に膜を形成し、試料表面をスパッタリングできます。

蛍光X線分析装置（XRF）

X線を試料に照射した時に発生する蛍光X線のエネルギーやその強度から物質の成分元素や構成比率を定性的および定量的に分析します。

走査型プローブ顕微鏡（SPM）（写真３）

プローブ（探針）と試料間に作用する物理量（原子間力、粘性、微小電流など）を検出し、微小領域の表面形状や物性を測定する顕微鏡で、主に試料表面の形態観察用顕微鏡として用いられ、表面粗さ計測機器としても有用です。

微小硬さ試験機

試料表面に一定の荷重で硬質の圧子を押し込み、硬さを測定します。

X線光電子分光装置（XPSまたはESCA）

試料にX線を照射し、放出された光電子の結合エネルギー値によって、元素の種類と結合状態を分析する表面分析装置です。

フーリエ変換赤外分光装置（FT-IR）

試料に赤外光を照射して透過または反射した光を測定し、試料の構造解析や定量分析を行います。-OHや-COOHといった官能基のピークを解析することで、化合物の部分的な構造が推定できます。

材料試験機（オートグラフ）

試料の強度試験などに用います。

チタン鋳造機

二室差圧鋳造機、遠心鋳造機の他に一室加圧鋳造機を現有しています。

以上教室所有の機器の内容からおわかりのように、研究の主眼は“分析”でした。今後は、国内外のラボとの協同研究を活発にして、ナノテクノロジーを主眼にした“モノつくり”に関しても模索していきたいと考えております。

おわりに

このような研究テーマを中心に海外留学への挑戦あるいは国際学会における発表の機会を通し、既存の海外ネットワークを利用して国際舞台の場で活躍出来る人材の育成にも取り組んでおります。また、共に研究し、学ぶ、開かれた研究室であり続けることを心がけ、意欲ある若人の志願を大歓迎します。また、材料科学と歯科臨床との橋渡しをするべく、臨床系教室の協力を得て、歯科臨床の発展に寄与して参りますのでよろしくお願い申し上げます。

写真２　高周波誘導結合プラズマ質量分析装置

写真３　走査型プローブ顕微鏡

微生物感染症学分野

微生物感染症学分野　助教　土　門　久　哲

微生物感染症学分野　教授　寺　尾　　　豊

1　はじめに

本分野は平成24年７月、寺尾教授の着任に伴い、『微生物感染症学分野』と名称を変更いたしました。翌年４月には徳島文理大学から小田准教授が着任し、７月には本学から助教として土門が新たに加わりました。また、臨床の分野から２名が大学院生として本分野に参加し、研究ならびに教育補助を行っております。新体制となってから現時点で１年が経過し、研究室運営や授業・実習なども軌道に乗ってきました。日々の活動内容につきましては、ホームページから詳しく発信しております。本分野のホームページは、小中高生や本学部学生の保護者さま、市民の方々とも双方向で交流可能なページに仕上げるように心掛けています。歯学部にご所属の本誌読者の皆さまには、平易すぎる記載もありますが、ご閲覧いただければ幸いです。

【ホームページURL】

http://www.dent.niigata-u.ac.jp/microbio/microbio.html

2　教育活動

次に、本分野で担当している講義や実習についての内容を述べます。歯学科では、２年次学生の『基礎科学演習』と３年次学生の『微生物学Ⅰ・Ⅱ』（実習含む）を担当しております。学生さんは微生物学を受講する前に、本分野の『基礎科学演習』に参加することになります。したがって、われわれ教員とともに、楽しみながら微生物学の基礎を学び、実験を行うことを第一のコンセプトとしております。演習前半ではう蝕原因菌について学習するとともに、微生物学における基本的な実験を体験します。後半では、微生物学に関連して各自が興味や疑問を持った事項に対し、自ら実験計画を立案し、実験を行い発表します。歯科医師・研究者としての将来を見据え、バイオロジー研究能力およびプレゼンテーション能力を本演習により向上させます。３年次の『微生物学Ⅰ・Ⅱ』は、細菌学、口腔細菌学、ウイルス学・真菌学、免疫学、そして実習と５つの単元から構成されており、微生物感染症学に対する積極的な学習意欲を高めることを第一の目標としております。歯学部に入学した生徒の多くは、歯科医師・歯科衛生士としての将来を描いているため、ともすれば、歯科治療に直接関与しない授業には消極的になることもあります。しかしながら、これからの歯科医療人には、口腔と全身の健康を統合的に俯瞰しながら個々の歯を治療する知識と経験が必須になると考えています。そのため、各回の講義時には、将来の臨床現場で本基礎科目知識がどのように関連してくるかを統合的に解説することを心がけています。特に、高齢者が多く罹患し、社会的な問題となっている「誤嚥性肺炎」は、医科からの連携が求められている現在の重要課題です。医科をリードし、患者さんのQOL向上に寄与で

現在の教室員

基礎科学演習
臨床分野の実習に先駆け、う蝕経験歯数を検査し、
細菌学的なカリエスリスクの判定も行います

微生物学Ⅰ・Ⅱ講義

細菌学・免疫学実習
最新の機器を用いて、細菌の染色像を確認します

疾病とその病態 講義

きる「これからの歯科医療人」を輩出すべく、微生物学の知識を十全に習得できる指導方法を毎年工夫しています。一例として、全ての授業で視聴覚素材を多用し、「理解できる・分かりやすい」というイメージから導入するよう努めています。さらに、細菌学・免疫学実習では、口腔細菌の取扱法を修得するとともに、座学で学んだ事項をより深めるための内容となっております。実習を通じて、実験や研究に興味を抱いた学生さんは、いつでも本分野を訪ねてください。課外の研究活動を歓迎するとともに、教室員一同がサポートいたします。

口腔生命福祉学科では、2年次学生の『疾病とその病態』講義を行います。学生さんは講義に先立ち、PBLにて内容を学習しているため、最初にCBTや国家試験等に準じた画像付きの選択肢問題を解き、自分の知識レベルを確認します。その後で講義を聴き、再度、同じ問題を解答します。この選択肢問題は、各自のスマートフォンで実施できるシステムを寺尾教授が制作し、“Niigata StAgE（スマートフォンやタブレットを用いた到達度把握型の学習システム）”と名付けています。学生さんから好評であったため、今年度はVersion2に進化させ、各自の試験結果をメールで受け取れるようにいたしました。時間を置いての復習に活用してもらえれば、学習効果が高まると推測しています。

これら本科目を受講した学生さんの「生の声」

は、同意を得た上で先のホームページに掲載しています。教員も真剣に精読し、励されたり、次年度の改善への動機付けにしています。

3　研究課題

つづきまして、本分野で遂行中の研究テーマに関して述べさせて頂きます。現在、医科領域の研究テーマを、大学院生の教育と平行するかたちで展開しており、主に溶レン菌や肺炎レンサ球菌の研究を行っております。溶レン菌は、国内だけでも毎年10～20万人の感染者が発症する咽頭炎・扁桃炎の起因菌で、世界では毎年50万人以上の死亡例が報告されております。一方、肺炎レンサ球菌は肺炎、気管支炎等の呼吸器感染症や菌血症などの起因菌で、特に小児と高齢者において注意が必要な疾患を引き起こします。歯科に関連したものとしては、う蝕原因菌もテーマとして掲げており、それぞれを以下にまとめました。

1．感染免疫現象のバイオイメージング解析

本研究テーマでは、高解像度のイメージング機器を用いて、免疫細胞と細菌の相互作用を個体対個体レベルで、あるいは一分子レベルでリアルタイムに解析することを目指しています。

2．微生物タンパク質・DNAのナノスケール解析

最新のナノテクノロジーを微生物研究に応用した研究を展開しています。微生物由来の遺伝子をパソコン上でデザインした形態に折り畳むことにより、新たな機能が生じるのではないかと推察しています。

3．病原性レンサ球菌の分子解析

溶レン菌は、菌の表面に発現する分子群を利用して体内に侵入後、宿主の免疫系から回避することで増殖し、感染を拡大させます。そこでこの免疫回避機構に影響されない感染防御の方法を考案したいと考えています。

上記研究の詳細につきましても、ホームページに展開しております。

4　おわりに

本原稿は、本分野へ最後に加わった土門助教の客観的、かつ新潟大学歯学部で学び勤務した観点から記載してもらうことにしました。原文の大綱を変えない程度に寺尾が加筆しましたが、歯学部ニュースを読まれている皆さまと近い視点で分野紹介ができていると推察しています。

4年次学生さんの課外実験

教室員の誕生日は毎回お祝いします
（画像は寺尾教授誕生会）

忘れがたい先輩歯科衛生士に感謝

診療支援部歯科衛生部門　小　島　千奈美

はじめまして、診療支援部歯科衛生部門の小島と申します。現在、診療支援部歯科衛生部門は私が入局した平成18年の12名から26名の大所帯となりました。私は１ブロック一総合診療部（準備室管理、学生・研修医のサポートなど）、２ブロック一予防歯科・歯周病科（周辺業務・メインテナンスなど）で日々働いております。１、２ブロックで５名の歯科衛生士が配属されていますが２名はメインテナンス業務にまわりますので実質３名で広い診療室をかけまわらなければなりません。先生方により細やかな配慮ができるよう充実した配置をのぞんでいるところです。

私は運よく今まで配置異動をせずに過ごしてきました。長い方では８年間メインテナンスに携わる事ができました。長くなるにつれ段々新潟弁丸出しの会話になってしまい通り過ぎる方は何を話しているか解らない事があるかもしれません。８年間といっても高齢者の８年となってはライフステージがかわり今までに当たり前に出来たことが、そうでなくなるといったことが多々あります。口腔内の環境の変化に対応できる方、一方口腔ケアに移行する方さまざまですが患者さんの心の寄り添い少しでもQOLのお役に立てたらという気持ちで日々頑張っています。

私の日々の原動力は家族であり仲間であったりもしますが、この病院に入り当初同じ科であった先輩歯科衛生士の影響があります。開業医上がりの私を根気強く時には厳しく教えて頂きました。患者さん・先生・学生にきちんと説明が出来るように勉強が必要なことを痛感させられたのも彼女のおかげであると思います。変なプライドがあった私は解らないので教えてくださいということが出来ず、彼女のメインテナンスや業務記録を盗むように見ていました。そんな矢先、先生とのミーティングの際休みを取っていたはずの彼女が点滴スタンドをひいてあらわれ普通に参加していました。これほどプロ意識を強く持ち自分の仕事に心血を注いでいたのかと愕然としました。当時、子供も小さく病気がちで自分だけが忙しくつらいと心が荒みそうな時にみた光景だったので彼女のことを思ったら私の悩み事はほんの些細なことと吹っ切れた瞬間でした。彼女は患者さんと会話する時は本当に楽しそうですし何事にも一生懸命でした。モチベーションの下がった患者さんには本気で向かいあっていろいろなアプローチ方法を考え実践していました。一方、同じく家族を持ち忙しく働く主婦もこなしていたのだと思います。そんな姿を見て私も彼女のような強くて懐の大きな歯科衛生士になりたいと明確な目標ができました。

今は遠い所にいらっしゃいますが勧めてくれた認定歯科衛生士も奥田先生の指導の下、取得できました。又、歯周病学会のポスター発表・論文等でお世話になった竹中先生、本当にありがとうございました。私には何が出来るのか何が残せるのか？見守っていてくださいね。

次は、かわいくて強い歯科衛生士、白井友恵さんです！

心に健康を

診療技術支援部歯科衛生部門　白　井　友　恵

は～い！小島千奈美さんからご紹介頂きました、歯科衛生士の白井友恵と申します。私は、歯科助手を経て歯科衛生士になったので、年齢に反し、歯科衛生士歴はまだ６年目です。新潟大学医歯学総合病院で働くと同時に社会人大学院生として顎顔面口腔外科学分野に入学し、３年目になりました。仕事と大学院の両立は想像以上に難しく、毎日が気力との戦いです。

大学院入学当初は、自分自身の教養のなさを恥じる日々がしばらく続き、自尊心が欠落しましたが、「今までわからなかったことが、今わかったらそれでいい」と思考回路を変換させ、前向きに取り組む努力をしました。出来ないままの自分でいることが許せない性分なので、人の倍の時間がかかってもいいからわかるまでやると決めています。

一方、仕事においては診療を円滑に行える、安全かつ働きやすい環境作りを心掛けています。要領よく動く上で、即時の判断力が必要となりますが、容易なことではありません。常に己を客観的にみる眼を持ち、冷静な判断ができる状態であること、これに尽きます。まだまだ、不十分な所が多く、迷惑をかけていますが、どんなことでも相談できる環境があり、先輩衛生士さんや看護師さんから学ばせて頂いております。その度に経験値の重要さを感じます。

「経験値」の大半は、自然に身についていくものですが、糧として役に立つものは積極的に関わって得た経験です。中には、やらなければ良かったことやしたくなかったこと…数えきれない程あります。その経験も全て含めて今の自分が成り立っているので、現時点ではここまでが限界なのだと悟っている次第です。いつまでも謙虚に学ぶ姿勢を持ち、他者からの助言や思考を素直に聞ける自分でありたいと思っています。

時に、身体の不調や気分の不快、精神的な苦痛もありますが、患者さんにとってはいつでも元気でいてほしい、当たり前な存在なはずです。私達医療人も人間です。笑顔でいれない時もあるでしょう。心の健康を保つことは課題となります。

あくまで私の場合ですが、イライラしてしまったり、気分が落ち込む時は、クラシックなどを聴き、心を一定に保つようにしています。そして、何よりの癒しは愛猫のランと触れ合うことです。最近は歯磨きを嫌がるようになってしまいました。歯の健康は全身の健康です。人間と同様、動物も口腔内環境を整えることは長生きにつながると獣医さんもおっしゃっていました。20歳まで生きてもらえる様に頑張ります！話が

少し逸れましたが、心を常に整えておくことは医療人として必要なことであると思います。心の豊かさは人を明るくし、余裕を与えます。

何か困難な事があったり、一歩踏み出せない時でも時間は過ぎていきます。自然と時間が解決し、人を成長させることもあります。何年経過していようときっかけが今ならば今やればいい、思い立ったけれどまだ時期ではないと思うならば止めればいい。要は「志をたてるのに遅すぎるということはない」と私は思います。歯科衛生士などの職業関係なく、偶然このページを読んで下さった方達の少しでも糧となれたら光栄です。

最後までお読み頂きありがとうございました。今後とも宜しくお願い致します。

素 顔 拝 見

生体歯科補綴学分野
助教

青 柳 裕 仁

2014年４月１日より生体歯科補綴学分野の助教に就任いたしました青柳裕仁（あおやぎ　ゆうじん）と申します。本学を卒業後、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔機能再構築学講座先端材料評価学分野（旧歯科理工学第一講座）で歯科理工学の学位を修め、神奈川歯科大学生体材料器械学講座で講師として勤務しておりました。専攻分野は歯科理工学で、新規材料および新規器材の開発・評価を行っております。今まで基礎分野の教員として歩んで参りましたので、この度、魚島教授の御厚情により生体歯科補綴学分野の一員として御採用頂き、臨床に追われる日々を送ることに驚きを感じることがあります。人生、一寸先は闇と申しますが、だからこそ人生は面白くも切ないものだと痛感する今日この頃です。

現在教室では窓際の席を頂き、時折外を眺めますと、建物は変わりましたが平安閣が目に映り、学生時代眺めていた風景を思い出すことがあります。以前神奈川歯科大学に勤務していた時にも窓際の席でしたが、窓から顔を覗かせると窓より外はアメリカ軍の基地のため、なかなか刺激のある生活を送っておりました。誤って転落でもしてしまうと亡命にでもなるのだろうかとの好奇心もありましたが、ゲートを守備するアメリカ兵の装備の物々しさを目の当たりにしますと、流石に実行に移す勇気はありませんでした。

最近は学生時代と比較しかなり体重が増えてしまいました。時々患者様から、「若乃花に似ている」や「くまのプーさんみたい」と言われ、臨床実習中の学生に笑われる日々を送っております。ちなみに、６年生に私の印象を聞いてみたところ、「菓子パンを食べている人」とのことでした。もう少しダイエットに努めようと現在真剣に考えております。

私生活に関しましては、家にTVがありません。正確には、TVがあってもTVが映りません。昔はニュース番組を見ていたので１日30分位はTVを見ておりましたが、近年ではインターネットで情報を得ることが可能なため、約８年前から自宅でTVを見ることがなくなりました。最近では実家への帰省時等で偶に見る位です。従いまして、現在のドラマやアイドルの話等を振られましてもほぼ分からない状態です。また、スポーツ観戦に関しましてもあまり興味がありません。一応ニュースには目を通しますが、選手名などはよく分かりません。

休日は他大学で研究を行っていることが多く、たまに自宅にいても家事で時間の大半が失われて行きます。なお、残された時間は、というより休日は朝から飲んでいることが多く、気が付けば夜になっていることもしばしばあります。こうして文章にしてみますと刹那的な生活を送っていることがよく分かりました。

最後まで稚拙な散文に御付き合い下さいまして誠に恐縮です。今後は少しでも母校に貢献できますよう努力していく所存ですので、御指導・御鞭撻の程よろしくお願いいたします。

微生物感染症学分野
助教

土 門 久 哲

平成25年７月１日より微生物感染症学分野で助教を拝命しました。土門久哲と申します。この度、ついに素顔拝見の原稿依頼が来てしまいました。面白いことは書けないかもしれませんが、約１ページお付き合い下さい。

私は生まれが仙台市なのですが、父の仕事の都合上、小学校入学と同時に新潟市内に引っ越して参りました。その後は後述の一部の期間を除き、ずっと新潟に住んでいます。新潟高校を卒業し、そのまま新潟大学歯学部に入学しました。学生時代の私は…と、ここまで書いたはいいものの、あまり特筆することの無い学生だったかもしれません。ひとつ挙げるとするならば、痩せていました。少なくとも当時は太らない体質だったようで、目標体重は50キロという、今から思えば大変贅沢な悩みを持っていました。中年太りで院生さんからもネタにされてしまう現在とは大違いです。助教着任の挨拶をさせていただいた時も、一部の先生方から、「土門君って、学生時代スレンダーだった、"あの" 土門君だよね？」と言われてしまいました。はい、当時から体重の３割ほどお腹まわりの贅肉が多くなりましたが、本人です。健康診断で、腹囲測定係のおばちゃんに測ってもらった後「あら、測り間違いかもしれないわね。」となり、再度の測定後、残念そうな顔をされました。私もつらいです。

メタボの話はここまでにします。大学卒業後、私は歯周診断・再建学分野に大学院生として入局いたしました。大学院を選んだ理由は、研究と臨床を両方バランス良くやりたいと考えていたためと、縁あって同分野に誘われたためです。しかしながら、大学院生活を続けるうちに研究が好きになってしまい、大学院生活の７～８割くらいは研究をして過ごしました。進路を迷っている（特に新潟出身の）学生さんには、是非とも大学院に進学することをおすすめいたします。研究も経験することで、自分の進路の選択肢が広がるかもしれません。もちろん、そこから臨床に戻ることも十分に可能です。興味がある方は一度当分野まで見学にお越しください。現在、歯学科４年生と３年生が数名出入りしており、和気藹々と研究を楽しんでおります。

大学院修了間際の冬、突然指導教授の山崎先生より留学の話が舞い込んできました。留学先はアメリカのケンタッキー州のルイビル大学で、当時歯周病の研究において躍進を遂げた大学でした。ケンタッキー州といえばフライドチキンですが、予想に反し、現地ではMで始まるハンバーガー店の方が人気でした。朝からドライブスルーに車の列ができており、そのうち２台がパトカーだった時、自由の国であることを実感しました。ラボでは主に歯周病と加齢関連の研究、またMD-PhDコースの学生さんに対して、研究手技の指導を行っておりました。指導というと聞こえはいいですが、実際は私が研究の先生、彼女が英語の先生、という形で時折英語を教わりながら研究をしておりました。スラングを教わって２人して別のポスドクに怒られたこともいい思い出です。現地での２年間はいい経験となりましたし、いい思い出です。

帰国後も歯周科で３年間ほど研究と臨床をしておりましたが、今回、微生物感染症学分野の寺尾教授から助教のお話があり、お引き受けしました。現在は、臨床の代わりに、細菌学の講義の一部や基礎実習などを担当しております。まだ慣れない点も多く、ご迷惑をお掛けすることもあるかと存じますが、新潟大学歯学部のため、研鑽を積んで参りたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

❊

組織再建口腔外科分野
助教

長谷部　大　地

2014年２月より口腔再建外科の助教に就任させていただきました長谷部大地と申します。文章を書くことが苦手な私ですが、この度、歯学部ニュースの「素顔拝見」の原稿執筆の依頼をいただきましたので、私のこれまでを簡単に書かせていただこうと思います。

出身は新潟県で、出身大学も新潟大学歯学部です。学生時代は野球部に所属しており、野球部では残念ながらあまり活躍できませんでしたが、楽しく６年間の大学生活を送ることができたと思っています。1998年３月に何とか歯学部を卒業する

ことができ、そのまま口腔再建外科に大学院生として入局しました。現在の国家試験は２月に受験、３月にその結果が判明しますが私の頃（約10年くらい前でしょうか）は、国家試験が３月で結果がわかるのが４月の中旬くらいでしたので、大学院生として入局したものの、歯科医師免許がもらえるのかもらえないのかでモヤモヤした状態であったうえ、新しい環境に入ったばかりでしたので、合格がわかるまではどっちつかず状態だったと記憶しています。幸運にも歯科医師免許をいただけることができましたので、当初の予定通り、1998年４月より口腔再建外科での大学院生の生活が始まりました。私は特にこれといった研究テーマがなかったのでその当時の教授である齊藤力先生と現在の教授である小林正治先生と相談して、顎変形症の臨床研究を行うこととなりました。この研究はなかなか大変な研究で、今思い出してもよく続けられたものだと思います。私の研究は患者さんに協力をお願いするタイプで、それも少しストレスフル？な検査をお願いしなければならなかったので、研究協力をお願いしても断られて、お願いしても断られる日々が続きました。それでも研究に快く協力してくる患者さんもいてくれて、お願いした患者さんのうち、半分以上が断られて研究のデータとして採用できなかったのですが、大学院の４年間で何とか学位研究として形にして、専門学会での発表や論文として投稿することができました。研究に協力してくれた方々には今でも大変感謝しております。こうして2005年に無事大学院を卒業して、医局より関連施設病院へ出向させていただくこととなり、山形県の鶴岡市立荘内病院歯科口腔外科へ１年間赴任させていただきました。その翌年に大学へ復帰し１年半病院の医員として大学病院で働かせていただき、2011年10月からは長野県の長野赤十字病院口腔外科へ半年間、2012年からは富山県の富山県立中央病院歯科口腔外科へ赴任させていただき、2013年４月から再び大学へ復帰し、現在に至っています。

　これまで、新潟近隣の県の病院歯科を中心に色々と勉強・経験をつませていただきましたので、助教として新潟大学医歯学総合病院でこれまでの経験を生かして新潟大学のお役に立てればと思います。

　まだまだ未熟な者ですので、皆様には色々とご迷惑をおかけするとは思いますが、何卒宜しくお願いいたします。

❊

歯科矯正学分野
助教

丹　原　　　惇

　歯学部ニュースをご覧の皆さん、こんにちは。４月１日付けで歯科矯正学分野の助教を拝命致しました、丹原　惇（にはら　じゅん）と申します。おそらく５度目？の登場となりますので、またお前か、と思われる方もいらっしゃると思いますが、少々お付き合いのほど、宜しくお願い致します。今までは、入学やら卒業やらで大学生活について書く事が多かったのですが、今回は素顔拝見との事ですので、私自身の特に、学部生時代の事について書こうと思います。

　2001年４月に新潟大学歯学部に入学し、故郷の福井での生活から一変して、新潟市内で一人暮らしをスタートさせました。１年生の教養の期間は五十嵐キャンパス近辺に宿舎を借りる同級生が多い中、入学直後から東中通沿いの安アパートからバスで１年間、五十嵐へ通っておりました。家賃は安く、今のアパートと比べると古いのですが、立地条件が良かったのか、いろいろな人たちが訪れる場所でした。宅飲み会場はもちろん、グループ発表の準備やTシャツ製作所として使われたこともありましたし、何故か群馬県人会に参加する学生の集合場所が私の部屋だった何てこともありました。もはや完全なプライベートスペースとはいえない場所となっておりましたが、それはそれで楽しかった記憶があります。

　それから、学部の６年間はバレー部に所属していました。新入生宿泊研修の時にレクリエーションでバレーボールをしまして、その時に意気投合したバレー経験者だった同期２名と一緒に入部し

て、汗を流しました。北医体やオールデンタルで毎年、北は北海道、南は福岡まで日本各地を訪れることができたのは部活動の１つの醍醐味でした。最初は、公式戦で全敗するという危機的状況でしたが、練習の甲斐もあって次第に予選リーグを勝ち進めるようになり、決勝トーナメントにも進める実力がついてきました。そんな矢先、５年生の春に着地失敗による右側下腿（脛骨および腓骨）の複雑骨折という不運に見舞われました。その後の２年は補欠でしたが、オールデンタルで準優勝まで行けたのは、私の学部生生活の中でも最も感慨深い思い出の１つです。私が出場したら優勝できたのか、それとも出場しなかったから準優勝できたのかは未だ謎のままですが、個人的には謎のまま良い思い出として残しておきたいと思っています。

普段の学部での生活は当然ながら講義がメインでしたが、2000年からカリキュラムが大幅に変更され、2001年入学の私たちは新カリキュラムの２年目に当たりました。今はすでに定着している早期臨床実習やスタディスキルズ、通称セルと呼ばれた細胞生物学が１～２年生の間にスタートしました。その他の講義でもグループ学習やプレゼンを行うものが多く、教科書で勉強するのは定期試験前くらいで、講義の時間でもとりあえず話し合いをしながらPCでスライドを作っていました。幸い、PC関連は得意中の得意ですので、好きなことをやっている感覚で講義を受けることができました。また、４～５年生でPBLが始まり、トライアルではありましたがOSCEやCBTもカリキュラムに導入されました。このような新しい試みが多い新カリキュラムが始まりますと、当然くっ付いてくるのが学生によるフィードバックです。６年間でとにかく大量のアンケートを書かされました。定期試験後に解答が終わった者からアンケートを記入して、退出というスタイルが多かったのですが、場合によっては、試験の解答用紙が２枚なのに対してアンケート用紙が５枚ということもありました。このアンケート攻めは卒業しても続き、研修先からアンケートを郵送したということもあった気がします。実はこの結果は歯学会雑誌第39号１巻に「新潟大学歯学部歯学科の新教育課程とその評価」という原著論文として掲載され、これを読んで初めて６年間自分たちに行われてきた歯学教育の全貌が分かった気がしました。

かなり端折った内容ですが、学部生時代の私の一端を書かせていただきました。在学中はまさか卒業後に教員になるとは思っておりませんでした。しかし、今、新カリキュラムでの試行錯誤の中で教育を受けた私が今度は教育に携わる立場になったことに不思議と縁を感じております。若手として、新教育課程をを経験した卒業生として学生の視点に近い立場から歯学教育のお手伝いできればと思っております。若輩者ではございますが、歯学部の発展に少しでも貢献できるよう励んで参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

学会レポート

AADRに参加して

生体歯科補綴学分野　大学院３年　井　田　貴　子

2014年３月19日から３月22日までの４日間、アメリカのシャーロットで開催されたAADR（American Association for Dental Research）の年次学術大会に参加、発表して参りましたので、ご報告致します。

AADRは国際歯科研究学会（IADR）のアメリカ支部で、歯科における基礎研究および臨床研究に関するほぼすべての分野が一堂に会する学会です。今年はIADRの学術大会開催地が南アフリカで非常に遠かったことも影響し、アメリカのみならず多くの国々から参加者が集まっていました。

オーラルセッションでは、主にImplantology ResearchやMineralized Tissue分野の発表を聴講しました。各国で最先端の研究を行っている方々が発表しており、どの発表も非常に興味深く聞くことができました。発表を聞いて特に印象に残ったことは、学部学生が数多く発表していたことです。学生のうちに研究を行える環境が整っていることは学生にとって非常に有意義で価値のあることだと思いました。学生たちの発表を聞き、私自身も非常に刺激を受け、研究への意欲が湧きました。

この学会で私は、『Effect of Collagen Crosslinks on Osteoblast Proliferation, Differentiation and Mineralization』という演題名でポスター発表を行いました。本研究は骨質（Bone Quality）が骨代謝に与える影響を解析することを目的とするもので、その解明によって、骨代謝メカニズムの一端が明らかとなるばかりではなく、骨移植や骨増成方法の選択基準を提唱できる可能性もあり、その臨床的意義は大きいと考えています。骨質は様々な因子によって規定され、中でも骨組織の有機質の90%以上を占めるⅠ型コラーゲンの分子間架橋構造（クロスリンク）は重要な因子のひとつです。そこで、本研究では骨質、とりわけコラーゲンのクロスリンクのあり方が骨代謝に及ぼす影響を解析しています。

ポスターセッション自体は１時間で、発表の際には日本の方々に留まらず、予想より多くの方々から質問を頂きました。これまで、国内学会で発表する機会を頂いたことはありましたが、国際学会での発表は初めてであり、英語での受け答えにとても苦労しました。しかし、どの方も熱心に私の説明に耳を傾けて下さり、決して十分とは言え

学会場入口・学会場近くにて撮影

ませんが、ある程度はディスカッションを行うことができたと思います。スムーズに自分の研究を説明し、より活発なディスカッションを行うためにも、さらに英語力を身につけなければならないと実感しました。また、ディスカッションを通じて、自身の研究について別の視点から考えることができたとともに、有益なアドバイスを頂くこともでき、今回の学会発表は今後の研究を行う上で大きな意味をもつものとなりました。さらに、同様の研究を行う若手研究員と知り合うこともでき、大変充実した刺激的な経験をすることができました。

最後になりましたが、今回の発表に際して、魚島勝美教授、直接の研究指導をして下さっている加来賢先生をはじめ、本研究に協力して下さった生体歯科補綴学分野の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。また、今回は平成25年度新潟大学国際会議研究発表支援事業学術奨励費による助成を受け、学会に参加することができました。関係各位にも心から感謝申し上げます。

92th IADR in Cape town 参加報告

歯周診断・再建学分野　高　橋　直　紀

2014年６月25日から28日まで南アフリカ共和国のケープタウンで開催された第92回国際歯科研究学会（The International Association for Dental Research; IADR）にて発表の機会を得ましたので、ここに報告させて頂きます。

アフリカ南端

日本から飛び立ち、１回の乗り継ぎを得て計20時間の長距離フライトの末、ケープタウン空港へと降り立ちました。ケープタウンに着いてまず感じたことは、予想以上に寒いということでした。アフリカと言えば、灼熱の太陽が照りつけ、サバンナを野生動物が駆け回るイメージですが、南半球に位置するケープタウンの季節は晩秋、到着早々に衣料店で厚手のパーカーを購入する羽目になりました。

空港から市内へ向かうタクシーの車窓からは、ブリキ屋根の掘立て小屋が密集するスラム街が散見され、ぼろぼろな服を着た住民がそこで生活している光景は少し衝撃的でした。その一方で、市内に着くとそこはヨーロッパの街を連想させる落ち着いた高貴な雰囲気が漂う街並みでした。学会場の近くにあるウォーターフロントにはショッピングセンターやレストラン、ホテルが立ち並び、映画館、水族館もありました。治安もよく整備されているため、周辺には富裕層が住んでおり、特に白人の方が多く住んでいるそうです。アパルトヘイトが廃止されてもなお、未だに根付く格差社会が街並みの中に見え隠れしていました。

ケープタウンの美しい街並み

ウォーターフロントからの眺め

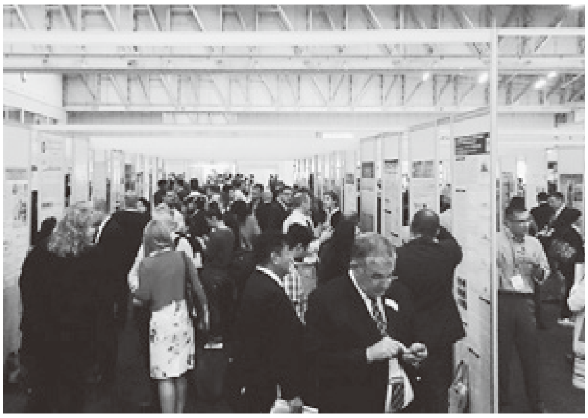
大陸初IADR

さて、今回で92回を迎えた歴史あるIADRですが、アフリカ大陸での開催は今回が初めてとのことでした。オープニングセレモニーは、民族衣装を纏った現地の方のライブパフォーマンスから始まりました。会場を見渡すと空席が目立ち、地理的な問題のためか例年に比べると参加者が少ない印象を受けましたが、その後に行われたオープニングレセプションは満員御礼となり、IADRの人気の高さが窺い知れました。

私が今回発表させて頂いたセッションは、Microbiology / Immunology - Mechanisms of Immunityで、私共のグループは、歯肉上皮細胞に発現している新規イオンチャネルTransient Receptor Potential タンパクが細胞増殖に関与していることを報告させて頂きました。他の研究者の報告を拝聴する中で、歯周病に関する分野では、やはり歯周疾患と全身疾患に関する研究が積極的に進められており、改めて世界的に関心が高いトピックであることを再認識しました。しか

しながら、因果か相関か、その詳細なメカニズムに関しては未だコンセンサスは得られておらず、今後の更なる研究が期待されるところです。

オープニングセレモニーでのパフォーマンス



賑わうポスターセッション会場

Hatton Awards とJapan Night

大会のオープニングに先立ち、優れた若手研究者に贈られる「Hatton Awards」の選考審査が行われました。私共の医局からも大学院４年生の後輩が日本代表に選出され、当日のプレゼンテーションに臨みました。残念ながら入賞は逃しましたが、国内最終候補者に選出されたことは、同じラボのメンバーとして大変嬉しく誇らしく思うと同時に、なかなかできない貴重な経験を今後の研究生活に生かしてくれるものと期待しています。その後の懇親会では、急遽、彼の指導医代理として参加させて頂くこととなり、様々な分野の研究者たちと情報交換ができたのは私自身にとってもよい経験になりました。また、日本人参加者のための懇親会である「Japan Night」では、日頃から研究面でお世話になっている他大学の先生方から、公私にわたるアドバイスを頂ける貴重な時間となりました。他大学、他分野の先生方との歓談を通して、様々な情報を交換・共有できるのも学会参加の醍醐味のひとつと言えるのではないでしょうか。

「Japan Night」会場にて

お世話になっている大阪大学の先生方と

終わりに

今回の学会でも大変多くの収穫があり、また異国の文化にも触れることができて、本当に有意義な時間を過ごすことができました。最後になりますが、このような機会を与えて下さった山崎和久教授をはじめ、研究の遂行に協力頂いている医局員の皆様に心より感謝の意を表します。

学　会　報　告

新潟歯学会報告

新潟歯学会集会幹事
包括歯科補綴学分野　助教　櫻　井　直　樹

平成26年度新潟歯学会の集会係は包括歯科補綴学分野が担当しています。

平成26年４月19日（土）に第47回新潟歯学会総会が歯学部講堂で開催されました。総会では平成25年度の会計決算報告および会計監査報告がおこなわれ、今年度の事業計画ならびに予算案が承認されました。また、平成26年３月に退職された包括歯科補綴学分野の野村修一先生と前新潟大学理事・副学長　山田好秋先生が名誉会員として承認されました。総会終了後、８題の一般口演が行われました。特別講演として東北大学大学院歯学研究科分子・再生歯科補綴学分野教授　江草　宏先生を講師にお迎えし、「iPS細胞が可能とする歯科医療とは」と題するご講演をいただきました。

平成26年７月12日（土）には平成26年度新潟歯学会第１回例会が歯学部講堂で開催されました。14題の一般口演のあと、教授就任講演として、新潟大学大学院医歯学総合研究科生体組織再生工学分野教授　泉　健次先生には「口腔粘膜上皮幹細胞の同定・単離を目指して」と題するご講演をいただき、新潟大学大学院医歯学総合研究科組織再建口腔外科学分野教授　小林正治先生には「顎変形症と顎関節」と題するご講演をいただきました。

なお、平成26年度第２回例会は11月８日（土）に歯学部講堂で開催される予定です。新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページ（http://www.sksp.co.jp/nds/index.html）をご覧ください。

江草　宏先生　特別講演

泉　健次先生　教授就任講演

小林正治先生　教授就任講演

同窓会だより

山村健介教授「摂食・嚥下の生理学」学術講演会を拝聴して

20期生　斎　藤　　　了

超高齢社会の進展とともに歯科治療のイメージが歯の形態回復から口腔機能の回復へ変化すると予測されています。歯科保険点数の改正でも有床義歯管理料が歯科口腔リハビリテーション料と名称変更され、摂食・嚥下機能の改善を目的とする舌接触補助床ついても言及されました。この時期にタイムリーな演題で、昨年の井上教授の講演に引き続くものでした。また、今回から同窓会の配慮により、遠方からも来やすいようにと、新潟駅と直結した東横インのフロントと同じ階の会場になりました。

さて、講演から。健康維持には身体の機能を適度に使う努力が必要で、体幹はエクササイズ、思考や記憶は脳トレがありますが、食は何をすればよいのでしょうか？食物の消化吸収には12〜24時間を要しますが、その内、咀嚼に要する時間はたった１分程度。しかし、この時がもっとも脳を使っている過程で、食べる幸せに直結しますと、山村教授は強調されました。嚥下は１日約500回行われ、経管栄養になると約３日後から廃用萎縮が始まります。まず、食塊を形成して作業側に集めるためには口唇閉鎖と舌の平衡側閉鎖によって口腔を閉鎖空間にする必要があります。そして、嚥下には食塊を陰圧で引き込むため、口唇閉鎖、上気道防御、下気道防御が必要です。ビデオで流れた嚥下実験の被検者は山村教授自身でした。下気道防御のためには甲状舌骨筋、舌骨、舌骨上筋群の固定が必要で、そのために下顎を噛みしめて固定しなければならず、この際に義歯が必要となります。つまり、舌による平衡側閉鎖と顎位の固定ができるようにするために義歯が必要であるとも考えられます。勝手な解釈ですが、動かない咬める義歯を作らなければならないというイメージより少しユルい感じで、義歯の下手な私にとって、ちょっとした慰めでした。次に、ヒトの摂食嚥下の特徴について。咀嚼時に行われる感覚認知によって、咬むことが覚醒度をアップさせます。食の記憶には３歳からの認知記憶と赤ちゃんの頃の情動記憶があり、個々人の記憶に基づいて食物が感覚認知されます。消化吸収過程で体温の変化を調べると、最初に食の感覚認知によって一時的に急上昇して下がるのですが、これが幸せを感じることではないかと考えられるそうです。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」のことわざのように、嚥下した後や経管栄養の際の体温上昇は緩やかなものでした。最後に嚥下調整食の開発も手がけてお

り、唐辛子やショウガといった食べ物は嚥下を向上させるという話がありました。

山村教授の人柄と同じく、ハートフルな講演でした。翌日に訪問歯科診療があり、早速、食物認知する際の代謝上昇によってあったかい感じがして幸せを感じるのではないかという、口から食べる喜びの話を伝えてみました。最後になりましたが、山村教授、同窓会関係の先生に感謝いたします。ありがとうございました。

平成26年度新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅠ

平成26年５月18日　於：歯学部講堂

シンポジウム「歯科訪問診療の現状と将来」
－生きる力を支えるかかりつけ歯科医としてできること－

江面　晃先生（日本歯科大学新潟病院　総合診療科教授）
野村　隆先生（新潟県歯科医師会地域保健担当　新潟市歯科医師会理事　新潟市開業本学19期生）
高橋純子氏　（新潟県歯科衛生士会下越地区代表　胎内市役所・健康福祉課　高齢福祉係主任）
木戸寿明先生（新潟県歯科医師会理事　地域保健担当　兼　広報担当　新発田市開業本学22期生）
コーディネーター：有松美紀子先生（新潟県歯科医師会地域保健担当　胎内市開業本学14期生）

平成26年度新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅠを拝聴して

28期生　山　本　幸　司

開業してまだ日も浅いのですが、開業当初より近隣の施設での訪問診療を行っています。

全くの手探りでどうしたものか？どこまでできるのか？満足していただけているのか？さらに何かできないか？など不安、不満がありつつも訪問先に出向き、これまでの経験と知識で診療を行っていました。そんな折、同窓会からのセミナー案内を見て、ほかの先生方はどのように訪問診療をしているのかを聞くことの機会が得られるので、参加を決めました。

学生だったころも訪問歯科診療の分野があることは知っていましたが、体系だって知識を得る機会はこれまでなく、最初のシンポジスト江面　晃先生の講演は自分にとって全く新しい内容でした。訪問歯科診療の特性から口腔機能管理、それを実現するための要介護者だけでなく家族も含めたアセスメントの作成と活用、ケアマネージャーを代表とする他職種者との連携のヒントなど短い時間で情報をたくさん詰め込み、かつ分かりやすく説明して下さいました。なかでも経皮的酸素飽和度の測定に関しては、診療に集中するあまり注意が行き届かなくなりがちな、介護者の容体変化に数値で気付くことのできるツールであり、すぐにでも臨床で使えるので、セミナー終了後臨床に導入しました。

野村　隆先生からは、これまでに見聞きしたことのあるデータを再確認したうえで「食べられる口を作る」ことを通じて訪問歯科診療が介護支援のみならず、自立支援なのだということ教えていただきました。昔、生理学で習ったペンフィールドのホムンクルスは体性感覚を脳皮質に投影した絵ですが、これまで患者さんに対して「口の感覚は脳の広い範囲を占めるのだから、ちょっとした傷でも痛いと感じやすいので我慢しないで来院してくださいね」という具合に活用していました。今回は見方を変えて「口からの刺激は脳を活性化するからいかに口から食べることが重要なのだ」ということが一目でわかる絵であることが解りました。

３人目のシンポジスト高橋純子先生からは、歯科衛生士としての立場、そして行政として現在地域で取り組まれている事業をお話し下さいました。医療保険、介護保険のほか新潟県で行われている無料訪問歯科健診事業の３つで介護者を支える仕組みになっていますが、私の開業している地域はかなりの過疎地域にも関わらず無料訪問歯科健診事業の実施率が低いようにも感じています。もっと認識してもらえるよう現在通院されている患者さんたちにも今のうちから情報提供しないといけないと思うようになりました。

木戸寿明先生は、施設での訪問歯科診療という内容で、実践されていることを分かり易くかつ軽快にお話し下さいました。施設の場合、１人の介護者に多くの人の手が入るのですが、その分個人の詳細なデータや普段の過ごし方など、誰に尋ねたらいいのか迷う時があります。義歯を制作や調整した前後で食事に変化があったのか？自立への意欲が出るようにこちらから働き掛けることはもっと多くあると思いました。

診療所を開いて３年足らずということもありますが、訪問先では初めて出会う人ばかりです。今回の同窓会学術セミナーを通じて、訪問歯科診療が特別なものではなく、診療室での診療の延長線上にある位置付けとして、元気で通院できる状態の患者さんのうちに、治療、メンテナンス、口腔ケアの一連の流れを作れるようにしていきたいと思います。そのために情報を発信できるようにやることが山のようにあると感じました。

シンポジウム「歯科訪問診療の現状と将来」を拝聴して

33期生　金　城　篤　史

大学入学の為、大阪から新潟に来て、早いもので18年目になります。学生時代はサッカー部に所属し、卒後は現包括歯科補綴学（旧１補綴）の大学院に進学して現在も同医局に在籍させて頂いております。

今回の同窓会学術セミナーは、有松美紀子先生のコーディネートで老年歯科学会の認定講習として開催されました。私自身は大学病院に勤務しており、普段触れることのない訪問歯科診療とはどのようなことが行われているのか、また、それを支える制度について、さらに介護の社会は歯科医に何を求めているのか、現場にいらっしゃる先生方からのお話を聴いてみたいと思い参加いたしました。当日は受付で早速、感想文執筆の依頼を受け、お陰様で若干のプレッシャーの下、数倍集中して勉強させて頂きました。

内容の構成は私のように全くの訪問診療未経験者でも理解できるように、日本歯科大学新潟病院口腔ケア機能管理センターの江面晃先生の総論に始まり、新潟市歯科医師会理事の野村隆先生、新潟県歯科衛生士会下越代表の高橋純子先生、そして我が医局OBで新潟県歯科医師会理事の木戸寿明先生へと、各論、導入、臨床の現場のお話へとつながり、講師の先生方がそれぞれのお立場から大変分かりやすくご講演くださいました。高齢者、とくに要介護者が対象であるため考慮すべきことが多く、また介護に携わる様々な職種の方との関わりがあることからも幅広い知識が求められます。講師の先生方がまさに日々の臨床で直面し、体感していることを交えながらお話しして下さったので、最後まで集中してついていくことができました。

訪問診療に携わるにあたって、高齢者の病気の特徴を捉えることがまず第一歩であり、特に要介

護者では、認知症、介護への抵抗、脱水症状を起こしやすい、肺炎を起こしても発熱の症状が出にくいなどの特徴をとらえる必要があります。要介護者のアセスメントとともに、実際に介護を担っている家族、ヘルパーさんなどの介護者のアセスメントも必須であり、継続的に口腔ケアを行う介護者のモチベーションを保つことが最重要ともいえる課題であります。

さらに話は核心に迫り、介護者への説明、介護者の健康状態、老老介護、認認介護の現状、など多くの情報の把握と理解が求められます。訪問歯科は、補綴して終わりではなく現状からさらに終末期までを考える、実際の現場を見て問題を直視しなくてはならない場であるということです。また、常にパルスオキシメーターでSpO_2を測定しながら診察することももはや常識となっているとのことで普段から測定しておくと健康状態の基準とすることができます。

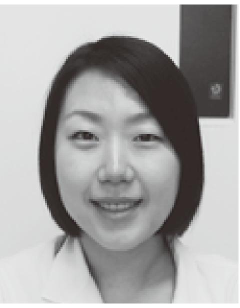
先生方の豊富な知識と経験からの貴重なお話を聴かせて頂いて、訪問診療に携わる際には、介護者から「相談相手が１人増えた」と思ってもらえるような立場で関わり始めることができればと感じました。

お忙しい中、講演してくださった講師の先生方、コーディネーターを務められた有松先生、そして準備に携わられた同窓会の係りの先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

総合診療部を経験して

総合診療部を経験して

歯科矯正学分野　大学院１年　中　田　樹　里



初めまして、歯科矯正学分野大学院１年の中田樹里です。私は2013年３月に本学を卒業後、１年間総合診療部にて研修をさせていただきました。ここでは、私がこの１年間を通して経験し学んだことをお伝えしたいと思います。

なぜ本学総合診療部を研修先として選択したかというと、一般歯科診療について学びたかったということが１番の理由でした。限られた研修期間内でじっくり研修をしたかったので、慣れ親しんだ環境であることも選択を行う上で重要視しました。そして、この研修を通して自分の抱く歯科医師像をもっと具体的なものにしたいと考えておりました。

実際に総合診療部で研修を行い、本当に良い選択をしたと感じておりますが、その中でも特徴的であったことをいくつか紹介したいと思います。まず１つ目としては、自分が責任者として患者さんを担当させていただけたことです。初診来院された患者さんの医療面接、口腔内診査から始まり、治療方針および計画の立案、治療経過と予後の一連の流れを実際に経験することができました。学生時代に各分野の知識として学んでいたものがそれぞれ繋がり、断片的だったものを統合して考えられるようになりました。どのような症例においても、患者さんの現症を把握し、適切な治療方針および計画を立案することの重要性と難しさを痛感しました。

また、最善の治療を提供するためには、患者さんと良好な信頼関係を築き、ご本人のご協力が必要不可欠です。総合診療部では、毎回診療時に十分な時間を取り、治療内容について患者さんに説明を行うようにしています。説明をするためには、術者が患者さんの状態を十分に理解している必要がありますので、自然と様々なことについて学習を行うことになります。来院回数が増えるにつれ、患者さんとの信頼関係が築かれ、治療終了時に食べられるようになって喜ばれる患者さんの姿は今でも脳裏に浮かびます。

そしてこの研修期間は、まさに「人に恵まれた」１年間でした。総合診療部には各分野のスペシャリストである指導医の先生が在籍されているので、多様な観点から指導をしていただきました。どのような基本的な知識でも、嫌な顔一つせずに教えてくださいました。また、ただ分からないことを教えるだけではなく、症例について問題提示し、私たち研修医に考える機会を多く与えてくださいました。もう１つの恵まれた「人」は、いわゆる「社会人１年目」をともにした同期の研修医のみなさんでした。「できたこと」「できなかったこと」をみんなで共有し、切磋琢磨しあうことができました。診療がうまくいかず落ち込んだ時にも、みんなで励まし合った１年間でした。研修で出会った同期の先生方とは今後もお互いに助け合って歯科医師人生を歩んでいくことと思います。

思い返すとあっという間でしたが、たくさんの成長があった１年間であったと感じます。少しずつではありますが、自分の目指す歯科医師像を具体的にイメージできるようになりましたし、改めて医療従事者として患者さんと携われることに喜びを感じます。総合診療部での１年間は私の歯科医師人生の基盤であり、いつまでもここで感じた「初心」を忘れずに精進して参りたいと思います。

臨床研修を終えて

歯学教育研究開発学分野
大学院１年　中　村　　　太

2014年３月をもって、無事に１年間の臨床研修を終了し、歯科医師としての新たな一歩を踏み出すことができました。これもひとえに指導医の先生方のご指導のたまものと感謝しております。

臨床研修が実際に始まる前は、新しい環境と新しい仲間に期待を膨らませながらも、やはり心中には大きな不安がありました。しかし、実際に臨床研修が始まってみると、良き環境と仲間に恵まれ、とても有意義で楽しいものとなりました。

この１年間は、診療の技術だけではなく、診療に対しての姿勢や患者さんへの対応、配慮等、様々な事を学びました。『診療参加・実践型の臨床研修を通じて生涯学習につながる問題解決・自己評価の姿勢を涵養する』という基本方針の下、実際に自分が主治医となり、治療を進めていくという事の難しさと達成感は今までにないものでした。診療が進むにつれ、徐々に患者さんとのラポールが形成されていくのを感じ取れたり、以前なかなか上手く行かなかった診療がスムーズに進められるようになったりと、毎日の診療が自分の糧になっていく歯科総合診療部での臨床研修はとても刺激的で、今までの人生の中で最も短い１年間だったと感じています。

臨床研修が始まる際、藤井教授が、「『信頼される歯科医師』になれるよう努力しなさい」とおっしゃられたのを今でも覚えています。患者さんに信頼される歯科医師、同僚に信頼される歯科医師、色々な解釈があると思います。まだ技術的に拙い自分に対して、「先生のことは信用しているから、先生がいいと思う治療をして下さい」とおっしゃって下さる患者さんもたくさんいらっしゃいました。とても有難い事ですが、自分自身、まだ自分を信頼できないところがあります。１年間の臨床研修で得られた大きな経験をベースに、これからの歯科医師としての人生で得られる様々な経験を積み重ねていき、自分が自信をもって信頼できる歯科医師になれるよう、これからも努力をしていきたいと思います。

この１年間、一緒に苦楽を共にした同僚と離れ離れになってしまったのは悲しいことですが、それぞれの選んだ道が、これからの長い歯科医師としての人生の中で、再び交わることもあるでしょう。そうなった時に、胸を張って自分の歩いてきた道を紹介できるように、自分が選んだこの道を進んで行きたいと思います。

私自身は、この春から講座が開かれた、歯学教育研究開発学分野の大学院に進学することとなりました。何もかも初めてで、研究も手探りの状態ですが、だからこそ、やりがいのある分野であると感じています。歯科総合診療部のスタッフとして、今まで指導して下さった先生方と一緒に働かせていただいていますが、ポートフォリオや研修の準備など、指導医の先生方の見えない苦労を知り、改めて感謝をする日々です。

歯科医師臨床研修制度が必修化され８年が経ちますが、新潟大学医師学総合病院歯科総合病院という、全国的にも恵まれた環境にて臨床研修を行うことができたのは本当に幸運な事でした。人生は長く、これからまたいろいろな事があるでしょうが、歯科総合診療部で過ごしたこの１年間は間違いなく特別なものでした。これからの研修医にとっても、そうであるように、これからは微力ながら自分も臨床研修に関わっていきたいと思います。

歯学部運動会を終えて

歯学科５年　箱　山　友　祐

６月14日土曜日、今年も恒例の歯学部運動会が行われました。私は今回の歯学部運動会の実行委員長を務めさせていただきましたので、ここでは運動会開催にあたっての経緯等々を述べたいと思います。

歯学部運動会の幹部学年（主に準備・運営において中心となる学年）はその年の５年生が担っており、その実行委員長は年ごとに３つの部活の持ち回りで選ばれています。今年はサッカー部が担当する年ですので、部員である私が務めることになりました。今の５年生には私以外にもう一人サッカー部員がいますが、彼は毎回この歯学部ニュースに寄稿している通称文豪で（今回もどこかに彼の文章が…）、いつもクラスのために献身的に活動されていますので、「たまにはオレが…」ということで私が務めることになりました。

歯学部運動会は、本来は学生による学生のための行事ですが、毎年各診療科の先生方にも学生に交じって運動会に参加していただいていました。しかし、今年は例年とは少しばかり趣向を変え、１年生から６年生までの各学年の６チームとは別に、先生方のみのチームを新たに作り、合計７チームで競技を進めるようにしました。

開会式にて
選手宣誓をするサッカー部員。「緊張して声が出なかったため、マイクを使わせてもらいました…」ようです

運動会当日の朝です。今にも雨が降り出しそうな空模様の中（天気予報では降水確率50％でした）、午前８時に集合した学生によって、本部の設置や立て看板の組み立て、グランド整備等の準備が進められました。午前10時に開会式が行われましたが、学生の普段の行いが良いのでしょうか、天候が大きく崩れることもなく、時々雲の隙間から日が差し込むこともあり、ちょうど良い気候の中で開会式を行うことができました。一この後すぐさま、ゲリラ的な豪雨に見舞われ、一時的に運動会がマヒしてしまいましたが…（TOT）

開会式では、サッカー部員が責任をもって進行させていただきました。開会の言葉の後、選手宣誓および準備体操の指揮をとらせていただきましたが、そのときに決してキレイではないものを選手の皆様にお見せしました（写真）。精一杯努力した結果ですので、お許しいただきたいと存じ上げますm(_ _)m

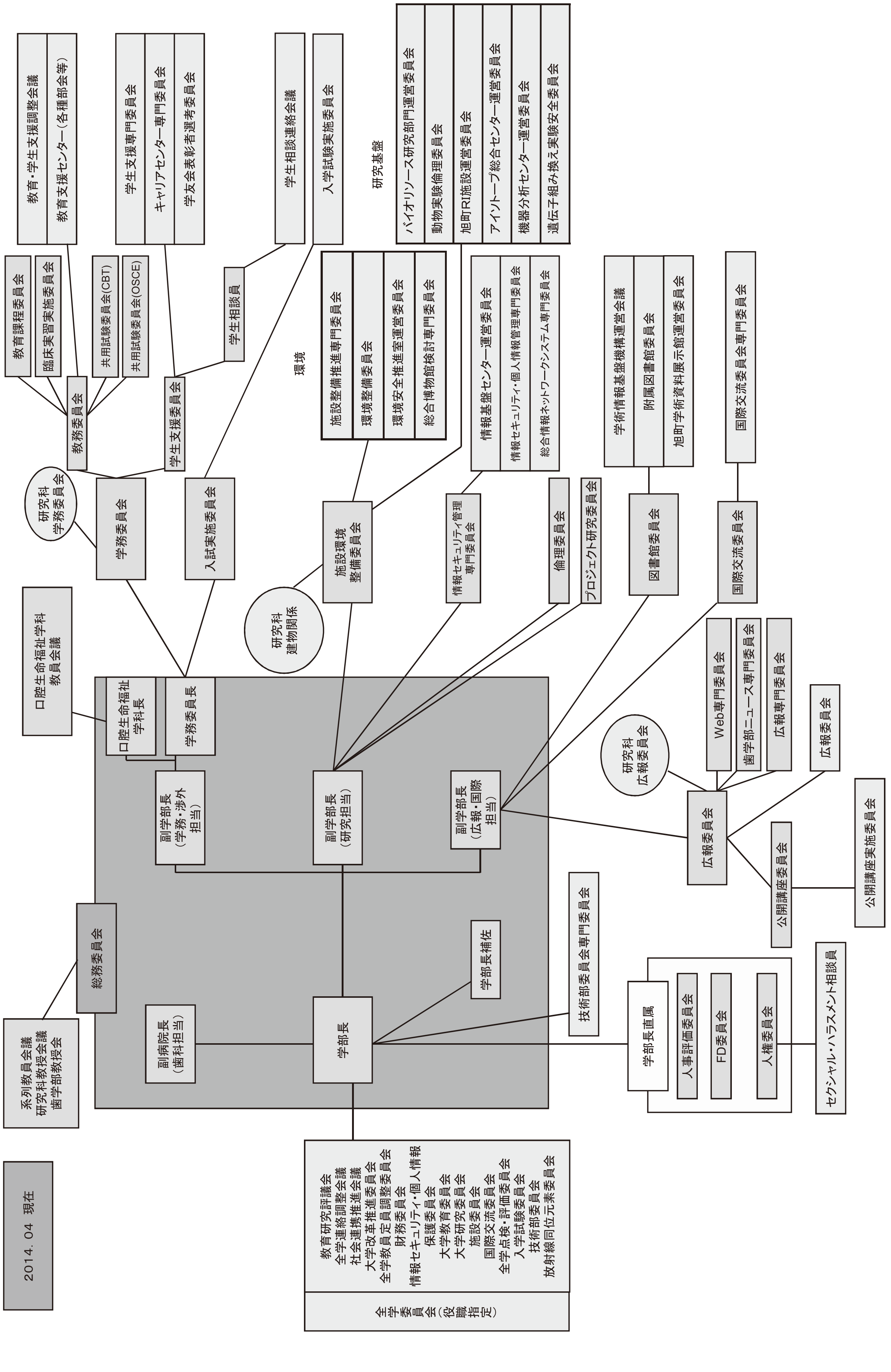
バッチリ化粧で踊り狂う偽ギャル部員。これでも毎晩練習しました

午前10時30分、競技が開始されました。競技種目は、①玉入れ、②ドッジボール、③借り物競争、④パン食い競争、⑤球送り、⑥15人16脚走、⑦10人リレー、全７種目です。学生たち、そして各診療科の先生方も、普段はあまり人に見せることのない、全力を尽くした力強い姿で、とても活気にあふれていました。このように、みんながひとつのことに力を合わせて取り組める機会があることを考えると、この運動会という行事も大きな意義を持つものだということを深々と感じることができました。

歯学部運動会は、ここ数年は毎年同じような競技種目であり、少し変えたらどうだというご意見も寄せられていました。そこで今年は、最終競技であるリレーに少し変更を加えました。ただ走っても面白くないということで、某男子高校の運動会を参考にし、リレーのバトンを野菜で行うことにしました。長ネギ、ゴボウ、ナス、トウモロコシ、ゴーヤ、大根、ブロッコリーがバトンとして採用され、各チーム10人で合計1100mリレーを行いました。バトンが大根となった６年生からは、「大根が重くて走れるか！」と言われましたが…申し訳ありませんでした。でも楽しんでいただけましたか？ちなみに、バトンに使用した野菜たちは、あとで５年生が責任をもって美味しくいただきました！(^^)

最終競技が終了し、今年も無事に歯学部運動会を終えることができました。私は運動会を運営する立場として、そしてまた競技に参加する者として、今回の運動会を大いに楽しむことができたと思います。これは運動会の準備や運営を一緒に頑張ってくれた５年生や、運動会に参加してくださった先生方、そして競技に積極的に参加して運動会を大いに盛り上げてくれた皆さんのお陰だと思っています。この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

《歯学部各種委員会》



教育・学生支援調整会議
教育支援センター（各種部会等）
学生支援専門委員会
キャリアセンター専門委員会
学友会表彰者選考委員会
学生相談連絡会議
入学試験実施委員会
研究基盤
バイオリソース研究部門運営委員会
動物実験倫理委員会
旭町RI施設運営委員会
アイソトープ総合センター運営委員会
機器分析センター運営委員会
遺伝子組み換え実験安全委員会
教育課程委員会
臨床実習実施委員会
共用試験委員会(CBT)
共用試験委員会(OSCE)
学生相談員
環境
施設整備推進専門委員会
環境整備委員会
環境安全推進室運営委員会
総合博物館検討専門委員会
情報基盤センター運営委員会
情報セキュリティ・個人情報管理専門委員会
総合情報ネットワークシステム専門委員会
学術情報基盤機構運営会議
附属図書館委員会
旭町学術資料展示館運営委員会
国際交流委員会専門委員会
教務委員会
学生支援委員会
研究科学務委員会
学務委員会
入試実施委員会
施設環境整備委員会
情報セキュリティ管理専門委員会
倫理委員会
プロジェクト研究委員会
図書館委員会
国際交流委員会
研究科建物関係
口腔生命福祉学科教員会議
口腔生命福祉学科長
学務委員長
副学部長（学務・渉外担当）
副学部長（研究担当）
副学部長（広報・国際担当）
Web専門委員会
歯学部ニュース専門委員会
広報専門委員会
広報委員会
研究科広報委員会
広報委員会
公開講座委員会
公開講座実施委員会
総務委員会
学部長補佐
技術部委員会専門委員会
系列教員会議
研究科教授会議
歯学部教授会
副病院長（歯科担当）
学部長
学部長直属
人事評価委員会
FD委員会
人権委員会
セクシャル・ハラスメント相談員
教育研究評議会
全学連絡調整会議
社会連携推進会議
大学改革推進委員会
全学教員定員調整委員会
財務委員会
情報セキュリティ・個人情報
保護委員会
大学教育委員会
大学研究委員会
施設委員会
国際交流委員会
全学点検・評価委員会
入学試験委員会
技術部委員会
放射線同位元素委員会
全学委員会（役職指定）
2014. 04 現在

平成26年度歯学部内委員会

平成26年４月１日現在

委　員　会　名	氏　名	職　名	対応する全学委員会	備　　考
―	前　田　健　康	系列長		任期 25.４.１～28.３.31
総務委員会	前　田　健　康	歯学部長		総括
	興　地　隆　史	副病院長		歯科担当
	小　野　和　宏	副学部長		学務・渉外
	宮　崎　秀　夫	副学部長		研究
	魚　島　勝　美	副学部長		広報・国際
	前　田　健　康	歯学科長		
	葭　原　明　弘	口腔生命福祉学科学科長		
	大　内　章　嗣	学部長補佐		
	小　野　和　宏	学務委員会委員長		
学務委員会	小　野　和　宏	学務委員会委員長	全学教育委員会	総括
	齋　藤　　功	教務委員長		教務
	山　崎　和　久	入試委員会委員長	入試実施委	入試
	山　村　健　介	学生支援委員会委員長		学生支援
	藤　井　規　孝	臨床実習委員会委員長		臨床実習
	葭　原　明　弘	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
教務委員会	齋　藤　　功	教務委員会委員長		総括
	北　川　純　一			
	大　内　章　嗣			教育課程（口腔生命福祉学科系）
	ステガロユ・ロクサーナ			教育課程（口腔生命福祉学科系）
	井　上　　誠			◎共用試験（CBT）
	中　島　貴　子			◎共用試験（OSCE）
	小　野　和　宏	オブザーバー		
教育課程委員会	齋　藤　　功			
	小　野　和　宏			
	高　木　律　男			
臨床実習実施委員会	藤　井　規　孝	委員長		
	芳　澤　享　子	第45期ヘッドインストラクター		
	勝　良　剛　詞	第44期ヘッドインストラクター		
	竹　中　彰　治	歯の診療科診療室		
	多部田　康　一	歯周病診療科診療室		
	五十嵐　直　子	義歯診療科診療室		
	秋　葉　奈　美	冠・ブリッジ診療科診療室		
	小　田　陽　平	口腔再建外科診療室		
	児　玉　泰　光	顎顔面外科診療室		
	丸　山　　智	口腔病理検査室		
	小　山　純　市	歯科放射線科診療室		
	中　島　貴　子	歯科総合診療部		
	村　山　昌　子	歯科外来		
	和　田　晶　子	歯科外来村山師長代理		
	照　光　　真	歯科麻酔科診療室		
	廣　富　敏　伸	予防歯科診療室		
	堀　　一　浩	口腔リハビリテーション科診療室		
	坂　井　幸　子	小児・障がい者歯科診療室		
	越　知　佳奈子	矯正歯科診療室		
	福　島　正　義	口腔生命福祉学科		
	石　川　裕　子	口腔生命福祉学科		
共用試験委員会（CBT）	井　上　　誠			必要な都度委員を指名
共用試験委員会（OSCE）	中　島　貴　子			必要な都度委員を指名
学生支援委員会	山　村　健　介	学生支援委員会委員長		総括
	依　田　浩　子			歯学科
	重　谷　佳　見			歯学科
	秋　葉　奈　美			歯学科
	石　川　裕　子			口腔生命福祉学科
	井　上　　誠		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	歯学部
	程　　珺		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	研究科
学生相談員	山　村　健　介			全学の学生相談室相談員・学生相談連絡会議は、井上教授、程准教授
	依　田　浩　子			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
入試実施委員会	山崎和久	入試委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
	早崎治明	前入試委員会委員長		補佐
	寺尾豊			
	泉健次	オブザーバー		
研究科学務委員会	齋藤功			総括
	葭原明弘			教務
	井上誠			学生支援
施設環境整備委員会	宮崎秀夫	副学部長		総括
	佐伯万騎男		施設整備専門委	◎
	吉江弘正		総合博物館検討専門委	
	大島勇人		動物実験倫理委員会	
	寺尾豊		遺伝子組み換え実験安全委	
	福島正義		口腔生命福祉学科（施設担当）	
共通施設専門委員会	宮崎秀夫	副学部長		
情報セキュリティ管理専門委員会	小林博		情報基盤センター運営委	総括
	鈴木一郎			IT一般
	西山秀昌			
	小田陽平			
図書館委員会	魚島勝美	副学部長		
	吉江弘正		附属図書館委員会	
	八木稔		附属図書館委員会	
国際交流委員会	魚島勝美	副学部長		
	魚島勝美		国際交流委員会専門委	
	ステガロユ・ロクサーナ			
	泉健次			
広報委員会	魚島勝美	副学部長	歯学部ニュース専門委	総括
	大島勇人		研究科広報委web担当、学部広報web専門委	◎
	鈴木一郎		研究科広報委web担当、学部広報web専門委	◎
	ステガロユ・ロクサーナ		広報委員会（学部）	◎
	吉羽邦彦		広報委員会（研究科）	◎
	黒川孝一		口腔生命福祉学科	◎
	加来賢		公開講座実施委員会	◎
研究科広報委員会（Web担当）	大島勇人			◎
	鈴木一郎			◎
歯学部広報委員会 Web専門委員会	大島勇人			◎
	鈴木一郎			
	黒川孝一			
歯学部ニュース専門委員会	魚島勝美			他の委員は准講層、助教層からローテーションで選出
広報専門委員会	ステガロユ・ロクサーナ		学部	
	吉羽邦彦		研究科	
歯学部公開講座委員会	加来賢		公開講座実施委員会	
プロジェクト研究委員会	宮崎秀夫	副学部長		
	山崎和久			
	川瀬知之			
	泉健次			
倫理委員会	宮崎秀夫	委員長		
	前田健康	学部長		
	興地隆史	副病院長		
	織田公光			
	葭原明弘			
	高木律男			
	渡邉修	学識経験者 法学部より		任期 25.4.1～27.3.31
人事評価委員会	前田健康	系列長		
	山村健介	任期制教員で基礎系の教授		
	林孝文	任期制教員で臨床系の教授		
	小田陽平	任期制教員である准教授、講師及び助教のうちから2人		
	土門久哲			

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成26年4月1日から平成28年3月31日まで
◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員

教　職　員　異　動

学　部

【教員等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
配置換	26．4．1	藤　井　規　孝	歯学教育研究開発学分野教授	医歯学総合病院教授
配置換	26．4．1	中　島　貴　子	歯学教育研究開発学分野講師	医歯学総合病院講師
採用	26．4．1	青　柳　裕　仁	生体歯科補綴学分野助教	医歯学総合病院医員
採用	26．4．1	丹　原　　　惇	歯科矯正学分野助教	医歯学総合病院医員
採用	26．4．1	塩　見　　　晶	歯学教育研究開発学分野特任助教	医歯学総合研究科修了
採用	26．4．1	竹　石　龍　右	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助手	
採用	26．4．1	川　﨑　勝　盛	小児歯科学分野教務補佐員	医歯学総合病院医員
採用	26．4．1	井　表　千　馨	歯科矯正学分野教務補佐員	医歯学総合研究科修了
採用	26．4．1	森　田　　　航	硬組織形態学分野研究支援者（科研費研究員）	京都大学理学研究科修了
採用	26．6．1	上　村　由紀子	摂食嚥下リハビリテーション学分野産学官連携技術者	
任期満了	26．6．30	重　谷　佳　見		う蝕学分野助教
採用	26．7．1	IDRUS ERIK	予防歯科学分野助教	インドネシア大学歯学部助手
採用	26．7．1	柿　原　嘉　人	歯科薬理学分野助教	トロント大学医学部リサーチアソシエイト
採用	26．7．1	山　中　裕　介	う蝕学分野助教	医歯学総合病院医員
昇任	26．8．1	永　田　昌　毅	顎顔面口腔外科学分野准教授	医歯学総合病院講師
採用	26．8．1	勝　見　祐　二	顎顔面口腔外科学分野助教	医歯学総合病院医員
採用	26．8．1	斎　藤　浩太郎	硬組織形態学分野助教	口腔生命科学専攻研究員
採用	26．8．1	渡　邊　賢　礼	摂食嚥下リハビリテーション学分野特任助教	医歯学総合病院医員

【事務等】

異動区分	年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
異動	26．4．1	臼　田　隆　太	歯学部事務室総務係長	監査室専門職員
異動	26．4．1	目　黒　栄　光	総務部企画課企画調査係長	歯学部事務室総務係長
採用	26．7．1	熊　木　由　紀	歯学部事務室総務係事務補佐員	
異動	26．8．1	押　木　　　霞	人文社会・教育科学系総務課庶務係	歯学部事務室総務係

病　院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
育児休業復帰	26. 4. 1	佐野富子	矯正・小児系歯科助教	
配置換	26. 4. 1	藤井規孝	医歯学系教授	歯科総合診療部教授
配置換	26. 4. 1	中島貴子	医歯学系講師	歯科総合診療部講師
採用	26. 4. 1	加藤祐介	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	坂上直子	口腔外科系歯科医員	新規
採用	26. 4. 1	浅井佑介	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	成松花弥	口腔外科系歯科レジデント	新規
採用	26. 4. 1	齋藤大輔	口腔外科系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	齋藤直朗	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	倉部華奈	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	須田大亮	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	齋藤正直	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	小玉直樹	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	勝見祐二	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	西川敦	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	五十嵐友樹	口腔外科系歯科医員	新規
採用	26. 4. 1	上野山敦士	口腔外科系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	山田瑛子	口腔外科系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	新垣元基	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	26. 4. 1	深井真澄	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	渡部桃子	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	原夕子	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	永井孝宏	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	曽我麻里恵	口腔外科系歯科レジデント	継続
採用	26. 4. 1	吉川博之	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	金丸博子	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	山崎麻衣子	口腔外科系歯科医員	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	26. 4. 1	小 玉 由 記	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	佐 藤 由美子	口腔外科系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	平 原 三貴子	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	山 田 友里恵	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	須 田 有紀子	口腔外科系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	岩 瀬 陽 子	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	澤 味 規	矯正・小児系歯科医員	新規
採用	26. 4. 1	鹿児島 暁 子	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	左右田 美 樹	矯正・小児系歯科レジデント	新規
採用	26. 4. 1	村 上 望	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	村 上 智 哉	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	黒 澤 美 絵	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	花 﨑 美 華	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	26. 4. 1	中 島 努	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	26. 4. 1	小 原 彰 浩	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	篠 倉 千 恵	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	吉 居 朋 子	矯正・小児系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	工 藤 和 子	矯正・小児系歯科医員	新規
採用	26. 4. 1	中 田 樹 里	矯正・小児系歯科レジデント	新規
採用	26. 4. 1	小 栗 由 充	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	新規
採用	26. 4. 1	焼 田 裕 里	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	新規
採用	26. 4. 1	大 竹 正 紀	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	髙 橋 功次朗	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	高 辻 華 子	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	西 野 和 臣	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	北 見 公 平	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	坂 上 馨	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	26．4．1	佐藤　知弥子	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	眞舘　幸平	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	大倉　麻里子	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	上村　藍太郎	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	大森　裕子	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	阿部　遼	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	26．4．1	新島　綾子	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	26．4．1	村上　智子	矯正・小児系歯科レジデント（パートタイム）	新規
採用	26．4．1	堀　沙耶香	予防・保存系歯科医員	継続
採用	26．4．1	牧野　由佳	予防・保存系歯科医員	継続
採用	26．4．1	皆川　久美子	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	佐藤　美寿々	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	瀧口　知彌	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	笹嶋　真嵩	予防・保存系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	本田　朋之	予防・保存系歯科医員	継続
採用	26．4．1	奥井　隆文	予防・保存系歯科医員	継続
採用	26．4．1	野中　由香莉	予防・保存系歯科医員	継続
採用	26．4．1	中島　悠	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	岡田　萌	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	堀水　慎	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	宮澤　春菜	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	小林　美登	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	有松　圭	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続
採用	26．4．1	皆川　高嘉	予防・保存系歯科医員（パートタイム）	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	26．4．1	山　田　ひとみ	予防・保存系歯科医員 （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	神　谷　真　菜	予防・保存系歯科医員 （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	花　井　悠　貴	予防・保存系歯科医員 （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	中　島　麻由佳	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	小　島　杏　里	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	松　田　由　実	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	島　田　惇　史	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	佐　藤　圭　祐	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	26．4．1	根　津　　　新	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	26．4．1	保　苅　崇　大	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	26．4．1	黒　木　　　歩	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	26．4．1	山　中　裕　介	予防・保存系歯科医員	継続
採用	26．4．1	大　倉　直　人	予防・保存系歯科医員	継続
採用	26．4．1	大　墨　竜　也	予防・保存系歯科医員	新規
採用	26．4．1	枝　並　直　樹	予防・保存系歯科レジデント	新規
採用	26．4．1	武　井　絵梨花	予防・保存系歯科医員 （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	伊　藤　崇　史	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	日　向　　　剛	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	坂　上　雄　樹	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	26．4．1	末　山　有希子	予防・保存系歯科レジデント （パートタイム）	新規
採用	26．4．1	加　来　咲　子	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	26．4．1	井　田　貴　子	摂食機能・補綴系歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	江　口　香　里	摂食機能・補綴系歯科レジデント （パートタイム）	継続
採用	26．4．1	金　城　篤　史	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	26．4．1	三　上　絵　美	摂食機能・補綴系歯科医員	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	26. 4. 1	山鹿義郎	摂食機能・補綴系歯科医員	新規
採用	26. 4. 1	小飯塚仁美	摂食機能・補綴系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	渡邊賢礼	摂食機能・補綴系歯科医員	新規
採用	26. 4. 1	林宏和	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	船山さおり	摂食機能・補綴系歯科医員	継続
採用	26. 4. 1	杉友希	摂食機能・補綴系歯科レジデント	新規
採用	26. 4. 1	羽尾直仁	摂食機能・補綴系歯科レジデント	新規
採用	26. 4. 1	酒井翔悟	摂食機能・補綴系歯科レジデント（パートタイム）	継続
採用	26. 4. 1	長谷川真奈	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	26. 4. 1	八田あずさ	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	26. 4. 1	金子美奈未	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	26. 4. 1	平山恵美子	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	26. 4. 1	外島彩	歯科総合診療部レジデント	新規
採用	26. 4. 1	高嶋真樹子	顎関節治療部医員	継続
採用	26. 4. 1	河村篤志	顎関節治療部レジデント	継続
採用	26. 4. 1	小川信	インプラント治療部医員	継続
採用	26. 4. 1	清水太郎	インプラント治療部医員	継続
採用	26. 4. 1	阿部達也	病理検査室レジデント	継続
採用	26. 5. 1	加藤祐介	口腔外科系歯科特任助教	口腔外科系歯科医員
採用	26. 5. 1	中島悠	予防・保存系歯科医員	予防・保存系歯科医員（パートタイム）
採用	26. 5. 1	茂木香織	歯科総合診療部医員（パートタイム）	新規
採用	26. 5. 1	中村太	歯科総合診療部レジデント（パートタイム）	新規
採用	26. 5. 1	齋藤祐太	歯科総合診療部レジデント（パートタイム）	新規
退職	26. 6. 30	小山純市		口腔外科系歯科助教
退職	26. 6. 30	山中裕介	（26. 7. 1 医歯学系助教）	予防・保存系歯科医員
育児休業復帰	26. 7. 1	川﨑真依子	摂食機能・補綴系歯科助教	
採用	26. 7. 1	金子広美	摂食機能・補綴系歯科医員	新規
退職	26. 7. 31	勝見祐二	（26. 8. 1 医歯学系助教）	口腔外科系歯科医員
退職	26. 7. 31	渡邊賢礼	（26. 8. 1 医歯学系特任助教）	摂食機能・補綴系歯科医員
昇任	26. 8. 1	永田昌毅	医歯学系准教授	口腔外科系歯科講師
採用	26. 8. 1	小栗由充	矯正・小児系歯科医員	矯正・小児系歯科医員（パートタイム）

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	26. 4. 1	金子 朋葉	看護部東3階病棟看護師	新規
採用	26. 4. 1	島 有梨佳	看護部東3階病棟看護師	新規
採用	26. 4. 1	角田 麻未	看護部東3階病棟看護師	新規
採用	26. 4. 1	宮路 七瀬	看護部東3階病棟看護師	新規
休職更新	26. 4. 1	小平 友里枝		看護部東3階病棟看護師
育児休業復帰	26. 4. 1	石井 絵美	看護部外来4・5階看護師	
所属換	26. 4. 1	藤井 淑子	看護部外来2・3階看護師	看護部東3階病棟看護師
所属換	26. 4. 1	柿本 ユミ	看護部外来2・3階看護師	看護部外来4・5階看護師
所属換	26. 4. 1	樋浦 美樹	看護部西5階看護師 (総合周産期母子医療センターN)	看護部東3階病棟看護師
育児休業復帰	26. 4. 1	石井 絵美	看護部外来4・5階看護師	集中治療部看護師
採用	26. 4. 1	阿部 春奈	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
採用	26. 4. 1	山田 麻衣子	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
育児休業	26. 4. 11	村山 愛		看護部東3階病棟看護師
育児休業	26. 4. 15	村上 絵理香		看護部東3階病棟看護師
育児休業	26. 4. 22	大貫 倫子		看護部東3階病棟看護師
休職復帰	26. 6. 1	小平 友里枝	看護部東3階病棟看護師	
採用	26. 6. 1	阿部 弘美	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
退職	26. 6. 30	皆川 渚		診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士
採用	26. 7. 1	小林 実可子	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
任期満了	26. 8. 31	渡邉 美幸		診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	26. 4. 1	菊池 博之	経営企画課長	文部科学省高等教育局 医学教育課医学教育係長
昇任	26. 4. 1	小林 晴男	医事課長	経営企画課副課長
配置換	26. 4. 1	木村 久明	管理運営課長	医事課長
配置換	26. 4. 1	本田 政博	人文社会・教育科学系総務課長	管理運営課長
配置換	26. 4. 1	清水 紀之	経営企画課副課長	総務部総務課副課長
配置換	26. 4. 1	岩田 尚志	総務課総務係長	総務部総務課秘書係長
配置換	26. 4. 1	星野 智裕	管理運営課管理係長	医事課診療請求係長
配置換	26. 4. 1	鈴木 忍	管理運営課医療材料係長	研究支援部産学連携課地域連携係長
配置換	26. 4. 1	佐藤 泉穂	管理運営課臨床研究支援係長	医事課診療管理係長
配置換	26. 4. 1	今村 尊博	医事課医事総括係長	医事課専門職員

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	26. 4. 1	村 山 　 登	医事課診療管理係長	管理運営課管理係長
配置換	26. 4. 1	山 岸 広 茂	医事課診療請求係長	医歯学系保健学科事務室総務係長
配置換	26. 4. 1	丸 山 隆 行	総務部人事課職員人事係長	総務課総務係長
配置換	26. 4. 1	佐 藤 栄 作	財務部資産管理課収入係長	管理運営課臨床研究係長
配置換	26. 4. 1	乙 川 孝 夫	人文社会・教育科学系総務課 新潟附属学校係長	医事課医事総括係長
配置換	26. 8. 1	齋 藤 真 紀	総務課総合臨床研修係長	学務部学生支援課学務企画係長
配置換	26. 8. 1	丸 山 浩 一	経営企画課経営分析係長	経営企画課医療情報係長
配置換	26. 8. 1	青 山 孝 明	経営企画課医療情報係長	医事課審査係長
配置換	26. 8. 1	長谷川 　 亨	医事課審査係長	経営企画課経営分析係長
配置換	26. 8. 1	吉 井 聡 子	人文社会・教育科学系学務課 教育学部教務係長	総務課総合臨床研修係長

ミニコラム

歯学部を支える方々

“味方”になりたい

事務室総務係　半井野　浩　明

　採用後初めて配属された部署で約２年、総務係として出張関係や物品購入の検収・伝票処理などザックり言いますと主に会計的な業務を担当してきました。昨今の社会的な状況からもシビアにならざるを得ないことも多く、中には「総務係の半井野さんは厳しい会計マンだ」と思われた方もいるかもしれません。私が常に思うのは、先生方の敵になるのではなく、味方でありたいということです。第３者の目に触れた時のリスクから先生を守りたいと思うが故にシビアになってしまうというジレンマの中、その思いが先生方に伝わっていたとしたら、総務係として役割を果たせたと感じます。今後も、先生方が研究の発展、熱意ある指導に専念できるよう、よき“味方”になっていければ幸せです。日頃の温かい歯学部の先生方に、心から感謝申し上げます。大好き、歯学部。

アイシテル、シガクブ。

事務室総務係　石　栗　慎　也

　事務室総務係の石栗と申します。昨年８月より歯学部でお世話になり、早１年が経ちました。業務は主に、実習設備などの予算要求や、研究設備などの契約、年度末の決算など、歯学部のお金に関わること全般に携わっています。

　歯学部では現在大型改修工事の真っ只中で予算規模も大きく、また国立大学への予算が削減されている中で歯学部は多様な実績と独創的なプロジェクトで予算を獲得しており、先生方の熱意に感銘しながら一緒に勤めさせていただいていることに感謝しております。さらにシンポジウムでは外国で仕事もさせて頂き（写真。筆者左）、歯学部でしかできない経験を多くさせて頂いて非常にやりがいを感じております。校舎の完成と次回の外国出張を楽しみに、歯学部にとって少しでもお力になれるよう勤めて参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

編　集　後　記

お忙しい中、快くご執筆下さった先生方、職員の皆様、学生の皆さんに深く御礼申し上げます。また、編集長の齊藤先生をはじめ編集委員の先生方、前編集委員の重谷先生のお力により、初めての編集委員を何とか務めることが出来ました。心より感謝申し上げます。編集委員という特権を生かして、お話を伺ってみたい先生方に原稿を依頼し、原稿を真っ先に楽しく拝読し、原稿から伝わる熱意に力をいただき、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。携わった全ての方々の心がこもった本号をたくさんの皆様にお読みいただければ幸いです。

歯科矯正学分野　越知佳奈子

今回、「クラブ紹介」「海外大学訪問」「診療技術支援部歯科衛生部門だより」「歯学部運動会を終えて」の項目を担当させて頂きました。原稿を依頼した皆様、突然のメールでのお願いにも関わらず嫌がらずに引き受けて下さり、本当にありがとうございました。皆様のお力を借りて、無事に発行する事が出来ました。この歯学部ニュースが、皆様の交流の場、情報源となりましたら幸いです。

顎顔面口腔外科学分野　小山　貴寛

今回、初めて歯学部ニュース編集委員を担当させていただきました。突然の執筆依頼にも関わらず快く引き受けてくださった皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。また、学生の皆さんには入稿締切が夏季休暇直前となり、しかも依頼から入稿までが短期間と、時間的な制約があるなかでご協力いただき本当にありがとうございました。

小児歯科学分野　坂井　幸子

早いもので新潟に来てから丸５年が経過しました。所属分野内だけでなく学部の仕事も少しずつ担当させていただけるようになり、今回、初めて歯学部ニュースの編集委員となりました。学生や教職員などの学内関係者に加え、保護者の方にも興味を持っていただけるよう、齊藤編集委員長をはじめとする編集委員の先生方と協力して完成させましたので、少しでも楽しんでいただければ幸いです。また、突然のお願いにもかかわらず、執筆をお引き受けくださいました先生方、関係者の皆様に感謝いたします。この場を借りて、御礼申し上げます。

摂食嚥下リハビリテーション学分野　辻村　恭憲

今号においては、歯学部の学生さんや職員の60名あまりが原稿執筆に関わっており、年２号の発刊を考慮すると歯学部という小さい枠組みでは、かなりの頻度で関係者へ執筆が依頼されているものと思われます。執筆担当者には大変なご苦労をおかけしておりますが、活気ある生の声を読者へお届けできることから、楽しみにしている方も多いと聞いております。また、新潟大学歯学部では、海外短期留学や海外大学訪問などイベントやサポートが充実していますが、これは他大学にはない本学の強みでもあります。今後も歯学部ニュースにて楽しい報告ができるよう、学生さんや若手ドクターが多くの経験を積んでいかれることを切に願います。最後になりますが、４名の編集委員の先生方と原稿を執筆いただいた皆様、そして貴重な写真をご提供いただきました林孝文教授に深謝いたします。

小児歯科学分野　齊藤　一誠

表紙・裏表紙写真の説明

表紙・裏表紙の撮影データ
撮 影 地：ルーマニア
撮 影 日：2014年６月
使用機材：OLYMPUS E-P５／M.ZUIKO DIGITAL ED 12㎜ F2.0／絞り：F5.0・シャッター速度：400分の１秒（表紙）・OLYMPUS E-P５／M.ZUIKO DIGITAL 45㎜ F1.8／絞り：F4.0・シャッター速度：500分の１秒（裏表紙）

コメント：表紙では、35㎜判換算焦点距離で24㎜相当の広角レンズを使って、手前の窓に飾られた花にピントを合わせ被写界深度内に収まる程度にやや絞りを開け気味にして、遠景のオープンカフェをいくぶんアウトフォーカスとして緩い感じをだすことで、のどかな東欧の雰囲気が出るように狙ってみました。
裏表紙では、中世の街並みが保存されている世界遺産の町で、ちょっと見過ごしてしまいそうな観光案内所の入り口を切り取ってみました。35㎜判換算焦点距離で90㎜相当の中望遠レンズで絞りは開け気味ですが、被写体が平面的でありカメラとの距離もそれなりにあるため、パンフォーカス調に、全画面にピントが来ているかのように表現することができました。

本誌中の写真の使用機材
ボ デ ィ：OLYMPUS E-P３、E-P５
レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12㎜ F2.0、M.ZUIKO DIGITAL 17㎜ F1.8、M.ZUIKO DIGITAL 45㎜ F1.8、M.ZUIKO DIGITAL ED 60㎜ F2.8 Macro

撮 影 者：林　孝文

歯学部ニュース

平成26年度第１号（通算125号）

発　行　者　　新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者　　齊藤　一誠、魚島　勝美
編 集 委 員　　越知佳奈子、小山　貴寛
　　　　　　　坂井　幸子、辻村　恭憲
印　刷　所　　㈱ウィザップ

Cultural Heritage
INFO POINT
Weltkulturerbe
Transylvanian Highlands
Mioritics
Keep hiking
Transylvanian Highlands
Maps * Brochures * Guided tours
Rent-a-bike * Transfers * Events
GUIDED TOURS
LIBERĂ
Transilvania
FREIEN
Siebenbürgens
FREE
Transylvania